

平成27年度

研究のまとめ

研究テーマ

一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導

～プロジェクトチームの実践をとおして（2年次）～



平成28年3月



鹿児島県立大島養護学校 テーマ研究

目次

1	はじめに	1
2	研究基調	2
3	研究授業・授業検討会（特別支援学校授業力向上実践協議会資料）	11
4	プロジェクト研究	
	A チェックリスト	29
	B 年間指導計画	40
	C キャリア教育	53
	D アセスメント	66
5	研究のまとめ	83
6	資料	87
8	おわりに	113
9	研究同人	114
10	おまけのページ	115

<表紙画>

2016 AMAMI 市美術展 一般美術の部 入選

中学部3年 仲谷 陸 「楽しかった修学旅行～三人部屋～」

はじめに

特別支援学校による幼・保、小・中学校、高等学校への巡回相談は、ここ数年軌道に乗り地域の学校等の要請に応じた職員研修での理解・啓発や、児童生徒個々の相談に積極的に対応するようになりました。本校では、併せて地区が受けた文部科学省委託の教育資源活用モデル地域事業において、効果的な支援システム等について模索してきました。

各特別支援学校では、夏期休業中を中心に、各学校独自の研修会を開催し、自校の職員のレベルアップとともに地域の小・中学校等の教職員の特別支援に関する資質向上にも寄与してきました。本校でも、同様の取組を重ねているところですが、本地区では交通上の問題から奄美大島以外の離島の教職員の参加が難しいため、離島4島での研修会の実施を検討しているところです。この取組では、地域の支援力の強化を図るために保育所、幼稚園、学童施設等の職員にも参加を募り、特に重点を置いた理解・啓発を図っていきたいと考えています。

また近年、各特別支援学校（知的）では、遅れの程度の比較的少ない生徒が高等部へ多く在学するようになり、彼らの多くが学習上の困難に加えて、生活上の基礎的なスキル、社会的行動やコミュニケーション能力の習得等に課題をもっていますが、併せて同じような傾向のある中学校特別支援学級の40%近くの生徒たちが高等学校に進学している事実も見逃してはなりません。高等学校では、このような生徒たちの理解、具体的な支援等について理解・啓発が不十分で対策が急がれると感じています。彼らの学習上、生活上の困難に対する支援とともに生徒指導上の課題や生育環境等については、関係機関と連携したサポートを検討していく必要があります。本校では、今年度高等学校からの要請を受けて、発達障害に関する理解・啓発の研修や授業参観を通した個々の生徒の支援方法の模索を始めました。幼・保、小・中学校への支援が定着し、ある程度の理解や相談システムができつつある中で、高等学校においては要請の少なさもあって取組が不十分であることは否めません。研修では、ある程度の理解は促進されましたが、意見交換ではカリキュラム履修においてどの程度まで支援する必要があるのか、また支援への思いはあっても、個々への対応が物理的にどの程度可能かなどの取り組むことへの不安も出されました。支援の必要性を根気強く訴え、その効果を検証する取組が求められます。

さて、本校では「一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導」について研究に取り組みました。具体的には、①改訂版チェックリスト（案）の作成②生単、作業学習における単元一覧表の作成及び目標の系統性を整理③「キャリア教育全体計画」を基に領域・教科を合わせた指導の指導内容を整理④発達段階表の作成と活用（アセスメント）の四つのグループで、すべての職員が積極的に関わりをもつ取組でした。地区の子どもたちの豊かな生活を願いつつ、日々研鑽に励んだ本校の職員に感謝し敬意を表します。来年度は、この二年間の取組を振り返り、実践で検証してほしいと願っています。三年計画の二年次内容ですが、来年度の研究がさらに充実するために、御意見、御指摘をいただけたらありがたく存じます。

最後に、御多用な中、年間を通して懇切丁寧な御指導、御助言を賜りました義務教育課特別支援係の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

校長 中村周一郎

研究基調



研 究 基 調

I	研究テーマと概要・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1	1年次の概要	
2	2年次の概要	
II	研究テーマ設定の理由・・・・・・・・・・・・	2
1	研究テーマの視点	
2	本校の学校教育目標、めざす生徒像から	
3	学校経営方針の重点取組事項から	
4	各学部の教育目標から	
5	特別支援教育に関する動向から	
6	これまでの研究から	
7	1年次の研究から	
8	本校や児童生徒の実態から	
8	学校評価の課題・本校職員のニーズから	
III	研究テーマの意味（捉え方）・・・・・・・・	6
1	一人一人の自立と社会参加とは	
2	一貫性・継続性のある指導とは	
IV	研究の詳細・・・・・・・・・・・・・・・・	8
1	研究の目標	
2	研究仮説	
3	研究の構想	
4	研究の方法	
5	研究組織	
6	研究の流れ（計画）	

I 研究テーマと概要

一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導

～アセスメントを利用した指導を中心に（1年次）～

～プロジェクトチームの実践をとおして（2年次）～

1 1年次の概要

心理検査(知能検査)や本校の財産である「チェックリスト」を基にした分析(解釈)を複数の職員で行うことにより、アセスメント※¹の一連のプロセスを学び合い、一貫性のある指導と教員の特別支援教育に関する知識・技能の向上へつなげることができた。

※1 アセスメントを個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べるための一連のプロセスとして捉える。つまり、状態像を理解することだけがアセスメントではない。

2 2年次の概要

1年次の研究であげられた解決すべき課題について、テーマ研究の時間を用いて解決(改善)するという考え方の下、学部を解いた下に示す四つのプロジェクトチームを編成したことにより、年度当初に掲げた「研究のゴール」を達成することができた。

(1) チェックリストチーム

- ・ 全職員が同じ視点で評価できる評価基準を明確にした改訂版の作成
- ・ 検査項目と説明書を一体化した様式の作成
- ・ 参考にした文献を明記
- ・ 年間指導計画との関連

(2) 年間指導計画チーム

- ・ 生単：年間指導計画（小一中一高）の単元一覧表の作成及び目標の系統性を整理
- ・ 作業：中学部，高等部の各作業班共通の単元一覧の作成（目標，展開のつながり）

(3) キャリア教育チーム

- ・ 学部目標から各学部のキーワードを設定(それぞれの段階で習得させたい力(目標)の明確化)
- ・ 本校「平成27年度キャリア教育全体計画」における育てたい力の項目を基に「領域・教科を合わせた指導」の指導内容を整理
- ・ 授業改善シートを活用した授業実践

(4) アセスメントチーム

- ・ 文献を基にした発達段階表の作成（4グループ）
- ・ 作成した発達段階表を活用し、対象生徒の分析を（解釈）実施
- ・ 県音研や義務教育課学校訪問での研究授業，授業検討会の実施と授業改善

II 研究テーマ設定の理由

1 研究テーマ設定の視点

研究テーマは、以下に示す事項を鑑みて設定した。その視点を図に示す。(図1)

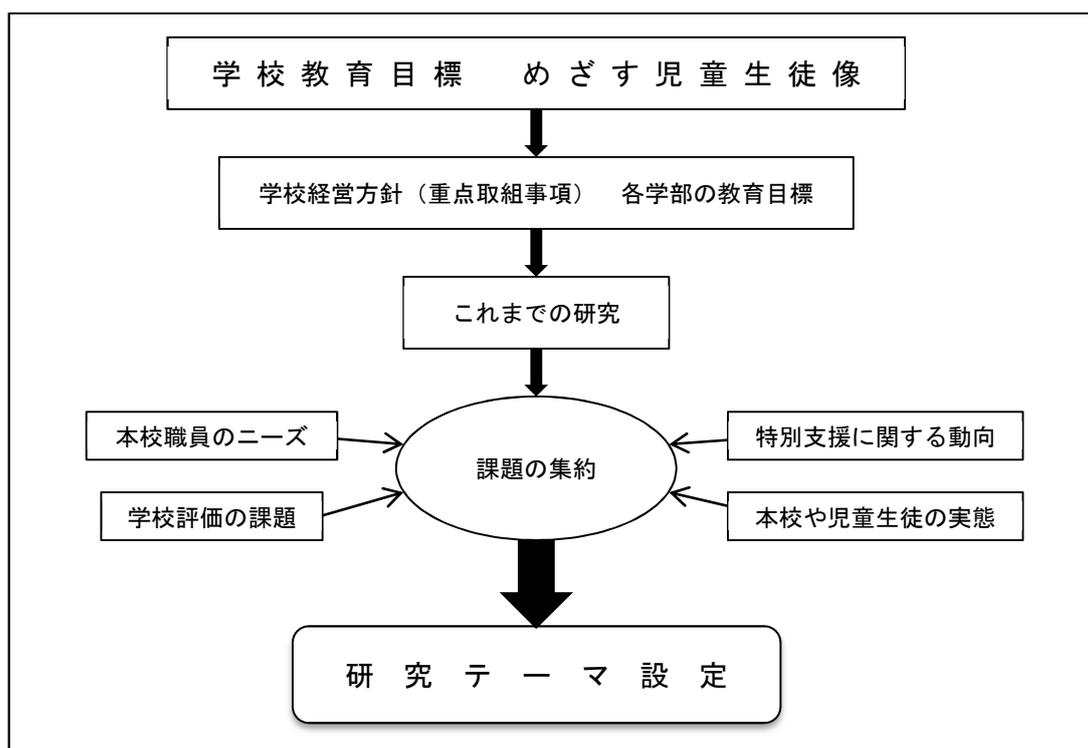


図 1 研究テーマの視点

2 本校の学校教育目標、めざす児童生徒像から

(1) 学校教育目標

児童生徒一人一人の発達段階や特性等に応じた教育を行い、生きる力を身に付け、社会参加や自立に向けて、「明るく、強く、豊かに」生きる人間を育成する。

(2) めざす児童生徒像

- ・ 健康に関心をもち、明るく、元気で、礼儀正しい児童生徒
- ・ 周りの人の支援を受けながら、将来の社会参加と自立をめざす児童生徒
- ・ 友達と仲良くし、豊かな心をもち、命輝く児童生徒

3 学校経営方針の重点取組事項から

(1) 児童生徒の実態や特性等を踏まえた適切な教育の追究

- ・ 中等教育の充実のための試行的取組(中学部・高等部の6年間の連携・継続性)

(2) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画の活用方法の検討

- ・ 個別の教育支援計画及び個別の指導計画の活用(テーマ研究との関連性と授業づくりとの関連性の検証)

(3) 授業力向上のための教職員研修の充実

- ・ 授業力向上の取組(テーマ研究・一般研修《授業提供及び実践紹介等》、経験年次別研修)の継続・充実

4 各学部の教育目標から

- ・ 児童の命を守り育み、日常生活に必要な力を身に付けるとともに、身の回りのことに自ら意欲的に取り組もうとする児童を育成する。【小学部】
- ・ 生徒の命を守り育み、集団生活や地域生活に必要な力を身に付けるとともに、自発的に周りの人と協力し合おうとする生徒を育成する。【中学部】
- ・ 生徒の命を守り育み、職業生活や社会生活に必要な力を身に付けるとともに、積極的に社会参加しようとする生徒を育成する。【高等部】

5 特別支援教育に関する動向から

(1) インクルーシブ教育システムの理念

- ・ 自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供
- ・ 一貫した指導・支援ができるような個別の教育支援計画の活用(引継ぎ, 情報交換)
- ・ すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有することが求められる

(2) 特別支援学校学習指導要領

○ 教育目標

児童及び生徒の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立を図るために必要な知識, 技能, 態度及び習慣を養う

○ 各教科の基本的な考え方

- ・ 特別な支援や配慮が必要な児童生徒の状態は、環境的・社会的条件で変わり得る可能性がある
- ・ 教材・教具や補助用具を含めた学習環境の効果的な設定をはじめとして、児童生徒へのかかわり方の一貫性や継続性の確保が大切

6 これまでの研究から

本校では、これまでに「個別の指導計画」, 「個別の教育支援計画」, 「チェックリスト」及び「あゆみ(通知表)」の様式とその作成システムについて先駆的に「テーマ研究」にて研究を進め、年度ごとによりよい方向に改善がなされ、大島養護学校の財産として現在に至っている。

近年では、毎時間の授業を重視して、題材等に関する実態把握、目標設定の在り方、それを達成するための教師の手立てや状況設定、評価の在り方など「授業づくり」における専門性を高める実践研究に取り組んできた。(表1)

また、平成 24・25 年度は「語り合う」というキーワードを共有し、ワークショップ型の授業検討会を用いた PDCA サイクルのシステム確立を目指し、相互研修に取り組んできた。その結果、授業研究での焦点化した話し合い及び全員が意見を出し合えるシステム作りや日常の学習指導に生かされる授業研究と成果として得られた。一方、個別の指導計画と授業との関連やチェックリストの活用などが課題として挙げられた。

7 1年次の研究から

1年次(平成 26 年度)は、研究の方法(手立て)として、副テーマ「アセスメントを利用した指導を中心に」を掲げ、心理検査(知能検査)や本校の財産である「チェックリスト」を基にした分析(解釈)を複数の職員で行うことにより、アセスメントの一連のプロセスを学び合い、一貫性のある指導と教員の特別支援教育に関する知識・技能の向上へつなげることができた。

一方、研究をとおして、以下のような解決すべき課題があげられた。

- ・ チェックリストの項目, 判断基準の見直し
- ・ 生活単元学習及び作業学習における年間指導計画の見直し(学部を越えて)
- ・ 自立と社会参加に必要な能力の洗い出し(それぞれの段階で習得させたい力(目標)の明確化, 学部教育目標との関連性, 継続性)
- ・ 1年次の深化(子どもの実態把握と目標設定, 研究授業, 授業検討会)

表 1 本校におけるテーマ研究の過程(抜粋)

年度	研究テーマ	研究紀要等
平成 15～16 年度	個別の指導計画を活用するために ～様式の改善とシステム作り～	「碧海」第 23 集 別冊資料集
平成 17～18 年度	一人一人のニーズに応じた個別の教育支援計画はどうあればよいか ～個別の指導計画を生かした取り組みの検討～	「碧海」第 24 集
平成 19～20 年度	児童生徒一人一人がかがやく授業の実践をめざして ～日々の子どものかかわりや実践を通して～	「碧海」第 25 集
平成 21～22 年度	生活に生かす力をつける授業づくり ～授業力向上を目指して～	「碧海」第 26 集
平成 23 年度	明日に生かせる指導法 ～「やってみる?」「やってみよう!」「やってよかった♪」～	
平成 24 年度	みんなで語り合う授業づくりと授業研究 ～思いを授業改善につなげよう～	
平成 25 年度	児童生徒の生きる力を育む授業づくり ～みんなで語り合う PDCA サイクルを通して～	
平成 26～28 年度	一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導 ～アセスメントを利用した指導を中心に(1年次)～	
	一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導 ～プロジェクトチームの実践をとおして(2年次)～	

8 本校や児童生徒の実態から

- ・ 大島地区唯一の特別支援学校
- ・ 児童生徒の中には、視覚障害、聴覚障害、病弱を併せ有する者や日常生活において医療的ケアを必要とする者も在籍しているなど、実態は様々
- ・ 大島本島以外の離島などから近隣の施設(社会福祉法人 クリスト・ロア会 希望の星学園)(以下「学園」という)に入所し、登校する児童生徒もいる

9 学校評価の課題・本校職員のニーズから

(1) 平成 25 年度学校評価の課題

- ・ 中等教育の充実
- ・ 他学部・他学級への計画的授業参観による授業力向上

(2) 職員アンケート(平成 26 年 5 月実施)《資料 1》

- ・ 行われている指導・支援が将来的に(中・高等部, 社会に出てから), どのようにつながっていくのかが把握・理解した上で授業を立てていきたい。
- ・ 「〇〇な実態であり, △△な課題があるから」とか「こういう良さをもっと伸ばし, 次へのステップにしたいから」という視点での授業づくりと教師自身の評価をつけるということが大切
- ・ アセスメントなくして指導は成り立たない
- ・ 指導にあたって, アセスメントがしっかりされていると課題は明確になる
- ・ 日々の教育の中で, 目標の設定の仕方, 評価の方法, 実践の難しさを感じている
- ・ 児童生徒の発達段階や障害の特性をしっかりと把握した上での指導が重要

上記の項目から課題を集約すると, これまでの研究の成果(財産)を活用しながら, 教員として特別支援教育に関する専門性を高め, 児童生徒の自立と社会参加を見据え, 一貫性・継続性のある指導を実践することが大切である。このことが, 学校教育目標にある「児童生徒一人一人の発達段階や特性等に応じた教育を行い」の具体的実践であり, 「社会参加や自立に向けて, 『明るく, 強く, 豊かに』生きる人間を育成する」の実現につながるものと考えられ, 本研究テーマを設定した。

Ⅲ 研究テーマの意味（捉え方）

1 一人一人の自立と社会参加とは

中央教育審議会初等中等教育分科会の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成 24 年 7 月 23 日）の中で、共生社会について「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である」と述べられ、そのために「障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要があると考える」としている。さらに、インクルーシブ教育システムにおいて「個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供」できる学び場の一つとして特別支援学校があげられている。

そこで本校では「一人一人の自立と社会参加」を以下のように確認したい。

一人一人の自立と社会参加とは、個別の教育的ニーズを基に身に付けてきた生きる力を生かしながら、地域社会における体験的な学習や主体的に行動・判断することを通して、必要な支援を受けながら積極的に働いたり、楽しい生活を送ったりすることである。

このことは、「一人一人の自立と社会参加」≠「就労」という意味も含んでいる。

以下に各学部における「一人一人の自立と社会参加」につながる具体的な目標と「めざす子ども像」の広がりを示す。（表 2）（図 2）

表 2 各学部における自立と社会参加につながる目標(各学部の教育目標から)

小学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身の自立的な生活を送ることができる。 ・ 周囲の人と豊かな関係を築くことができる。 ・ 自分の気持ちや要求を伝えることができる。 ・ 集団生活に必要なルールや役割を理解することができる。 ・ 一日の生活や学校行事に見通しをもつことができる。 ・ 友達や教師と一緒に学校生活を楽しむことができる。 ・ 作業的な活動において達成感を得ながら、自ら意欲的に取り組むことができる。
中学部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たなことにチャレンジしようとする意欲を高めることができる。 ・ 自分の役割や責任を遂行することができる。 ・ 目的を共有し、共に活動することができる。 ・ 相互に気持ちや考えを伝え合うなどして課題解決をすることができる。 ・ 社会生活のルールやマナーについて身に付けることができる。 ・ 働く生活に関心をもつことができる。 ・ 自己選択、目標設定、自己評価をすることができる。
高等部	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身に付けてきた力を実際の社会生活で生かすことができる。 ・ 主体的に判断・行動することができる。 ・ 身だしなみや礼儀を大切にすることができる。 ・ 自分の役割を意識し、成し遂げる責任感をもつことができる。 ・ 作業に意欲的に取り組むことができる。 ・ 一定時間継続して作業のできる体力と気力をもつことができる。 ・ 社会や職場の決まりを守り、協力し合って生活を送ることができる。

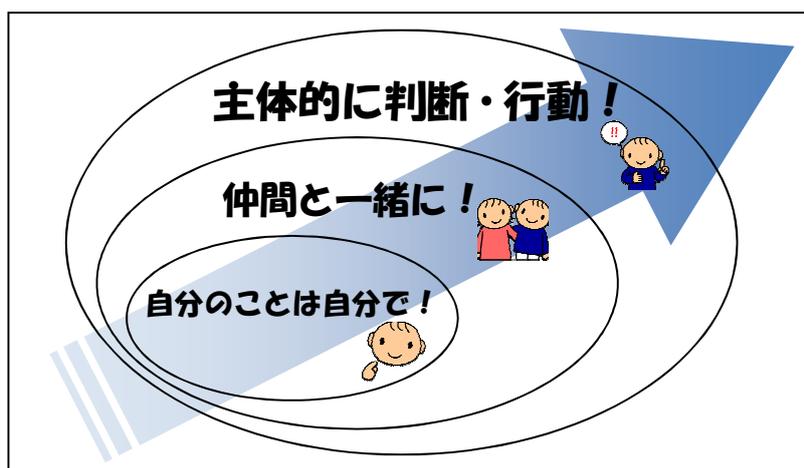


図2 めざす児童生徒像(キーワード)の広がり

2 一貫性・継続性のある指導とは

「一貫性・継続性のある指導」の捉え方について言及する前に、「一貫」と「継続」について、辞書^{※2}での意味について確認することで、研究テーマでの意味が鮮明になると考える。※2 広辞苑より引用

一貫	一筋に貫くこと。一つの考え方ややり方で貫き通すこと。
継続	前の状態・活動がつづくこと。また、受け継いでつづけること。

次に、鹿児島県総合教育センター平成 25 年度研究紀要「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究 ―知的障害のある児童生徒の pdca サイクルに基づいた授業づくりを目指して―」での一貫性・系統性のある指導について整理されたものを引用する。本校は系統性ではなく継続性のある指導であるが、ここではその違いを考える参考とする。

一貫性のある指導	一人一人の教育的ニーズや指導内容・指導方法などを明らかにし、指導者間及び学部間などで共有して指導すること
系統性のある指導	一人一人の指導目標や指導内容を、各教科の目標や内容、発達の段階や生活経験、生活年齢などを踏まえて指導すること

これらのことや「Ⅱ 研究テーマ設定の理由」で述べられた項目から、本校では「指導の一貫性・継続性」を以下のように確認したい。

一貫性のある指導	心理検査(知能検査)、チェックリスト、行動観察、保護者とのミーティング(家庭訪問)を基にしたデータをケース会にて複数の職員で分析(解釈)し、得られた <u>個別の教育的ニーズ</u> に向かって児童生徒に関係する者が手立てやかかわり方を 共有して 指導すること <本校での実施場面> 保護者とのミーティング、学園との担当者会、ケース会、学部会、授業前ミーティングなど
継続性のある指導	個別の教育支援計画、個別の指導計画やその他の引継資料を活用し、 <u>学年や学部が変わっても</u> 手立てやかかわり方を 受け継ぎ ながら、新たな(次のステップの) <u>個別の教育的ニーズ</u> に向かって指導していくこと。 <本校での実施場面> 担任間引継、個別の教育支援計画、個別の指導計画、通知表(あゆみ)、指導要録など

IV 研究の詳細

1 研究の目標

今年度における研究の目標を次のように整理した。

- (1) 1年次（平成26年度）の研究であげられた解決すべき課題を“テーマ研究”の時間を利用して、解決（改善）する。→実践的研究
- (2) 解決すべき課題について、学部を解いたチームを編成することで職員の同僚性を発揮しながら継続性のある指導をめざす。
- (3) 付せん紙を用いた授業参観やワークショップ型の授業検討会をこれまでどおり続け、授業力向上を図る。（鹿児島県音楽教育研究大会や義務教育課学校訪問との連携）

2 研究仮説

個別の教育的ニーズのある児童生徒に対する、一貫性・継続性のある指導において、次の4点についてプロジェクトチームを編成し、課題解決や授業力向上を行うことで一人一人の自立と社会参加へつながるであろう。

- 1 チェックリスト（本校作成）の判断基準の明確化とさらなる活用方法
- 2 年間指導計画（生単，作業）における継続性（小→中→高）の見直しと改善
- 3 段階で習得させたい力の明確化（キャリア教育）
- 4 他学部の意見（分析）を交えたアセスメントによる授業力向上

また、学部を解いたチームを編成することで職員の同僚性を発揮し、継続性のある指導へつながるであろう。

3 研究の構想

研究仮説で示された手立ての工夫から、実際の研究構想の柱は次のようになる。（図3）

- 1 チェックリストの判断基準をより具体的なものにし、改訂版を作成する。
- 2 生活単元学習及び作業学習の単元一覧表を作成する。（小-中-高のつながり）
- 3 内容面・活用面からキャリア教育の指導計画について検証する。
- 4 文献を参考に発達段階表を作成し、モデルケースで実践する。

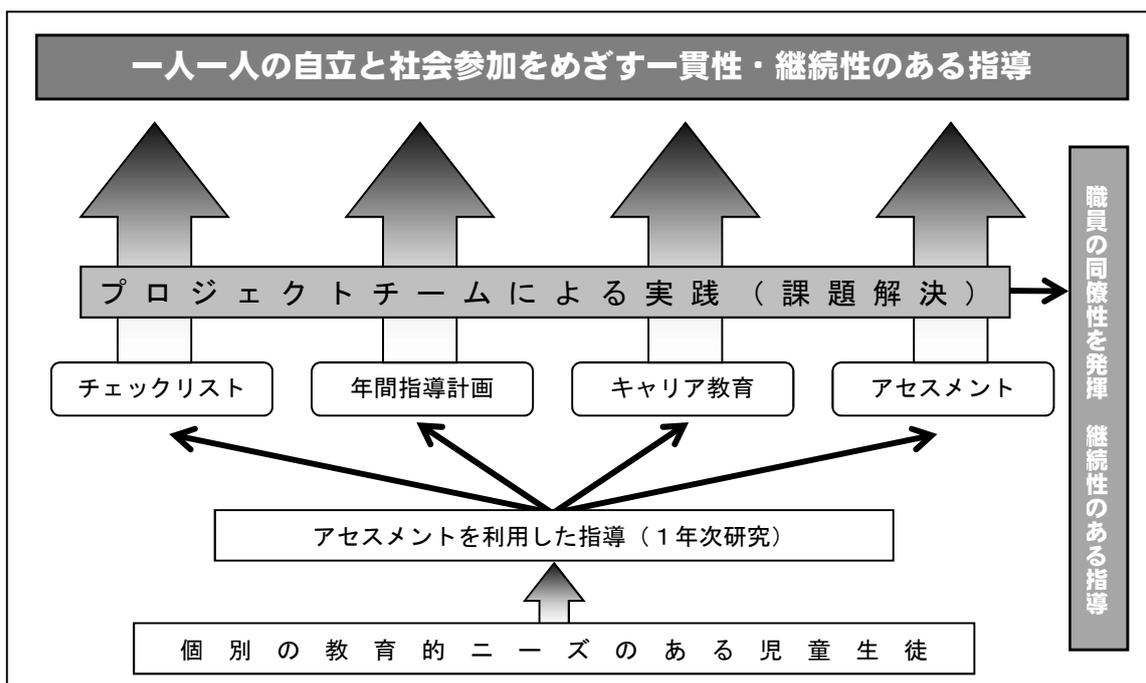


図3 研究構想図

4 研究の方法

1 年次（平成 26 年度）の研究であげられた解決すべき課題について「テーマ研究」の時間を利用し、解決（改善）するという考え方の下、学部を解いた四つチームを編成する。なお、主体的に研究できるように、事前に職員に希望調査を取り、全て第一希望のチームになるようにした。このことにより、学部を解いた職員の同僚性を発揮することをめざした。

また、各チームの進捗状況を知り、全職員からの意見を取組に反映させるために、プロジェクト研究期間中に「中間報告会」と「実践報告会」を設定した。

以下に、各チームの具体的な研究の方法（ゴール）を示す。

(1) チェックリストチーム

- ・ 全職員が同じ視点で評価できる評価基準を明確にした改訂版を作成する。
- ・ 検査項目と説明書を一体化した様式を作成する。
- ・ 参考にした文献を明記する。
- ・ 年間指導計画との関連を新たに明記したり、修正したりする。

(2) 年間指導計画チーム

- ・ 生単：年間指導計画（小一中一高）の単元一覧表を作成する。
年間指導計画（小一中一高）における目標の系統性を整理する。
- ・ 作業：中学部、高等部の各作業班共通の単元一覧を作成する。

(3) キャリア教育チーム

- ・ 学部目標から各学部のキーワードを設定する。（それぞれの段階で習得させたい力（目標）の明確化）
- ・ 本校「平成 27 年度キャリア教育全体計画」における育てたい力の項目を基に「領域・教科を合わせた指導」の指導内容を整理する。
- ・ 授業改善シートを活用した授業を実践する。

(4) アセスメントチーム

- ・ 文献を基にした発達段階表を作成する。（4 グループ）
- ・ 作成した発達段階表を活用し、対象生徒の分析を（解釈）実施する。
- ・ 県音研や義務教育課学校訪問にて、付せん紙を用いた研究授業及びワークショップ型の授業検討会を実施し授業改善と参加者全員の授業力向上（専門性の向上）を図る。

なお、主テーマに迫る方法はこれまでの取組を引き続き実践した。

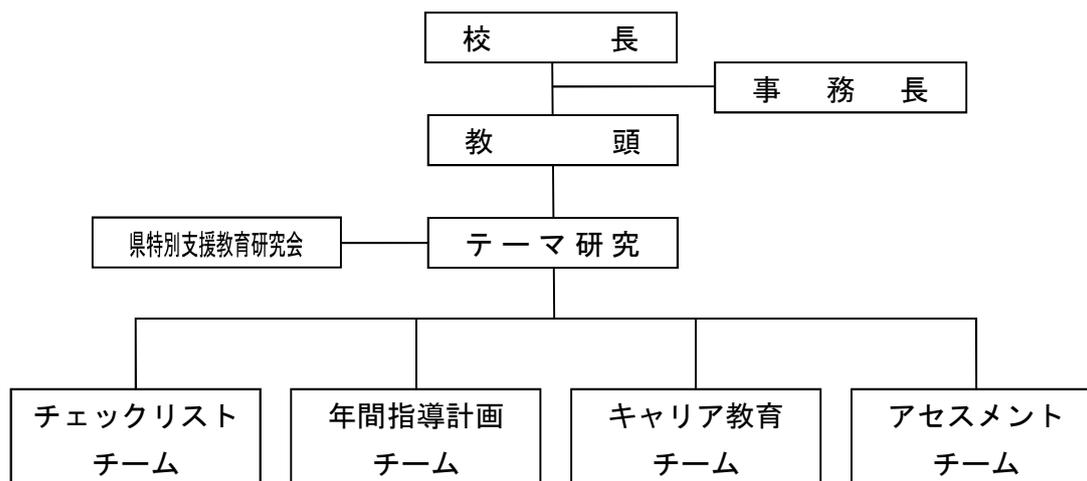
「一人一人の自立と社会参加をめざす」については、家庭訪問、保護者とのミーティング、学園との担当者会などから得られた個別の教育的ニーズを学校教育目標や各学部の教育目標の視点を踏まえて、設定、指導、評価する。（個別の教育支援計画及び個別の指導計画にて作成）

「一貫性・継続性のある指導」については、心理検査（知能検査）、チェックリスト及び行動観察等によって得られたデータを①複数の職員で分析（解釈）し、目標を設定し、手立てを考え、②日々の授業や研究授業で実践し、③授業検討会や学期の反省から評価や④改善点を見出すアセスメントの一連のプロセス（①→②→③→④）を行う。



さらに「ワークショップ型の授業検討会を用いた PDCA サイクル」の定着化を図るため、アセスメントチームと連携し、実践に取り組む。

5 研究組織



6 研究の流れ(計画)

【平成 27 年度（2 年次）】

月	日	曜		主な研究内容	形態
5	19	火		プロジェクト研究について（チームの希望調査）	
	29	金		第 1 回特別支援学校授業力向上実践協議会 (県総合教育センター)	チーム出席
6	2	火	テーマ研究①	「かごしま学力向上プログラム」 第 2 期特別支援学校授業力向上プログラムの概要説明 今年度の研究テーマについて（基調説明） 今年度の研究計画について プロジェクトチーム発表，アンケート	全体
	24	水	テーマ研究②		
7	24	金	テーマ研究③	プロジェクトリーダーを中心に研究のゴールへ向けて 課題解決を実施	各チーム
8	27	木	テーマ研究④		
10	1	木	テーマ研究⑤	「中間報告会」 各チームの進捗状況の発表及びアンケート実施	全体
	23	金		第 53 回鹿児島県音楽教育研究大会大島大会 研究授業（中学部）・授業検討会	音楽科 中学部
11	5	木	テーマ研究⑥		
	19	木	テーマ研究⑦	研究のゴールへ向けて課題解決を実施	各チーム
12	16	水		義務教育課 特別支援学校学校訪問 研究授業（中学部），授業検討会	全体
1	7	木	テーマ研究⑧	研究のゴールへ向けて課題解決を実施	各チーム
	28	木	テーマ研究⑨	「実践報告会」 各チームの成果と課題の発表及びアンケートの実施	全体
2	3	水		第 2 回特別支援学校授業力向上実践協議会 本校研究の事例発表 (県総合教育センター)	チーム出席
	26	金		各チームの「研究のまとめ」，別冊資料集 原稿提出	
3	7	月		平成 27 年度 「研究のまとめ」，別冊資料集 起案	
	10	木	テーマ研究⑩	研究の成果と課題について 来年度の研究について 校長先生から	全体
	22	火		「研究のまとめ」，別冊資料集発送，HP へアップロード	

研究授業・授業検討会

(特別支援学校授業力向上実践協議会資料)



中学部 音楽「音を感じて～創作奄美風ケチャと即興ガムラン風演奏～」

研究授業・授業検討会

V	これまでの取組を生かした実践	11
1	第53回 鹿児島県音楽教育研究大会大島大会	11
	(1) 学習指導案	
	(2) 授業検討会記録	
2	義務教育課学校訪問時の研究授業	19
	(1) 学習指導案	
	(2) 授業検討会記録	
VI	特別支援学校授業力向上実践協議会資料	27

V これまでの取組を生かした実践

1 第53回 鹿児島県音楽教育研究大会大島大会

(1) 指導案

第1・2・3学年音楽科学習指導案

日時：平成27年10月23日（金）2校時

場所：県立大島養護学校中学部棟2階音楽室

対象：中学部男子15人 女子8人 計23人

指導者：二禮木智香(CT) 前山優香(ST1)

藤山美由紀(ST2) 馬場真理(ST3)

小倉寿彦(ST4) 若松千代(ST5)

駒走俊彦(ST6)

1 題材 『音を感じて～創作奄美風ケチャと即興ガムラン風演奏～』

教材曲 「ケチャ風お茶づけ」 (作曲：山田俊之)

「Let's sing a song」 (作詞・作曲：笠木博逸)

「翼をください」 (作詞：山上路夫 作曲：村井邦彦)

2 題材について

(1) 題材設定の理由

<生徒の実態>

本校は大島地区唯一の特別支援学校であり、小学部から高等部までの知的障害者と肢体不自由者を教育の対象としている。奄美大島だけではなく奄美群島内の児童生徒が、自宅や知的障害児施設「希望の星学園」に入所して、毎日通学している。また、在宅訪問教育学級生については、教員を派遣し授業を行っている。

中学部の音楽の授業は、標準学級及び重複障害学級合同の1年生から3年生までの男女23人で行っている。生徒たちが音楽を通して共に活動する楽しさを味わったり、表現することを相互に高め合ったりすることができるように、中学部全員で学習している。

生徒たちはこれまで、4・5月「歌であそぼう」で、歌を通じた仲間・雰囲気作りをしたり、今年1年間のテーマソングにオリジナルの振り付けを考えたりしている。思春期特有の歌うことが恥ずかしいという気持ちもあるが、多くの生徒が音楽の活動を通して、明るく、のびやかな歌声で歌うことができるようになった。6・7月「音を探そう・作ろう」では、楽器音や生活音、環境音など、身近な音に気付くため、音当てクイズ「この音な～に」をしたり、校内のサウンドマップ作りをしたりして、生活の中での音への興味や「聴く」ことへの意識を高める学習を行ってきた。また、鑑賞ではサン＝サーンス作曲「動物の謝肉祭」を取り扱い、作曲者がどんな動物をイメージして作ったか考えて聴くことや、曲に合わせて動いたり、曲をイメージして色を塗ったりすることなど、聴いた音楽を様々な形で自己表現する活動も行ってきた。しかし、歌唱や表現活動において、生徒それぞれが自由に歌ったり、楽器を鳴らしたりすることはできるものの、「歌うこと」「音を出すこと」で満足し、「強弱をつけたい」や、歌詞などの場面や情景を捉えて「こんな声で歌いたい」「こんな音を鳴らしたい」などの、曲をより良くするための表現の工夫が不十分である。さらに、友達と楽器の音を合わせる(＝アンサンブルする)楽しさや、自分たちで表現を考えて演奏する面白さ、達成感を感じる経験が少ないことも課題である。

<題材の意義・価値>

この題材では、インドネシアの民族音楽を基にしている。題材選定の理由としては、①インドネシアと夏場の奄美大島の気候は似ており、互いに自然豊かな環境であること、②織物や素晴らしい自然をモチーフにした絵画もあること、③インドネシアの民族音楽の「ケチャ」や「ガムラン」と、奄美の島唄などが互いに「口承」、「即興的な音楽」という共通点があることである。「ケチャ」とは、円陣を組んだ男性の単純な身振り・発声に合わせた即興的な舞踊芸能であり、「ガムラン」とは、青銅楽器、竹や木で作られた打楽器が主体となって演奏されている器楽合奏である。合奏ではあるが楽譜はなく、今まで口承で伝わり演奏されて

きた。一方、奄美大島の島唄も、口承によって引き継がれており、島唄に入る節回しや三線の伴奏は、常にその場の雰囲気や唄者の即興で行われている。これらのことから「音を感じて～創作奄美風ケチャと即興ガムラン風演奏～」を設定した。

創作「奄美風ケチャ」は、ボイスアンサンブルで行う。ボイスアンサンブルとは言葉でリズムを作り、その言葉に合わせた身体表現を行いながら、パートを重ね合わせる活動である。発語が難しい生徒でも、言葉のリズムに合わせた身体表現をすることで友達と一緒に表現することができるなど、幅広い実態であっても行いやすい活動である。ボイスアンサンブルの導入として使用する「ケチャ風お茶づけ」は、「ケチャ」の言葉の響きを基にしてあり、短い言葉の繰り返しが続くボイスアンサンブルで生徒も理解しやすい。ボイスアンサンブルに慣れた後「ケチャ風お茶づけ」のリズムを基に、「奄美風ケチャ」をテーマ（自然・生き物・食べ物・遊び・文化）から連想するという活動や、連想したことから言葉や身体表現を創作するという活動を通して創作することができる。と考える。

即興ガムラン風演奏は、インドネシアなどの民族楽器を用いる。「ガムラン」は、独特な楽器の音階と音色の響きがあり、音を鳴らすだけで異国にいるような雰囲気を作ることができることに魅力がある。また、「ガムラン」は同じ楽器を数人が担当するので、同じ楽器の友達を見て「あの人はこんな鳴らし方をしている。私はこう鳴らそうかな」と友達の様子に注目しやすいことから、それぞれの生徒の自由な表現がより生かされるという魅力もある。アンサンブルにおいても、私たちの身近な旋律楽器は、楽譜どおりに正しく演奏しようとするあまり、個々のテンポが合わず集団で合わせるものが難しかったり、指揮者を立てても見ることが少なかったりして、表現方法の深まりが得られにくい。その点、ガムラン風の演奏は、楽譜はなく、演奏方法もシンプルで理解しやすいため、指揮者を見て演奏を止めたり、また始めたりするだけで一つの演奏が成り立つことから、集団で取り組みやすい。その上、強弱をつけたり、「〇〇のような感じで」といった、指揮者の合図を見ながら生徒が即興で表現の工夫をしたりすることができる。と考えられる。

<ねらい>

本題材では「奄美風ケチャ」をテーマから連想したり、連想したことを基に言葉や身体表現を使って創作し、友達と音を合わせる楽しさを感じることができるようになりたい。また、「即興ガムラン風演奏」では、ガムラン独特の音の響きを聴き、指揮者の合図に合わせて演奏することや、強弱をつけたり、「〇〇のような感じで」といった即興で生徒が表現の工夫をすることができるようになりたい。

<指導観>

「奄美風ケチャ」は題名のとおり奄美大島に関する五つのテーマから言葉の創作を行う。自分たちの住んでいる奄美大島を題材にすることで、今までの経験や同時期に学習している総合的な学習の時間「奄美の〇〇名人になろう」の内容、写真などから、「どんなものだったか、動きや色、音は？」など連想する経験ができるようにする。そして、創作した言葉や身体表現に愛着をもち、同じグループの友達と表現を合わせることで、違うグループとの音が重なる楽しさを感じることができるようになる。

また、即興ガムラン風演奏では、生徒が選んだ楽器の音色の響きを楽しみながら、指揮者の強弱や表現に合わせて自分なりに即興で楽器を演奏することができるようになる。そのために、指揮者の強弱を表す身体表現を見て、音を鳴らして確認したり、図形カード（教材・教具参照）とカードのイメージを伝える言葉、「キラキラ・明るい音」「パンパン・強い音」など、視覚情報と音声情報から「こんな音かな」と生徒それぞれが表現を工夫したりする場面も作るようにする。

さらに、この二つの演奏を合わせることで、「奄美風ケチャ」は、友達と表現を合わせる楽しさ、「即興ガムラン風演奏」では生徒指揮者の指示から奏でられる、個々の表現が一つの演奏になることの面白さを感じながら曲ができるようにする。そして、題材の最後に発表の場を作ることで、演奏者の演奏する意欲を高めて練習に取り組むことができるようにする。発表会は、体育館で行い、観客の前で緊張しながらも練習してきた成果を披露することで、友達と一緒に声や楽器の音を合わせる（＝アンサンブルする）楽しさや、自分たちで表現を考えて演奏する面白さ、達成感を感じることができるようになる。

<展望>

今回の学習を通して、次の題材として取り扱う「合奏をしよう」においても、①音で表現するには、いろいろな方法があるということ、②友達と合わせて演奏することは楽しいということ、③指揮者を見ることで

いろいろな指示が出ているということがわかるようになってくると考える。また、表現方法を考えることを繰り返していくことで、今後の歌唱場面においても、歌詞からイメージされる場面や情景を捉えて強弱をつけたり、テンポを考えたりするなど、自分たちで表現することにこれまで以上に楽しさを感じることができるとはならないかと考える。

(2) 生徒の実態

	音への興味・関心	運動・操作	表現・イメージ
A (1年)	<ul style="list-style-type: none"> 同時に2つの楽器を鳴らすと、楽器のイラストと名称が書いてあるカードを手掛かりに、正しく答えることができる。 生活音・環境音を探す場面では、自分から「ここは〇〇な音がするよ」と気づき、友達や教師に伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に身体表現しながら歌う場面では、音楽に合わせて意欲的に身体を動かすことができる。テンポ感もあり、速さの変化に対応することができる。 楽器に興味があり、休み時間に自分からキーボードの練習をしたり、打楽器を手に取り、演奏方法を尋ねたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 歌唱場面では、教師の指示した顔の表情マークを見て、模倣して歌うことや、強弱の指示を理解して歌うことができる。自分から表現を創意工夫する場面はまだ見られていない。 鑑賞の場面では、友達の感想からヒントを得て「私も同じ気持ちだった」などイメージを伝えることができる。
B (2年)	<ul style="list-style-type: none"> 音に感覚過敏があり、イヤーマフをして活動することが多い。自分が楽しい場面では、イヤーマフをしなくても良い場合もある。プラスチックなどを爪でたたいて音を出したり、興味のある音などは、イヤーマフを外して音を確認したりすることが良くあり、好きな音と苦手な音がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の伝えたいことは、教師の肩を叩いたり、手をひいたりして想いを伝えようとする可以尝试。簡単な動作の模倣はできる。 楽器操作に関しては、手触りや音色に興味がある楽器は率先して手にしたり、自分なりに音が出る方法を工夫したりしていることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 発語はないが、母音などの音で教師の口の形を真似しながら声を出すことができる。また、やりたいことを簡単な単語で書き、伝えることもできる。歌唱場面では、手持ちの歌詞譜を使用している。友達の歌声を聴きながら言葉を追い、そのページが終わると次のページにめくることができる。
C (3年)	<ul style="list-style-type: none"> 音楽や音に大変興味があり、好きな曲や音があると、表情がとても明るくなり、教師に指差して「これこれ」と積極的に伝えることができる。 音がどこから鳴っているか聞き取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 曲に慣れるまでは、周りの様子をじっと見て動きが少ないが、覚えると大きく身体表現をしたり、表情も豊かになる。 楽器操作に関しては、打楽器を好み、教師の模範を見て、同じように音を鳴らすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 歌唱場面では、発語は不明瞭ではあるが、曲を覚えると大きな声で歌うことができる。 イメージに関しては、写真などを見て経験したことがあると、「あっ」と指をさして教師に「分かる」と伝えることができる。

※発達段階や音楽的な視点から3人を抽出した。

3 題材目標

(1) 全体目標

- ア 奄美に関する写真や図形カードなどを基に、イメージした音を工夫して表現することができる。
- イ 曲の始まりや終わり、強弱などを意識して友達と合わせて演奏したり身体表現したりすることができる。

(2) 個人目標

生徒	個人目標
A (1年)	<p>ア 奄美に関する写真や図形カードを基に、ケチャの言葉のリズムを考えたり、自分で演奏方法を変えるなどしてイメージした音を表現することができる。</p> <p>イ 曲の始まりや終わり、強弱などを意識して友達と合わせて演奏したり身体表現したりすることができる。</p>
B (2年)	<p>ア 奄美に関する写真に興味をもち写真を見たり、教師が図形カードの「〇〇の音だね」と言葉掛けをして、楽器を鳴らしたりして表現することができる。</p> <p>イ 教師と一緒に曲の始まりと終わりを確認しながら、友達と演奏したり身体を動かしたりすることができる。</p>
C (3年)	<p>ア 奄美に関する写真に興味をもち、写真の動きをしたり、図形カードの図形を見て楽器の演奏を変えたりして表現することができる。</p> <p>イ 曲の始まりや終わりを意識して友達と合わせて演奏したり身体表現したりすることができる。</p>

4 指導計画（総時数 16 時間）

次	主な学習活動・内容	時数	資料・準備
一	1 ボイスアンサンブルについて学習する。 (1)「ケチャ風お茶づけ」を基に、ボイスアンサンブルの方法を知る。 (2)「ケチャ」を鑑賞する。 (3)オリジナルボイスアンサンブル「奄美風ケチャ」を創作する。	6	・「ケチャ風お茶づけ」パート表 ・テーマに関する資料 ・「奄美風ケチャ」パート表
二	2 ガムランについて学習する。 (1)インドネシアの民族楽器を鳴らすことで音の響きを知り、好きな音を探す。 (2)2つのグループを作り、指揮者オーディションをする。 (3)指揮者と演奏者で、表現方法について考える。 (4)ガムランバトルを行い、ガムランの音の響きや表現方法の違いを知る。	6	・ガムラン楽器 ・ビデオカメラ ・図形カード
三	3 発表会に向けて流れを確認して演奏する。 (1)「奄美風ケチャ」と即興ガムラン演奏の流れを知る。 (2)発表会の流れで練習を行う。 (3)発表会を行う。	4 本時 (2/4)	・発表会までの日程表 ・「奄美風ケチャ」パート表 ・ガムラン楽器

5 本時の学習（14/16）

(1) 全体目標

- ア 教師や友達の指揮に合わせて、自分なりに工夫して演奏することができる。
イ 友達の様子を感じて、一緒に音を鳴らすことを楽しむことができる。

(2) 個人目標

生徒	個人目標
A (1年)	ア 音の強弱や、「キラキラ明るい音」「しょぼーんかなしい音」などのイメージを、身体や表情で表現しながら指揮をすることができる。 イ グループの友達と声や身体表現を合わせたり、友達の音を聴きながら楽器を演奏したりすることを楽しむことができる。
B (2年)	ア 教師の言葉掛けで指揮を見て、自分の好きな音を鳴らして演奏することができる。 イ 友達の声や身体表現に合わせて身体を動かしたり、一緒に楽器を鳴らしたりすることを楽しむことができる。
C (3年)	ア 教師や友達の指揮に合わせて、ケチャの動きをしたり、楽器の鳴らし方を変えたりして演奏することができる。 イ 友達の動きや音を感じながら、楽器を鳴らすことを楽しむことができる。

(3) 指導及び支援に当たって

生徒たちは前時まで、創作した「奄美風ケチャ」を重ね合わせる学習をしてきている。生徒たち自身が「声が重なり合っている」と気づくことができるように、グループの代表同士がみんなの前で言葉を重ねる場面を作ってきた。音を少なくすることで、自分のグループの言葉が聴こえ、他のグループと言葉が重なり合うおもしろさや、指揮に合わせてピタッと止まった瞬間などは歓声があがり「重なり合う」「合う」と気持ちが良い」ということを実感してきている生徒も増えてきた。

またガムラン風演奏では、グループを2つに分け、グループごとに自分たちの音を作り出す学習をしてきている。グループ活動では、演奏の始めと終わり、強弱だけでなく、図形カードを用いて「○○のような音」をイメージして作り出したりしている。同じ楽器で演奏方法を変える難しさがあるのではないかと思っていたが、図形カードを取り扱う前に図形からイメージするものは？と連想ゲームの学習を取り入れていたことで、そのイメージ集を基に、ゆっくりまたは激しく演奏したり、表情まで変えながら演奏する生徒もでてきている。

次時は、体育館で発表会を行うので、発表会に向けて学習した成果が披露できるように、また流れの見通しがもてるように発表会で演奏する順番に学習していくようにする。

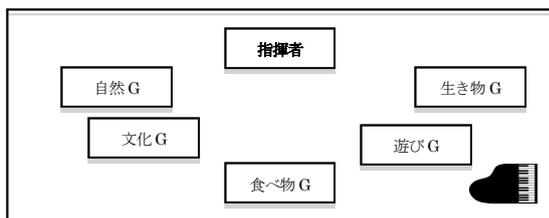
(4) 実際

(CT…チーフティーチャー ST…サブティーチャー)

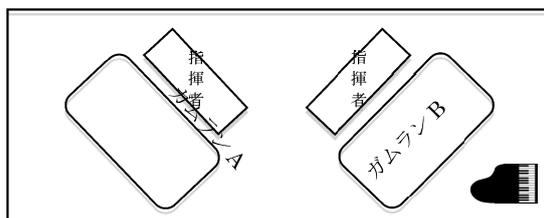
過程	主な学習活動	指導及び支援上の留意点	資料・準備
導入 (15分)	1 始めの挨拶をする。 2 始まりの歌を歌う。 「Let's sing a song」 3 「奄美風ケチャ」をする。 ～ケチャタイム～	<ul style="list-style-type: none"> クラスカードを手掛かりに自分たちで整理しCTに集合と欠席者の報告を行うことができるようにする。 ST1のピアノの音が鳴ると曲に合わせて身体を揺らすことで、歌う気持ちや表現しようとする気持ちを高めることができるようにする。 「大きな声と動きをしよう」とSTが言葉掛けすることや、STも一緒に行うことで、STをモデルに声を合わせて行うことができるようにする。 全体の指揮はSTが行い、「ガムラン風演奏」の模範となるような指揮を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> クラスカード 歌詞譜 パート譜
展開 (30分)	4 本時の学習を知る。 指揮者の合図に合わせて演奏しよう。 5 発表会の曲の流れを確認する。 6 ガムランバトルをする。 ・チーム練習で、休符/開始、強弱、図形カードで表現を確認する。 ・ガムランバトルをする。 7 ガムラン全体練習をする。 ・休符/開始、強弱、図形カードで表現を確認する。 8 感想発表をする。	<ul style="list-style-type: none"> 前回の流れを思い出し、今日の学習について確認する。目標は生徒全員で読む。 発表会の流れ表で演奏順番を確認する。「奄美風ケチャ」は最初に行ったので、その後からの練習を取り組むことを説明する。 二つのチームに分かれ、グループごとの生徒指揮者を中心に、演奏中の合図の確認と練習を行う。 STは楽器を構える時など、生徒のモデルとなるように、半拍前には楽器を構えたり、「指揮者の合図をよく見ましょう」と言葉掛けをしたりして、演奏の準備を行うきっかけを作るようにする。 指揮者が図形カードを提示した際、「〇〇の音」とSTが言葉掛けすることで、図形カードに注目させ、それに合わせた表現ができるようにする。 グループ練習では、お互いの良かった所を褒め合い、自信をもって全体練習を行うことができるようにする。 全体生徒指揮者を中心に、演奏中の合図の確認と、練習を行う。 演奏した感想を生徒の実態に合わせて、口頭で行ったり、表情や色カードを使ったりして自分の気持ちを伝えることができるようにする。 楽器の片付けを行う。STは丁寧に片付けるよう言葉掛けを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 日程表 発表会の流れ表 ①「奄美風ケチャ」 ②ガムランバトル ③全員で即興ガムラン 楽器 図形カード 表情カード 色カード
終末 (5分)	9 本時のまとめをする。 10 終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> 本時で行ったことの振り返りと、活動の中で頑張ったことを説明することで、次時への意欲を高めることができるようにする。 良い姿勢をとり気持ちを落ち着かせ、終わることができるようにする。 	

(5) 場の設定

(奄美風ケチャ)

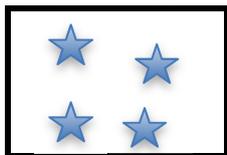


(ガムラン)

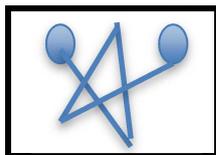


(6) 教材・教具

(図形カード) …表現のイメージをもちやすくするための、シンプルな図形



キラキラ 明るい音



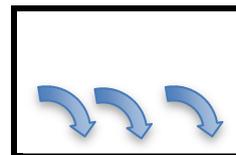
パンパン 強い音



フワフワ やわらかい音



しーん しずかな音



しょぼーん かなしい音

(使用するインドネシアの民族楽器より)



アングルン



ミニガムラン



ピンポンマラカス

(7) 評価

ア 全体目標

- (ア) 教師や友達の指揮に合わせて、自分なりに工夫して演奏することができたか。
- (イ) 友達の様子を意識して、一緒に音を鳴らして楽しむことができたか。

イ 個人目標

生徒	個人目標	評価	具体的な手立て	評価
A (1年)	(ア) 音の強弱や、「キラキラ明るい音」「しょぼーんかなしい音」などのイメージを、身体や表情で表現しながら指揮をすることができたか。		(ア) どのように指揮をすれば演奏する人が分かりやすいを考えさせ、確認することが手立てとなったか。	
	(イ) グループの友達と声や身体表現を合わせたり、友達の音を聴きながら楽器を演奏したりすることを楽しむことができたか。		(イ) グループ練習を取り入れることで、友達と一緒に演奏するという気持ちを高め、楽しく演奏させることができたか。	
B (2年)	(ア) 教師の言葉掛けで指揮を見て、自分の好きな音を鳴らして演奏することができたか。		(ア) STが「始まるよ」と言葉掛けすることで、今から音を鳴らすのだと分らせることができたか。	
	(イ) 友達の声や身体表現に合わせて身体を動かしたり、一緒に楽器を鳴らしたりすることを楽しむことができたか。		(イ) 友達の声や楽器の音が、一緒に演奏しているという手掛かりになったか。	
C (3年)	(ア) 教師や友達の指揮に合わせて、ケチャの動きをしたり、楽器の鳴らし方を変えたりして演奏することができたか。		(ア) STがそばで一緒に演奏することで、演奏しようという気持ちを高めることができたか。	
	(イ) 友達の動きや音を感じながら、楽器を鳴らすことを楽しむことができたか。		(イ) 友達がすぐ横にいることで友達の音を聴き、演奏を楽しむ手立てとなったか。	

【◎…良くできた ○…できた △…できなかった】



【◎…一人でできた ○一部支援 △…全面支援】



(2) 授業検討会記録

鹿児島県音楽教育研究大会 事前授業 授業研究 記録

平成 27 年 10 月 23 日 (金)

場所：視聴覚室

※ 進行 藤山美由紀 先生

※ 挨拶 鎌田 紀子 先生

○ 昨年からの県音研への取り組みを、感謝している。現場の先生方は特別支援学校の子どもたちはみんな音楽が好きだと答えるが、音楽教師は、自分が今まで学んできた音楽をどのように現場に還元していくかを悩んでいる。県音研を迎えるにあたって、大島養護学校全学部での取り組みがよかったのではないかと。今日の授業を通じて、自分の学校風の音楽の指導、授業の在り方を考えていただきたい。いろいろな意見を出していただきたい。

※ 司会 板敷 大和 先生

○ 授業研究をワークショップ型で行う。ワークショップの説明。

1 授業者より (二禮木智香 先生)

- ・ 授業をするにあたって、授業はいつもライブ、コンサートのようだと考えている。いろいろなことを想定してやってきたが、今日は今日で、授業の雰囲気子どもたちの様子、表情、一緒に作り上げる流れなど、ライブだなと感じた。
- ・ 授業の評価は配布プリントのとおり。(後で、ご覧になっていただきたい。)
- ・ 授業の反省として、子どもたちは緊張していたが、見てほしいという気持ちがあり、表情から伝わってきた。ガムランの指揮者も緊張している様子見られたが、それぞれ自分の得意な図形カードを使い演奏したり、身体表現で表現したりすることができていたのではないかと。
- ・ 題材の取り扱いに当たって、子どもたちは歌を歌うことが好きで、これまでの指導では、音程がとれて元気に歌うことだけでOKだった。ただ、中学部において、これから先これでいいのかなという思いがあった。歌うことに当たって、思春期等で思うように声が出ない子どもたちもおり、歌いたいという思いはあっても声を操作することの難しさも感じていた。また、歌詞の意味などを読み解いて歌えると良いと思っていた。ガムランを取り扱うことで、歌の指導とは違う観点で、子どもたちと一緒に「表現すること」を考えたくてこの題材を選んだ。
- ・ 表現するにあたって、イメージする力が大切だと思っている。今回図形カードを用いた。図形カードから連想し、子どもが感じたイメージそのものを大切にして、音を表現しようと考えた。子どもたちが自由に演奏する姿が見られた。図形カードを歌うときにも使用している。
- ・ ケチャは、幅広い実態のいる集団で、ある程度型にはまっている子どもにとって取り扱いやすい。ガムランは、感じたままに叩く、演奏することができる。どちらも、特別支援学校の子どもたちにあっている。
- ・ ガムランは即興性で、評価が難しい。ガムランを演奏することで、子どもたちがどのように変容してきたかを、今までの授業、エピソードをまとめて見てきた。図形カードがあることで楽器を止めたり、リズムが変わったりなどの変容が見られ、その全てが「表現している。」ととらえてきた。

2 授業検討会

討議の柱【音楽におけるイメージを育む指導の在り方～表現力を高めるためには～】

(F：ファシリテーター)

A (F：小倉 寿彦 先生、発表者：平 麻衣子先生)

- ・ 導入の振り付け→身体表現がよかった。STとCTの生徒との関わりがよかった。指揮者の見やすさ、動きもよかった。
- ・ 評価→色で、スムーズに評価ができた。
- ・ ガムランの合図で、「動」を感じることができればよかった。
- ・ 指揮者の合図→図形、楽譜を使っていたが、指揮者の動きが統一しているのか。生徒と前もって動きを確認して取り組んでいる。「シ～ン」をどうやってとらえているのか。弱くなって、遅くなっている、耳を澄ましている、静かになっている生徒等、とらえ方が違う。自由に演奏、表現→音楽的にポイントを何か一つおいて、自由な演奏、表現になったのではないかと。
- ・ 今日楽器を使用していた。楽器+身体表現のグループがあってもよかったのではないかと。

B (F:若松 千代 先生, 発表者:内山 沙織 先生)

- ・ 導入の仕方が展開につながっていた。
- ・ 図形カードを用いた指導が、今後活かせる方法はないかに話しあった。人によって一人一人のイメージが違うと思うが、今回は子どもたち一人一人のイメージで進めていった。きらきらだったら金、光りもの、ふわふわだったらわたあめなど、具体物を見せたらよかった。時間を取ってもよかった。楽器の音色からイメージを持ってもよいのではないか。楽器のパチを変えたり、手で楽器をたたいたりしてはどうか。
- ・ 演奏の速度を変えてみると、イメージが変わってくるのではないか。

C (F:駒走 俊彦 先生, 発表者:石原 優子 先生)

- ・ 導入→ケチャの「あおうみ」のグループのリズムが合っていなかったのでは？子どもたちの身体表現をとるのか、リズムをとるのか、授業者の意図があればよいのではないか。
- ・ ケチャ→座ったままでは、表現が難しかったのでは。床に座るよりもイスに座った方が良かったのでは。元々のケチャの雰囲気味わうのでよかったのではないか。座っていた方が、指揮者を見ていたのでは。目標達成はできていたのでよかったのではないか。
- ・ 楽器を机の上に乗せたまま移動が気になった。→楽器の取り扱い。ガムランの音にあった楽器を選択することが大切。
- ・ ガムランのチャッチャの音を大切にすることだったが、そこが少なかった。アレンジことも大切だが、原曲を大切にすることも必要。
- ・ イメージすることへの他校の取組→音楽を絵に描かせている。イメージしたスライドを作ったり、発表したりする取り組みをしている。イメージすることができる子どもたちが、イメージを動きにして表現している。

D (F:馬場 真理 先生, 発表:前山 優香 先生)

- ・ 導入→とにかく明るい。授業者の表情がよい。メリハリがある授業だった。
- ・ 図形カード→「ふわふわ」「シ～ン」「カンカン」の反対は？「ふわふわ」と違うイメージは？など、国語の授業から学ぶ、とらえることができるのではないか、図形カードがなくても、指揮者を見ることで表現力や生徒たちが作り上げる新しい音ができただけでなく、図形カードの在り方を考える必要がある。
- ・ 授業そのものがライブコンサート。音の幅の広い表現性を大事に、これからも生徒に還元しながら、いろいろな意見がもたらえた。

☆ 楽器の補足説明 (二禮木 智香 先生)

楽器の購入先について→東京のはやし商会、ドルフィンポートのお店【ひい ふう みい】

3 指導助言 (蒲生高校校長:阿湯濱 健一 先生)

- ・ 生徒たちが、非常に落ち着いていた。前回はケチャを中心に授業を見せていただいた。今回はガムランの授業。指導案1P、奄美の島唄、三線、ケチャとガムランの結び付きがよい。教材の選び方がよい。
- ・ 授業の流れとしては、すごくよかった。導入のケチャに入るときの様子、歌→ケチャの流れがよく出ていた。
- ・ 前回に比べて、STの動きがよかった。
- ・ 全体目標(指導案3P)と本時の目標が、上手くなっている。つながっている。討議の柱であるイメージを育む指導の在り方→図形カードの使い方、絵を描かせる、イメージの捉え方が違う→この辺をどのように具体的にしていけるかが難しい。特別支援学校における音楽の表現力を高めていくためにはどのようにすればよいか、考えていけると良い。
- ・ 教師と子どもたちの信頼関係があってこそその授業だったと思う。
- ・ ガムランのパターン12種類くらいある。自由にたたかせるのも面白い。2つのグループの指揮者の動きで、周りの子どもたちが動くことができていた。指揮者がしっかり表現することができていた。こういう授業が特別支援学校でもできるのだなと実感した。

☆会場校長挨拶 (中村周一郎 先生)

- ・ 奄美の行事では、島唄を披露してくれている。島唄が生活に密着している。特別支援学校の生徒は、島唄などに触れる機会が少ないことから、総合的な学習の時間などで島唄を習うなど、取り組んでいる。
- ・ 今回の大会が、子どもたちの豊かな生活につながるように。
- ・ お礼

2 義務教育課学校訪問時の研究授業

(1) 指導案

生活単元学習指導案

日 時 平成 27 年 12 月 16 日水曜日 第 3 校時(10:40~11:25)
対 象 中学部 縦割りグループ 男子 3 人 女子 4 人 計 7 人
場 所 中 学 部 多 目 的 室
指 導 者 板敷大和(CT) 駒走俊彦(ST1) 馬場真理(ST2)

1 単元 「校外学習～みんなで買い物や食事に挑戦しよう！～」

2 単元について

(1) 単元設定の理由

<生徒の実態>

本グループは、1年生から3年生までの男女7人で構成されている。このグループは、本校作成のチェックリスト(国語・数学)に基づき、中学部を五つの縦割りグループに分けたうちのひとつであることから、比較の実態に近い学習集団である(全員地域の小学校からの入学)。授業では、積極的に手を挙げて発表することや学習の決まりに従い参加することができている。また、地域生活では、自宅近くの商店に買い物に行ったり、家族で食事に出掛けたりするなど、様々な体験をすることができている。

一方、できる・できそうな課題に対し「できない」、「分からない」と消極的だったり、正しい答えをすぐに知りたがったりする。また、友達と一緒に買い物や食事に行ったり、休日にバスを利用して出掛けたりすることはほとんどない。これは、これまでの失敗経験などが「できない」と自己評価を低くさせたり、障害特性や過度に間違えることを避けようとしたりすることにより、結果として新たなことに挑戦(生徒たちだけで買い物、食事などをする)することを恐れさせていると考えられる。さらに、友達と一緒に試行錯誤しながら学習に取り組み、友達から肯定的な評価をされることなどによって自己肯定感を高める機会が少なかったことも考えられる。

<単元の意義・価値>

以上の実態を踏まえて、本単元「校外学習～みんなで買い物や食事に挑戦しよう～」を設定した。本単元の主な学習活動である、買い物、食事、交通は、学習している(してきた)ことを実際の生活の場で生かすことができる。また、安全に配慮した中で、友達と一緒に活動を多く設定でき、生徒同士の必然性のある試行錯誤(助け合いや学び合い)の場面を作り出すことができる。さらに、友達が一緒にいたから挑戦できたこと、学んだことなどを振り返り、他者から評価される中で自己肯定感を高める(自己理解を深める)ことができる。これらのことは「学校」に在籍する今、校外で学習するからこそ実現可能であると考えられる。

<ねらい>

そこで本単元では、生徒たちだけで買い物や食事を行うことを通して、試行錯誤(助け合いや学び合い)しながら「友達と一緒にだから挑戦できた」という体験を得ることができるようになる。また、事後学習にて友達の良かった所や助けられた場面を発表する(友達に共感される)ことを通して、今まで気付くことのできなかった自分を知ったり、教師以外に称賛されたりして自己肯定感を高めることができるようになる。

<指導観>

具体的には、単元の始まりに主な学習内容(買い物、食事、交通)や日時、学習グループなどについて説明した後、単元の学習計画を教師と一緒に考えていくことで、校外学習への見通しをもち「友達と協力して」や「友達と一緒に挑戦する」という意識をもつことができるようになる。また、事前学習及び校外学習当日は、グループでの活動を中心に展開し、自分の意見を言ったり、友達の意見を聞いたりする機会を多く設定することで、生徒同士の学び合いができるようになる。校外学習当日は、教師は少し離れた所から見守り、しおりや時計などを手掛かりにして、友達と

一緒に試行錯誤しながら計画したことに挑戦することができるようにする。単元の終わりには、当日の様子を写真等で振り返りながら、友達の良かった所、友達に助けられたことを発表する時間を設け、他者評価（共感）されることで自己肯定感を高めることができるようにする。

<展望>

このような学習を通して、生徒たちは、様々なことに友達と一緒に挑戦しようとする意欲や態度を身に付けることができ、失敗を恐れずに試行錯誤しながら日常生活を送ることができるようになっていくと考える。また、教師以外の身近な人から肯定的な評価をされることによって、自己肯定感を高め、客観的に自己評価ができることにつながると考える。

さらに、この学習で学んだことを生かし「休みの日にバスに乗って〇〇くんの家に遊びに行きたい」という生徒の願いや思いを叶え「友達と一緒に〇〇をして楽しかった」という豊かな体験に広がっていくことを期待したい。

(2) 生徒の実態

生徒		A (1年・男)	B (1年・男)
観点			
	校外学習への興味・関心	学年で行った校外学習についても具体的に楽しかったことを覚えており、校外学習への興味・関心は高いことが予想される。また「校外学習にバスで行くために時刻表の勉強をしている」など、現在の学習と校外学習とのつながりをもつことができている様子である。	「12月18日は校外学習です」や「去年はどんなことをしたのですか」と言うなど、見通しをもち、学習内容について期待感をもっている様子から校外学習への興味・関心は高いことが予想される。自分の好きな物を買うことができることに楽しみをしている様子である。
課題に対する実態	自己評価	自分の頑張ったことを具体的に述べるができる。一方、分からないことや気持ちの整理がうまくできないと過呼吸になったり、頭を抱え、髪の毛を引っ張ったり、涙を浮かべたりすることがある。	目標に対し意欲的に取り組むことができているのに、自分のことをあまり話したがらず、自分の頑張りに気付くことはできていない。教師が具体的に様子を述べると、受け入れ、嬉しそうな表情はしている。
	挑戦する意欲	教師と一緒にみんなの前で発表するなどの経験を通して、最近では自分から手を挙げて発表したり、新しいことにも自分から取り組んだりすることができる。一方、「間違ってもいいですよ」と頻繁に確認してくる。	言葉や文字などで見通しをもたせ、することが理解できると、新しい活動にも取り組むことができる。自分の好きなこと（創作）については、自分のアイデアを取り入れて進めることができる。
	学び合い	教師や友達の話をよく聞き、受け入れて行動を改善したり、真似をしたりすることができる。時には、「〇〇してみてもいい？」などと友達にアドバイスをすることもある。	自分の意見や答えを積極的に述べるが、正しい答えのみを知りたがったり、間違いを気にしすぎたりすることがある。時には友達の意見を大きな声で否定することもある。
校外学習に関する知識・技能	交通	通学バスを利用し、家からバス停までの往復は保護者と一緒である。交通ルールを守り、放課後や休日には一人で近くにある友達の家に歩いて遊びに行ったり、少し離れたお店などに歩いて出掛けたりすることができるが、一人で路線バスを利用して出掛ける体験はない。	通学バスを利用しているが、家からバス停までの往復は自主通学（徒歩）である。家族と一緒に車で出かけたりする経験も多い。交通ルールを守り、少し離れたお店などに一人で歩いて出掛けたりすることができるが、路線バスを利用して出掛ける体験はない。
	買い物	休日などに頼まれた買い物や近くの商店まで一人で行き、レジでお金を支払い、お釣りをもらう一連の流れができる。働くとお金がもらえることを理解しているが、お金の出し方を工夫したり、限られたお金の中で買い物をしたりすることは難しい。	休日などに自分の買いたいお菓子などを近くの商店まで一人で買いに行くことがある。働くとお金がもらえることを理解しているが、お金の出し方を工夫したり、限られたお金の中で買い物をしたりすることは難しい。
	食事	食べ方については概ね理解し、実践できているが、口を閉じて噛むことなどのマナーや朝食を食べていないことやカップ麺ばかりを食べることから、バランスの良い食事については指導が必要である。レストランの利用の仕方について、家族などと経験が少なく、子ども同士で利用した体験はない。	食べ方については概ね理解し、実践できているが、苦手な食べ物があると「もう、嫌だ～食べたくな～い」と大きな声で言うことがあり、マナーについては指導が必要である。レストランの利用の仕方について、家族などと経験はあるが、子ども同士で利用した体験はない。

3 指導目標

(1) 全体目標

ア 校外学習当日の活動を通して、計画（学習）した買い物、食事、交通に挑戦し、自分たちで、友達と一緒に「できた」と体験することができる。

イ 活動全体を通して、意見を発表したり、聞いたりしながら生徒同士で試行錯誤する（学び合う）ことができる。

ウ 事後学習にて、友達から評価（共感）される活動を通して、知らなかった自分に気づき、自己肯定感を高めることができる。

(2) 個人目標

生徒	個別の指導計画の重点目標（抜粋）	個人目標
A (1年・男)	<ul style="list-style-type: none"> 困ったときに「教えてください」と依頼をしたり「分かりません」と伝えて質問したりすることができる。 嬉しかったことを話し、喜びの気持ちを確認し、疲れたことを話して教師と確認することで、落ち込んだ気持ちを前向きに持ち直すことができる。(9割 登校する) 	<p>ア 当日の写真やしおりを手掛かりにして、計画したことが「できた」ということを教師と一緒に確認することができる。</p> <p>イ 話し合い活動で自分の意見を発表することができる。</p> <p>ウ 友達からの評価を取り入れ、校外学習の楽しかったことや挑戦したことなどを教師と一緒に振り返ることができる。</p>
B (1年・男)	<ul style="list-style-type: none"> 相手の喜ぶことを考えて、手伝ったり、協力したりすることができる。 困ったときに「教えてください」「お願いします」と依頼をすることができる。(適切な声量で関わる) 	<p>ア 当日の写真やしおりを手掛かりにして、自分が挑戦したことを発表することができる。</p> <p>イ 話し合い活動で友達の意見を取り入れたり、校外学習当日にグループで行動したりすることができる。</p> <p>ウ 友達からの評価を交えながら、校外学習の楽しかったことや挑戦したことを述べるすることができる。</p>

4 指導計画(全 13 時間)

次	主な学習活動・内容	時間	資料・準備
一 見通し、学習計画 目的意識	1 全体やグループで校外学習について話し合う。 (1) これまでの学習や日常生活、地域生活を思い出し、発表する。 (2) 学習に対する目的意識をもつ。 (3) 校外学習について知る。 (目的、全体目標、期日、行先、学習集団) (4) 単元の学習計画を考える。	1	・ 去年の活動写真 ・ しおり ・ 学習計画表 ・ PC ・ プロジェクター ・ スクリーン
二 調べる、決める 共有、学び合い 試行錯誤 目標設定	2 グループで話し合い、校外学習の計画や練習をする。 (1) 行先に行く方法（バス）について調べる。 (2) 地図から行先について調べる。(お店、郵便局) (3) 行くお店や買う物、食べる物を決める。 (4) 買い物、食事でのお金の計画を立てる。 (5) 実現可能な個人目標を設定する。 (6) 当日の確認をする。(バスやレストランの練習)	5 (本時3/5)	・ しおり ・ 学習計画表 ・ 商店街の写真 ・ メニュー ・ 地図 ・ お金 ・ 財布
三 実践、試行錯誤 協力、学び合い 目標達成	3 グループで（試行錯誤しながら）校外学習をする。 (1) 計画したバスで目的地に行く。 (2) 計画した買い物や食事をする。 (3) 年賀状をポストに投函する。 (4) 計画したバスで学校へ帰る。	4	・ しおり
四 評価、振り返り 自己実現、達成感	4 グループで評価や学んだことを振り返る。 (1) 当日の写真やしおりを見る。 (2) しおりをまとめる。(買い物・食事・交通のルールやマナー、全体・個人目標の評価など) (3) 校外学習で学んだこと、楽しかったことを発表する。 (4) 友達の良かった所などを発表し、自己肯定感を高める。	3	・ 学習計画表 ・ しおり

5 本時の学習(4/13)

(1) 全体目標

しおりやお店の写真を手掛かりにして、食事と買い物のお店について、自分の意見を発表したり、友達の見意を受け入れたりしながら「みんなで行くお店」を決めることができる。

(2) 個人目標

生徒	個人目標
A (1年・男)	お店の写真を手掛かりに自分の行きたいお店を決め、話し合い活動で自分の意見を発表したり、話し合いのルールを友達に教えたりしながら買い物や食事の場所を決めることができる。
B (1年・男)	お店の写真や地図を手掛かりに自分の行きたいお店を決め、話し合いのルールを守りながら自分の意見を発表したり、友達の見意を受け入れたりして、買い物や食事の場所を決めることができる。

(3) 指導及び支援に当たって

生徒たちは前時までの事前学習を通して校外学習全体の内容(買い物、食事、交通)や学習計画について見通しをもつことができている。また、グループでの学習活動を通して「友達と協力して」や「失敗してもよい」など自分たちだけでやってみようという試行錯誤に対する意識も高まってきている。

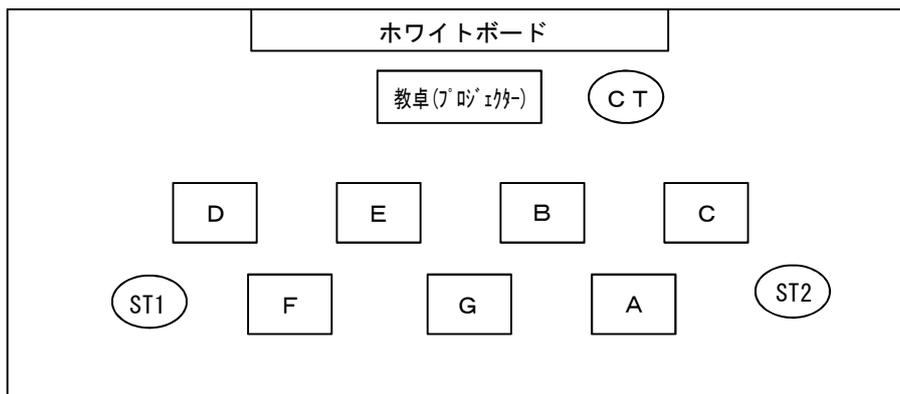
そこで、本時では、グループみんなで行くお店を決める話し合いを行う。具体的には、お店の写真やしおりの地図を見て、前時に調べたお店を思い出し、自分の行きたいお店を考えさせ、まずは自分の意見をもつことができるようにする。次に、限られた時間の中でグループ一緒に行動するためにはお店を決めることが必要であることに気付かせ、他の生単の時間に紹介された「話し合いのルール」を確認してからグループで行くお店を決める活動を行う。なお、意見が分かれ、話し合いが進まない場合には、行きたい理由などを付け加えて述べることなどを言葉掛けする。意見がすぐに一致した場合には、教師が次時に扱うお金の計画から違う店を提案したり、地図上でお店を見つける活動に移ったりするように言葉掛けをする。

(4) 実際

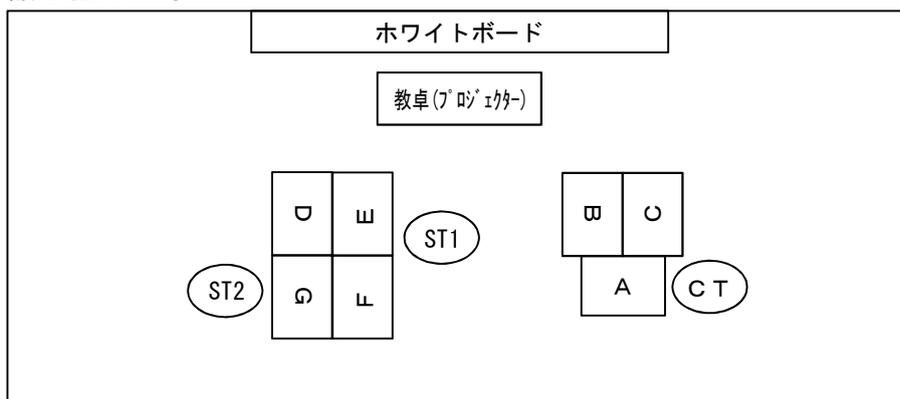
過程	主な学習活動	指導及び支援上の留意点	資料・準備
導入 (7分)	1 始めの挨拶をする。 2 前時までの学習を振り返る。 3 本時の学習を確認する。 グループで話し合っ、食事や買い物の場所を決めよう。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が主体的に挨拶をすることができるように、当番表を基に写真カードを提示する。 本時の学習内容に見通しをもたせるために、主な学習を板書しておく。 学習の流れについて理解を深めるために、学習計画表を提示したり、しおりを見ることを思い出すような言葉掛けをしたりする。 学習活動を理解し、終末で本時の評価ができるように、めあてを提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> PC プロジェクター 写真カード 学習計画表 しおり
展開 (33分)	4 商店街のお店について思い出す。 5 自分の行きたいお店を考える。 6 話し合いで大事なことを確認する。 7 グループで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 様々な意見が出るように、前時の学習内容について、しおりやお店の写真を基に思い出せるように選択肢を広げておく。 自分の意見や考えをもつことができるように時間を設け、しおりに記入できるようにする。 本時のめあてを達成することや今後の話し合い活動のルール作りとして「話し合いで大事なことをしおりで確認し、掲示しておく。」を話し合いで確認し、掲示しておく。 「話し合いで大事なことを守っている場面にはすかさず称賛する。 生徒からの依頼があったときや「話し合いで大事なことを守られていない場合には、教師が話し合いに入ったり、大事なことを思い出すような言葉掛けをしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> お店の写真 ルールカード
終末 (5分)	8 各グループで決まったことを発表する。 9 本時の学習を振り返り、次時の学習内容を確認する。 10 終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> しおりを手掛かりにグループの班長が発表する。 「話し合いで大事なことを守り、試行錯誤をしながら意見をまとめることができたことに気付けるような言葉掛けをする。 めあてを手掛かりに本時の評価を行う。 次時の学習内容を思い出すことができるように、学習計画表を提示したり、しおりを見ることを思い出すような言葉掛けをしたりする。 生徒が主体的に挨拶をすることができるように、当番表を基に写真カードを提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 写真カード

(5) 場の設定

ア 導入・終末時



イ 展開（話し合い）時



(6) 教材・教具

学習計画表	しおり	お店の写真
<p>単元全体の学習や前時、次時の学習に見通しをもたせるもの。主体的な学習活動になるように、学習計画は生徒と一緒に考えた。</p>	<p>単元で扱う全ての学習内容を流れに沿って書いてあり、学んだことを残せる。忘れたときや困ったときに、解決するツールとして使用できる。</p>	<p>話し合いの場面で、自分の考えをまとめ、発表したり、グループの意見を視覚的に示しながらまとめたりするときの手掛かりとする。</p>

(7) 評価

ア 全体目標

しおりやお店の写真を手掛かりにして、食事と買い物のお店について、自分の意見を発表したり、友達の意見を受け入れたりしながら「みんなで行くお店」を決めることができたか。

イ 個人目標

生徒	個人目標	評価	具体的な手立てについて	評価
<p>A (1年・男)</p>	<p>お店の写真を手掛かりに自分の行きたいお店を決め、話し合い活動で自分の意見を発表したり、話し合いのルールを友達に教えたりしながら買い物や食事の場所を決めることができたか。</p>		<p>写真や地図は自分の行きたいお店を決めるために有効であったか。 しおりや教師の言葉掛けは話し合いで自分の意見を発表するために有効であったか。</p>	
<p>B (1年・男)</p>	<p>お店の写真や地図を手掛かりに自分の行きたいお店を決め、話し合いのルールを守りながら自分の意見を発表したり、友達の意見を受け入れたりして、買い物や食事の場所を決めることができたか。</p>		<p>写真や地図は自分の行きたいお店を決めるために有効であったか。 「話し合いで大事なこと」の提示や教師の言葉掛けは友達の意見を受け入れるために有効であったか。</p>	

生徒の目標評価【◎:十分達成できた ○:おおむね達成できた △:達成できなかった】
教師の手立て評価【◎:十分有効であった ○:有効であったが改善が必要 △:別な手立てが必要】

(2) 授業検討会記録

鹿児島県義務教育課訪問 授業研究（中学部：生活単元学習） 記録

平成 27 年 12 月 15 日（水）

場所：職員室

※ 司会 団塚 先生

- ・ 授業検討会のルールの確認，進め方の説明

※ ワークショップ型で，授業検討会を行う。

※ 授業者より授業の意図，授業の評価の説明などの授業反省，その後，授業検討会を行う。授業検討会のグループは，テーマ研究のグループを基本に分けてある。

1 授業者より（板敷 大和 先生）

(1) 授業のねらいや悩んだところ

ア 教師の願い

- ・ 授業を通して「分かった」「できた」と感じ，達成感や次の学習意欲を高めてほしい。
- ・ 教師や友達から評価（称賛）されることにより，自己肯定感を高めてほしい。
- ・ これまで学習してきたことを実際の生活の場で友達と一緒に試行錯誤しながら実践してほしい。
- ・ 校外学習で取り組んだ内容が生徒たちの豊かな生活（余暇）につながってほしい。

イ 授業構成で大事にしたこと

- ・ 年間指導計画をふまえる
- ・ 意欲を高める工夫 → 生徒の必然性
- ・ 生徒の実態把握 → チェックリスト，個別の指導計画，アンケート
- ・ 指導の一貫性・継続性 → 指導記録票の活用（H26 年度より使用）
- ・ 生徒同士のやりとり（試行錯誤）の充実 → グループによる話し合い活動，当日の実践
- ・ 事後学習の充実（生徒が授業の中で認められ，学んだことを振り返る機会）

ウ 悩んだところ

- ・ 年間指導計画と生活単元学習における学習の必然性
- ・ 年に一度の校外学習で何を学ばせるべきか，指導内容の系統性
- ・ 学習の目的（課題解決）や他の時間とのつながりを意識させる工夫
- ・ 話し合い活動の展開の在り方

(2) コメント

初めて生単の細案を書いた。よく書き方が分かっていなくて，環境さえ揃ってれば子どもたちの課題が全て改善するものだという思いの強い指導案だったが，生単の指導案の検討を進めるにつれて，これは生単だろうかと考えた。そこから，生単って何だろう？といろいろと考え，勉強になった。生徒主体で，生活上の課題をどうやって解決していくか考えたときに，子ども同士の話し合い，学び合い，指導計画とこの学習の必然性は何かを考えるきっかけとなった。単元の始めに子どもたちと一緒に学習計画を考えた。なぜ行くのかを，教師が意識させる展開をしていなかったと気付くことができた。

本時の目標に対する評価→別紙資料。個人目標は，クリアしたと思う。目標自体が具体性に欠けて条件がいくつも入っていて評価しにくい。実態把握の改善の余地があるのではないか。

ワークショップ型の授業検討会→今日は，いろいろと御意見をいただきたい。

2 授業研究（グループ協議，グループ発表）

討議の柱【話し合い活動（言語活動）を充実させる指導の在り方※】

（※単元全体や本時の気になったところ，その改善点でも構わない。）

（F：ファシリテーター）

C（F：原 先生，記録：小倉 先生）

- ・ 良かったところ→目標にあったとおり，自分の意見が出されており，話しやすい，意見が出しやすい雰囲気。動画，iPadなどの工夫があり，雰囲気の良い，意見が出しやすい環境が整えられていた。

- ・ 気になったところ→なかなか自分の主張を曲げない子，ゆずることが苦手な子，こだわりが強い子がいたときに，どのような事前の手立てがあったのか，改善点があれば。

D (F : 今村 先生, 記録 : 北原 先生)

- ・良かったところ→①話し合いのルールが確認。お互い賛同し合う場面ができる。フィードバックができてい、褒められるポイントがはっきりしているので、子どもたちも褒めやすい。自己肯定感が高められる。教師以外の友達に褒められることで、そこからまた更に活発な言語活動につながっていく。②試行錯誤をさせる場面が設けられている。個々やグループで考える等試行錯誤することで、言語活動につながっていく。③教材関係において iPad, しおりなどが大変見やすく、子どもたちのやる気を起こし、イメージしやすい。
- ・気になるところ (改善点) →本時の目標を区切った方が分かりやすい。授業の見どころも分かりやすい。

E (F : 宮ノ前 先生, 記録 : 小牧 先生)

- ・良かったところ→教材で iPad の活用, プロジェクターの活用, しおりの活用→分かりやすく、子どもたちも使い方をよく分かっており, ICT活用ができていた。話し合いの中で, 生徒同士の話し合いの中で, 生徒主体で行われていた。
- ・気になったところ→話し合いのなかで決まらなかったときのことを考える。どうやって話し合いを進めるか, ゴールまでの流れが分かっておけばよかった。積み重ねが大切。学習時間との兼ね合い。必要事項を決めないといけないときに, どれだけ生徒主体で進めるのか, 教師がどれだけ介入していくか。教師の支援の方法を考えていければ。

F (F : 岩本 先生, 記録 : 日高 先生)

- ・良かったところ→①しおり, iPad などの活用, 視覚的支援が分かりやすい, ②話し合いのルールがあり, スムースに話し合いができていた, ③子どもたちが, 自分たちで意見を出し合うことができていた。④教師主導ではなく, 子どもたちとのやり取りのなかで, 支援が展開されていた。
- ・気になったところ→板書計画, すっきりはしているが, スライドが移り変わっていくなかで, () が難しい。もっと指導案が, 学部全体が見える指導案, 指導計画だったらよかった。元気が出せるような場の設定, グループに分かれてからの話し合いだったので, 自分の意見が出しにくい生徒がいたのではないかな。

3 指導助言

・福田 雅紀 先生

本日のお礼。若い先生方が多く、一生懸命だが自信がない先生が多いと聞いた。だけど、今日参観させていただいて質の高い授業、取組をされていた。自信をもってほしい。

・谷村真由美 先生

この授業で、何を一番狙っていたのか。方法論だけでなく、生単として今日の授業はどうだったのか。単元全体を振り返る機会にしてほしい。

生単→主体的な学習、総合的な学習、実証的な学習、活動的な学習、共同的な活動、個別的な学習生活を単元化するとは、どういうことなのか。振り返りを大切にす。新しいことに気付かせるような授業のもっていき方。事後学習の取り組みの充実させてほしい。

・萩之内 靖 先生

学期末の忙しい中の、研究授業等の設定、各学部の授業参観等のお礼。同僚性のある学校だと感じた。生活単元学習の指導のポイント (プリント参照)。生単の意義。生活経験を広げ、自発的、自主的な行動ができるよう行動の質的変容を目指す。なぜ、この時期に校外学習をするのか。必然市というところで悩まれたのではないかな。敢えて挑戦したことは、今後の先生方の投げかけになったのではないかな。それぞれの学部の基本的な考え方、自分たちの学部だけでなく、他学部のことも意識しながら取り組んでいく。指導内容の系統性。小・中・高と学部のなかで系統性を見ていく。

多様性。多様性に対応していく。創造性。発達の最近接領域の考えから目標設定をしていく。協働性。奄美の自然を満喫してほしい。

VI 特別支援学校授業力向上実践協議会資料

平成27年度第1回特別支援学校授業力向上実践協議会資料

～PDCAサイクルの機能化に係る課題と取組～

I 教育課程編成における「PDCAサイクルの機能化」について

(授業実践，授業研究等を活用した教育課程や各指導計画等の見直し)

1 昨年度までの課題

- ・ 学期ごとに指導目標や内容，実施時数の妥当性について反省を行っているが，実際に「誰が，どのような手順で課題を改善していくか」が課題である。

(C→Aが特に課題)

- ・ 学校評価や研究授業，授業検討会の意見等として「中学部・高等部6年間における指導の連携・継続性」が課題として挙げられている。(C→Aが特に課題)

2 課題解決のための今後の取組(平成27～29年度)

- ・ テーマ研究(年10回)や指導の形態部会(年3回)の時間を利用し，各指導計画における指導の継続性について実践的研究(同じ課題意識をもち，学部を解いたグループでの研究)を進める。
- ・ 各学部，月ごとに指導計画を見直し，集約した改善点を指導の形態部会(年3回)にて共有し，次年度の指導計画作成に生かす。

II 授業づくり(授業実践，授業研究等)における「PDCAサイクルの機能化」について

1 昨年度までの課題

- ・ ワークショップ型での授業検討会をテーマ研究や経験年次別研修での研究授業にて日常的に取り組むことができているが，日々の授業づくりにおいてPDCAサイクルを定着させるまでには至っていない。

(1単位時間の授業作りのpdcaサイクル)

- ・ T・Tにおける授業前ミーティングや教材研究の時間を確保が課題である。

(P→Dが特に課題)

- ・ 自分が担当する授業もあるので，研究授業へ参観することが難しい場合もある。

(D→Cが特に課題)

2 今後の取組(平成27～29年度)

- ・ 授業参観と授業検討会の新たなシステム作りを行う。(付せん紙を用いた5分間参観やビデオカメラを用いた授業検討会の推進，授業者からの参観視点の指定など)
- ・ 行事や会議の精選を行う。(会議の時間設定，事前の資料提示，ゴールの明確化と共有化)

平成27年度第2回特別支援学校授業力向上実践協議会資料

～PDCAサイクルの機能化に係る課題と取組～

I 教育課程編成における「PDCAサイクルの機能化」について

(授業実践, 授業研究等を活用した教育課程や各指導計画等の見直し)

1 平成27年度の成果

各指導計画の見直し

- ・ 毎月, サーバ上の様式に各指導計画の授業反省を入力した。(D→Cにおける成果)
- ・ 月ごとの授業反省や学校・学部行事における反省アンケートを基に, 教科等の各担当者が指導の形態部会(年3回)や学部会にて見直しや提案を行い, 次年度へ向けて準備を進めることができている。(C→Aにおける成果)
- ・ 生活単元学習及び作業学習における目標の系統性と発展性に関する検証をテーマ研究にて実施した。(Pにおける成果)

2 課題解決のための改善策(平成28～29年度)

- ・ H27年度テーマ研究の各チーム(チェックリスト, 指導計画, キャリア教育, アセスメント)における成果をH28年度実施予定の「かごしま学力向上プログラム」における授業公開にて実践し, H29年度の日々の授業の充実と教育課程や各指導計画等の見直し・編成へつなげる。

II 授業づくり(授業実践, 授業研究等)における「PDCAサイクルの機能化」について

1 平成27年度の成果

- ・ 鹿児島県音楽教育研究大会大島大会や特別支援学校学校訪問, 経験年次別研修にて付せん紙やビデオカメラを用いた授業参観や討議の柱を明確にしたワークショップ型の授業検討会を実施し, 多くの意見や改善点をもらいながら授業改善や教材・教具の工夫につなげることができた。(PDCAサイクルにおける成果)
- ・ 定例ケース会(年5回)をチームで行うことにより, 個別の指導計画の目標設定の妥当性や継続性, 客観的な評価を実施でき, 職員の同僚性や生徒の実態把握へとつながった。(PDCAサイクルにおける成果)

2 課題解決のための改善策(平成28～29年度)

- ・ 付せん紙を用いた授業参観, ワークショップ型授業検討会の更なる取組によって, 授業者の具体的な授業改善や参加者の専門性の向上を目指す。
- ・ 教材研究や職員相互の情報交換を行うための時間確保を目的とした行事や会議の見直しを行う。(事前の資料提示, 会議の時間設定, 話し合いにおけるゴールの明確化と共有化)

プロジェクト研究A チェックリスト



プロジェクト研究A
チェックリスト

VII プロジェクト研究A チェックリスト

1	研究の目的（ねらい）	29
2	研究の内容と方法	
3	研究の流れ	
4	プロジェクト研究Aの実践	30
(1)	課題の明確化と解決案の立案	
(2)	課題解決の取組	
	国語	31
	算数・数学	32
	生活習慣，身体運動の分野	33
	コミュニケーション他の分野	34
	家庭生活，職業生活	36
5	プロジェクト研究のまとめ	39

Ⅶ プロジェクト研究A（チェックリストチーム）

1 プロジェクト研究の目的（ねらい）

平成 26 年度の研究より、チェックリストを基にした分析（解釈）を複数の職員で行うことにより、その活用方法が分かったことや一貫性のある指導を行うことができたという成果があげられたものの、チェックリストの評価基準のあいまいさや一貫性・継続性の分かりにくさなどについての課題があげられた。そこで、本年度は、プロジェクト研究の一つとしてチェックリストを位置付け、次のとおり研究の目的を決めた。

チェックリストの検査項目の見直しや検討を行い、評価基準を明確化することで、チェックリストの活用の充実を図る。

2 プロジェクト研究の内容と方法

〈研究内容〉

チェックリストの検査項目を検討・見直しを行い、評価基準を明確にする。

〈研究方法〉

- (1) 検査項目の問題点を整理し、焦点化する。(年間及び学期目標設定や指導内容に生かせる内容か、表現のあいまいさ、実際の授業に活用できるか、評価基準があるかなど)
- (2) 検査項目の見直しや検討を行う。(表現、整合性、つながり)
- (3) 改訂版(案)を作成する。
- (4) 改訂版(案)の確認作業を行う。(使いやすさなど)

〈研究組織〉

グループ	研究メンバー
国語	○東あ 平ち 内山 栞木
算数・数学	○駒走 永野 有満
生活習慣、身体運動の分野 【チェックリスト(生活習慣、身体運動) / 社会生活(身辺処理、身体運動)】	○国分 宮崎 島元
コミュニケーション他の分野 【チェックリスト(集団参加、コミュニケーション) / 社会生活(備前、コミュニケーション・集団参加・地域生活・総論)】	○尾前 松元 永正
家庭生活 / 職業生活	○古村 竹崎 平ま

※ ○はグループのまとめ役

3 プロジェクト研究計画（流れ）

回	期日	実施形態	研究内容
1	6月25日	チーム研究Ⅰ	・研究の方向性の確認
2	7月24日	グループ研究①	・検査項目の問題点の整理と焦点化
3	8月27日	グループ研究②	・検査項目の見直し・検討
4	11月5日	グループ研究③ チーム研究Ⅱ	・中間報告会を受けて・改訂版(案)作成 ・各グループの取組状況報告、意見交換
5	11月19日	グループ研究④ チーム研究Ⅲ	・重複部分の調整 ・各グループの研究報告、情報の共有
6	1月7日	チーム研究Ⅳ	・確認作業とまとめ

4 プロジェクト研究Aの実践

(1) 課題の明確化と解決案の立案

全教員を対象にしたアンケート（平成 27 年 5 月実施）からチェックリストに関する問題点をアンケート形式で出してもらった結果、次のようなものがあげられた。

- ・ チェックする人によって評価基準が違う。
- ・ 年間指導計画とチェックリストと関連のある項目を再検討したほうがよい。
- ・ 重度重複障害の児童生徒も活用できるようなチェックリストが必要である。
- ・ 各種検査法を参考に簡便かつ効果的なものを作成し、具体的な手立てを導き出せるようにするとよい。
- ・ チェックリストをデータ化するとよい。
- ・ 具体的にどの検査項目が記入しにくいかを洗い出す。
- ・ チェックする時期や使い方などのマニュアルが欲しい。
- ・ チェックリストの量が多い。

これらの問題点から、取り組むべき問題の優先順位や有効性などの観点からチーム内で検討した結果、次のことを課題として設定することとした。

チェックリストの検査項目を見直し、評価基準を明確することで、職員が同じ視点で評価できて活用しやすいもの、指導に生かせるような改訂版（案）を作成する。

本校には、平成 16 年度に作成した全学部対象の「国語」と「算数・数学」、小学部対象の「チェックリスト～生活習慣・身体運動・集団参加・コミュニケーション～（以下「チェックリスト」と表記する）」、中学部・高等部対象の「社会生活に関するチェックリスト（以下「社会生活」と表記する）」「家庭生活に関するチェックリスト（以下「家庭生活」と表記する）」「職業生活に関するチェックリスト（以下「職業生活」と表記する）」の六つのチェックリストがある。それらの問題点を整理し、検査項目を検討・見直しを行うことや、発達検査等を参考にしながら評価基準を明確にすること、改訂版（案）の整合性やつながり、検査項目の表現やチェックリストそのものが使いやすいかなどの確認作業をすることで、課題の解決につながるのではないかと考えた。

各チェックリストの問題点の整理や見直しなどについてはグループごとに行った。なお、小学部対象の「チェックリスト」の検査項目と、中学部・高等部対象の「社会生活」「家庭生活」「職業生活」の検査項目は、関連する内容が含まれていることもあり、系統性をみながら見直す必要があった。そこで、それら四つのチェックリストの下位項目を関連する項目ごとに 3 グループに再編成し、「国語」「算数・数学」「生活習慣、身体の運動の分野」「コミュニケーション他の分野」「家庭生活及び職業生活」の五つのグループに分かれて研究を進めた。

(2) 課題解決の取組

グループ研究では、各グループで問題点の整理と焦点化を図り、見直し及び検討を行い、改訂版（案）を作成した。経過報告の時間を設け、各グループの焦点化された問題点や課題解決に向けた取組状況等の情報を共有し、グループ内で解決できない問題点について意見交換した。その結果、一部のチェックリストの評定基準の統一や改訂版に記載する内容を共通理解した。

- ① 「国語」「算数・数学」「職業生活に関するチェックリスト」以外のチェックリストは、3 段階評価「○：一人で行える △：支援があればできる ×：支援ありでもできない」に統一した。
- ② 発達検査等、参考にした書籍や検査名を明記する。
- ③ 重複及び類似項目は、相互の検討した結果、各分野で発達段階を知る上で必要だと判断した場合は残す。その際は、「※国（読む）1-⑤と重複」と記載する。

そして、作成した改訂版（案）についてチェックしやすさや表現、評価基準等について点検し合い、同じ視点で評価できるか・活用しやすいものか・指導に生かせるものになっているかなどを確認した。

(3) 各グループの取組

【国語】

「国語」は、チェックする際の説明書が別冊で作成してあり、「3/5できたら○」などの評価する際の基準が明記されている項目があった。また、四領域「聞く」「話す」「読む」「書く」の検査項目については発達に関する書籍や発達検査等を参考に調べたところ、整合性があり、各領域の系統性や一貫性があることを確認した。一方では、次のような問題点や疑問点があげられた。

- ・ 説明書に「身近な名詞（15程度）」など例示があるものと、ないものがある。また、説明書にあげられている例だけで評価しなければならないのか。
- ・ これらの検査項目の根拠は何か。
- ・ 上限の年齢はどこまで考えればよいのか。
- ・ 「～に関心を持ち、読む（書く）」の評価基準が難しい。
- ・ チェックリストと説明書の両方を見ながらチェックを行わなければならない。
- ・ 評価基準が明記されていない項目がある。
- ・ チェックリストの上限はどこまで設けるべきか。

そこで、これらの問題点や疑問点を解決するために、チェックのしやすさや分かりやすさ、引継ぎのしやすさを考え、検査項目と説明書を一体化した様式に変更した。また、説明がなかった項目は発達検査等を参考にして記載し、より分かりやすいように説明を付け加えた。また、検査項目の根拠となるように参考文献を設けた。下記の表は、その一部である。

表1 「国語」チェックリスト（話す）より一部抜粋

国 語（話 す）				
	1（0～1歳レベル）	チェック	解 説	参考 文献
①	母音を出す		例:「アー」「ウー」「エー」など。	遠
②	子音を出す		例:「クー」「プー」「プー」「マ」「バ」「タ」「ダ」など。	ポ
③	泣かずに声を出す		機嫌がよいときに「アー」「ウーウー」「ウァ」「オーオー」などの母音が出せたら○。	遠
④	声を出して笑う		くすぐられたり、あやされたりすると大きな声で笑えたら○。	遠
⑤	人に向かって声を出す		自分から「アッアッ」「ナンナンナン」「パッパッパッ」などという喃語を出せたら○。	遠
⑥	おもちゃなどに向かって声を出す		人形などに対して語り掛けるように声を出せたら○。	遠
⑦	同じ音声を繰り返す		例:「パパバ」「マママ」「バババ」など。	ポ
⑧	音声をまねようとする		教師が「マーマー」「ダーダー」「バーバー」など語り掛けると、その声を真似るように言う。	遠
⑨	言葉を1, 2語正しくまねる		「はい」「マンマ」「ババ」「プープー」「バイバイ」など偶然や口癖ではなく、意味のある言葉を正しい状況で使えたら○。例: 葉子箱を指さして要求したり、猫を見て「ニャー」と言って教師に教えたりする。	遠
	2（1～2歳レベル）	チェック	解 説	参考 文献
①	3つの絵や写真の中から物の名前を言う と指さす		「ワンワンはどれ」などの問い掛けに、絵本などの絵や写真の中から該当するものを指さして答えることができたなら○。	ポ
②	絵本を見て知っているものの名前を言う		動物や乗り物など身近なものがのっている絵本を見て発語があったら○。例: 「犬(ワンワン)」「自動車(プープー)」など幼児語でもよい。	津守
③	指さしながら話しかける		「イコーイコー」「オンモ」のように、教師の洋服を引っ張ったりしながら話し掛ける。	津守
④	自分の名前を呼ばれると「ハイ」と返事をする		名前を呼んで「ハイ」と返事をすれば○。返事はしないが振り向くというのは×。	津守
⑤	「ちょうだい」「いや」を使う		欲しいものものがあると「ちょうだい」と言ったり、いやなことをされたとき「だめ」「いやだ」「やめて」と言ったりしたら○。	津守
⑥	2語文を話す		「パパ かいしゃ」「アカイ プープー」「ワンワン きた」「マンマ ちょうだい」「あっち いく」「ママ ここ」などを話すようになったら○。	遠
⑦	日常の挨拶ができる		「おはよう」「ありがとう」など2つ以上正しく使えたら○。自分から先に言えなくても「○○ちゃん、こんにちは」などと挨拶されて答えても○。	S-M

なお、検査項目についても発達検査等や鹿児島県総合教育センターが作成した「子供をよりよく理解するための国語、算数・数学チェックリスト（改訂版）」を参考に、表現の見直しや、検査項目の加除修正を行った。鹿児島県総合教育センターが作成した「子供をよりよく理解するための国語、算数・数学チェックリスト（改訂版）」の「小学校」及び「中学校」を9歳以上の発達段階にある児童生徒に活用することにした。

確認作業の際に、発達年齢レベルの高い項目は、標準化された発達検査ではなく、「東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育課」を参考に作成してあるため、抽象的な表現があり、評価しにくいものがあるという課題があげられた。

【算数・数学】

「算数・数学」は、四領域「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の検査項目について発達に関する書籍や発達検査等を参考に調べたところ、整合性があり、各領域の系統性や一貫性があることを確認した。一方では、次のような問題点や疑問点があげられた。

- ・ 検査項目の表現があいまいなものがある。
- ・ 国語のように、チェックする際の評価基準が明記された説明書がなく、検査する方法が分かりにくい項目がある。
- ・ チェックリストの上限をどこまで設けるべきか。

そこで、これらの問題点を解決するために、今年度は評価基準を示した説明書を作成することに絞って研究を進めた。下記は、その説明書の一部である。

算数（数と計算）

※ 不注意による間違いを除き、各項目で指定した割合以外の場合、8割できれば達成していると判断する。

【1（0～1歳レベル）】

① （例）教師から1個ずつ渡されたおはじきをカップに1個ずつ入れることができる。3個まで入れることが1/2回できたら○。

【2（1～2歳レベル）】

① 教師に聞き取ることでできる言葉で、1～3までの数唱を1/2回することができたら○。
 ② （例）教師から興味関心のある具体物（おはじきなど）を1つ受け取り、「もう一つちょうだい」と言葉で言ったり、ジェスチャーで意思表示をすることができたら○。

【3（2～3歳レベル）】

① 教師の「に」という言葉かけで、5個ある具体物（積み木）の中から2個をとることができたら○。
 ② 教師に聞き取ることでできる言葉で、1～5までの数唱を1/2回することができたら○。
 ③ 1～3までの数字を読むことができ、言葉を頼りにして書くことができたら○。

【4（3～4歳レベル）】

① 具体物（おはじきなど）を使って、1・2・3個をそれぞれが仕切ってある物を見て、数の大きいもの、小さいものがわかれば○。
 ② 枠の中に、教師の置いた具体物（おはじきなど）の数を見て、全部で3個になるように、手元の5個の具体物からとり、置くことができる。また、枠の中の3個の具体物を、2つに分けることができる。以上の2つができたら○。
 ③ 具体物（おはじきなど）を使って、5までの個数を数えることができる。また、具体物（おはじきなど）の個数と数字を一致させることができる。以上の2つができたら○。
 ④ （教師と一緒にでも可）歩く歩調に合わせて、1～10までの数を言うことができたら○。

【5（4～5歳レベル）】

① 50までの数唱を言葉で言うことができる。または、文字で書いて伝えることができる。
 ② 具体物（おはじきなど）を使って、10までの個数を数えることができる。また、具体物（おはじきなど）の個数と数字を一致させることができる。以上の2つができたら○。
 ③ 「1+1」、「2+3」などの式を用いて、和が5までの足し算ができたら○。
 ④ 1～10までのランダムな数字の読みと書きができたら○。

【6（5～6歳レベル）】

① 具体物を用いずに、2つの10までの数字を見比べ、大小を伝えることができたなら○。
 ② 100までの数唱を言葉やで言うことができる。または、文字で書いて伝えることができたなら○。
 ③ 20までの具体物（おはじきなど）の個数を数えることができ、数字で表すことができたなら○。
 ④ 具体物（おはじきなど）を、2, 4, 6, 8, 10まで数えることができたなら○。
 ⑤ $3+4=$ などの、和が10までの式で表したたし算ができたら○。
 ⑥ $5-2=$ などの、差が5までの式で引き算ができたら○。
 ⑦ 具体物（おはじきなど）を使って、5までの数の合成・分解ができたら○。
 ⑧ 99までの2桁の数字を読むことができ、書くことができたなら○。

そのほか、国語のチェックリストと同様、鹿児島県総合教育センターが作成した「子供をよりよく理解するための国語、算数・数学チェックリスト（改訂版）」の「小学校」及び「中学校」を、9歳以上の発達段階にある児童生徒に活用することにした。

確認作業の際に、評価基準が明記されていない検査項目があることや、様式を「国語」とそろえた方がよいのではないかという課題があげられた。

【生活習慣、身体運動の分野】

「チェックリスト」の『生活習慣』『身体運動』分野と、「社会生活」の『身近処理』『身体運動』分野について、発達に関する書籍や発達検査等を参考に調べ、整合性や系統性があることを確認した。一方では、次のような問題点・疑問点があげられた。

- ・ 「チェックリスト」と「社会生活」の食事や排せつなど基本的な生活習慣の分野には、内容が類似している項目がある。
- ・ 検査項目の表現が抽象的で分かりにくく、評価しにくい文章表記があった。
- ・ 「社会生活」の『身体運動』の分野は、7歳以上の項目について作成する必要があるのか。

これらの問題点や疑問点を解決するために、類似項目の捉え方を確認し、評価しやすく、指導に生かせる検査項目や小・中・高の系統性や一貫性のある文章表記について検討した。

まず、小・中・高の系統性をもたせるために、「社会生活」の『身近処理』は、「チェックリスト」と同様、『生活習慣』に名称を変更した。次に、食事や排せつ等いくつかの類似項目については、「社会生活」の検査項目一つ一つを細分化し、生徒の課題や指導すべき内容がより明確になるようにした（表2）。

表2 「社会生活に関するチェックリスト」の平成16年度版（上）と改訂版（案）（下）より一部抜粋

生活習慣			
分野	内 容	チェック	
食 事	① 「準備→摂食→後片付け」という食事の流れを理解している。		
	② はしを使って食べる。		
	③ お皿や茶碗を持って食べる。		
	④ こぼさずに食べることができる。		
	⑤ 食べる量が適量である。		
	⑥ 好き嫌いなく食べることができる。		
	⑦ 食事のマナーが身に付いている。（口に入れたまましゃべらない等）		
排 せ つ	① 排せつの意思表示がある。		
	② 尿意、便意を感じたら自分でトイレに行く。		
	③ 便器の前に立つ（便器に座る）ことができる。		
	④ ペーパーでふき取る。（排せつ後の後始末ができる。）		
	⑤ 衣服の上げ下ろしができる。		
	⑥ 排せつに関する行動が確立している。		
	⑦ 「準備→着脱→排泄→後始末」という一連の流れを理解している。		



生活習慣		○：一人でできる △：支援があればできる ×：支援ありでもできない						
分野	内 容	中1	中2	中3	高1	高2	高3	特記事項
食 事	1 配膳の準備や後片付けができる							
	① 自分で次々と運び、大体の位置に配膳できる。							
	② 汁物もこぼさずに運び、正しい位置に並べることができる。							
	③ おかずなど汁物でないものをよそうことができる。							
	④ お玉で汁物を器に入れられる。							
	⑤ 料理に合った食器を選ぶことができる。							
	⑥ 適量・均等によそうことができる。							
	⑦ 自分で指定された場所へ片付けられる。							
	⑧ 同種の食器を重ねて、まとめて片付けることができる。							
	⑨ 食器を片付けた後、テーブルの上や床の汚れ、こぼしたものに気付いて処理できる。							
	2 はしで上手に食べる。							
	① 細かいものを挟んで食べることができる。							
	② 切り分ける、ほぐす、ひとまとめにするなどの使い方ができる。							
	③ 正しい箸の持ち方で食事をすることができる。							
	3 適切な量の食事をバランスよくとることができる。							
	① 自分で適当な量で止められる。							
	② メニューの中で、バランスよく選べる。（大皿からとる、バイキング等）							
	4 好き嫌いなく食べることができる。							
	① 苦手なものでも自分から配慮して食べる。（先に食べてしまう、混ぜる等）							
	② 体を良くするために、好き嫌いをしないで食べる。							
5 食事のマナーが身に付いている。								
① 落としたものを食べない。								
② ひじをつかない。								
③ 茶碗を持って食べる。								
④ 姿勢よく食べる。								
⑤ かきこまない。								
⑥ 音を立てない。								
⑦ 口の中に食べ物が入っている時には話をしない。								

家庭生活」と「職業生活」と同様に、学年ごとにチェックできるようにした。そして、発達に関する書籍や「S-M社会生活能力検査」等を参考に、検査項目を整理し、細分化した。「社会生活」の『身体・運動』は、保健体育やホームルーム活動などの目標設定の参考になるように健康・保健』に名称を変更し、内容も大きく見直した。

表3 「社会生活に関するチェックリスト」改訂版(案)の『健康・保健』より一部抜粋

健康・保健		○:一人で行える △:支援があればできる ×:支援ありでもできない						
分野	内容	中1	中2	中3	高1	高2	高3	特記事項
健康・保健	1 自分の体の成長の変化に対して関心がある。	/	/	/	/	/	/	
	① 肥満や痩せなどを意識している。							
	② 身体測定の結果や身体の変化などから、自分の身体の成長に関心を持つ							
	2 身体像(ボディイメージ)が形成されている。	/	/	/	/	/	/	
	① 自分の身体各部位の位置関係や大きさ・名称がわかる。							
	② 身体の左右・上下・前後などの位置関係を把握している。							
	③ 動作模倣ができる。							
	3 保健的な内容	/	/	/	/	/	/	
	① 自分から好きな運動に取り組んだり、体力の維持・向上に努めたりする。							
	② 体調に合わせて休養をとることができる。							
	③ けがをした時など簡単な応急処置をすることができる。							
	④ 常に身体や身辺を清潔に保つことができる。							
	⑤ 欲求やストレスに適切に対処できる。 (体ほぐしや音楽を聴く、仲間と遊ぶなどの対処法を知っている。)							
	⑥ 危険な場所や状況を自分から回避したり、大人に知らせたりする。							
⑦ 性に関することに対し、学習を積み上げ、適切に対処することができる。								

確認作業の際に、「正しい箸の持ち方」「手順よく洗う」など検査項目の表現が抽象的なものがあり、3段階の評価がしにくいものがあることがあげられた。

【コミュニケーション他の分野】

小学部対象の「チェックリスト」の『集団参加』『コミュニケーション』分野と、「社会生活」の『情緒・コミュニケーション・集団参加』『地域生活・余暇』分野については、他のチェックリストを照合し、重複している項目の整理をした。また、次のような問題点があげられた。

- 『コミュニケーション』の分野は、他のチェックリストと重複する内容がある。
- 『地域生活』の分野は、発達尺度より地域生活を送る上で必要な力が検査項目としてあげられているものが多い。

これらの問題点を解決するために、『コミュニケーション』分野は、内容を人との関わる時に必要な力(受容言語・表出言語、感情や行動のコントロール面、コミュニケーションスキル)に絞り、ソーシャルスキルマニュアルなどの検査等を参考に作成した。

表4 「チェックリスト」の『コミュニケーション』改訂版(案)

4 コミュニケーション		○:一人で行える △:支援があればできる ×:できない					
年齢	項目	中1	中2	中3	高1	高2	高3
3歳以上	(1) 受容言語						
	38	少なくとも15分間、人の話を聞く。					
	17	5分間以上継続して話を聞ける。					
	16	1階に3つの階層がある。					
	15	字を聞き取れない回しを指摘する。(8歳以下にチェック)					
	14	少なくとも15分間、お話を(録音・録音)を聞く。					
	13	「あ、い、う、え、お、ん」という音で答える。					
	12	尋ねられると、少なくとも5つの質問に回答できる。					
	11	2つの質問、あるいは1つの質問に2つの質問を質問する。					
	10	少なくとも5つの質問、お話を聞く。					
2歳	39	尋ねられると、少なくとも5つの質問に回答できる。					
	9	「はい」「いいえ」「うん」「ええ」と答える。					
	8	「はい」「いいえ」と答える。					
	7	指示を聞く。					
	6	1つの質問に1つの質問を質問する。					
	5	「はい」「いいえ」と答える。					
	4	「はい」「いいえ」と答える。					
	3	名前を呼ばれると返答する。					
	2	名前を呼ばれると返答する。					
	1	呼びかけに反応する。					
1歳未満	(2) 表出言語						
	36	名前を呼ばれると返答する。(「はい」「いいえ」)					
	20	「はい」「いいえ」を使う。					
	19	「はい」「いいえ」の入り口を質問する。					
	18	「はい」「いいえ」を使う。					
	17	「はい」「いいえ」を使う。					
	16	「はい」「いいえ」を使う。					
	15	「はい」「いいえ」を使う。					
	14	「はい」「いいえ」を使う。					
	13	「はい」「いいえ」を使う。					
12	「はい」「いいえ」を使う。						
11	「はい」「いいえ」を使う。						
10	「はい」「いいえ」を使う。						
9	「はい」「いいえ」を使う。						
8	「はい」「いいえ」を使う。						
7	「はい」「いいえ」を使う。						
6	「はい」「いいえ」を使う。						
5	「はい」「いいえ」を使う。						
4	「はい」「いいえ」を使う。						
3	「はい」「いいえ」を使う。						
2	「はい」「いいえ」を使う。						
1	「はい」「いいえ」を使う。						

「社会生活」の『情緒・コミュニケーション・集団参加』の分野は、内容が多岐に渡るため、『対人関係』と『コミュニケーション』に再編成し、内容を整理した。『コミュニケーション』の分野は、情緒・行動、感情のコントロール、行動のコントロールに分類し、それぞれ下位項目を設定した(表5)。『対人関係』は、検査項目欄に評価する際の説明を明記してあり、評価しやすいようにした(表6)。余暇に関する検査項目数が少なかった。本校では、余暇の過ごし方についての課題もあり、教育活動に必要な内容であるため、『余暇』に焦点を当てて内容を増やした(表7)。

表5 「社会生活に関するチェックリスト」改訂版(案)の『コミュニケーション』より一部抜粋

コミュニケーション		○:一人できる △:支援があればできる ×:支援ありでもできない						
分野	内容	中1	中2	中3	高1	高2	高3	特記事項
情緒・行動	1 感情のコントロール							
	① 情緒は安定している。							
	② ゲームなどの勝負ごとで自分の負けを受け入れることができる。							
	③ いやなことがあっても、乱暴なことをしない。(人を叩いたり、ものを投げたりなど)							
	④ いやなことがあっても、人を非難したり騒いだりしない。							
	⑤ 友だちがいやがることは言ったりやったりしない。							
	⑥ 感情的になっても、気持ちを上手く切り替えられる。							
	2 行動のコントロール							
	① 場の状況を考えて自分のすべき行動が分かる。							
	② 次の活動に対して見通しをもって落ち着いて行動することができる。							
③ 行動する前にじっくり考える。(衝動的に行動しない)								
④ 自分の行動をふりかえることができる。								

表6 「社会生活に関するチェックリスト」改訂版(案)の『対人関係』より一部抜粋

対人関係		○:一人できる △:支援があればできる ×:支援ありでもできない						参考文献:Vineland-II 適応行動尺度
内容	中1	中2	中3	高1	高2	高3	特記事項	
① 自分の感情を言葉で表す。 (例えば、「うれしい」、「楽しい」、「むかつく」、「怖い」など)								
② 親しい人との簡単な会話に応える。 (例えば、「元気?」の問いに「うん」と答えたり、「すごいね」と褒められて「ありがとう」と答えたりする、など)								
③ 仲のよい友達がいる、特定の友達に好意を示す。 (どちらの性別でもよい)								
④ 他人に対する気遣いを示す。 (例えば、「やったね、君の勝ちだね」、悲しんでいる持友だちに「大丈夫?」と言う、など)								
⑤ 困っている人を手助けする。 (例えば、転んだ人に手を差し出す、落としたものを拾ってあげる、など)								
⑥ 他人の好き・嫌いを理解している。 (例えば、「Aさんはサッカーが好き」、「Bさんは野菜が嫌い」と言う、など)								
⑦ 共通の興味をもつ相手と話ができる。 (例えば、テレビ番組や休み時間の計画、など)								
⑧ 自分と他の人との距離を適度に保つことができる。 (例えば、話しているときに他の人に近づき過ぎない、など)								
⑨ その場に合わせた感情を表現する。 (例えば、場をしらけさせたり、盛り上げすぎたりしない、など)								
⑩ 友だちに対して無理な要求をしない。 (例えば、他の友達と遊ばないことや、自分と一緒にいることを要求したりしない、など)								

表7 「社会生活に関するチェックリスト」改訂版(案)の『余暇スキル』より一部抜粋

余暇スキル		○:できる △:一部できる ×:できない						
記号	尺度	中1	中2	中3	高1	高2	高3	
自①	余暇活動への要求とワークシステムへの反応							慣れた環境であれば、ある部屋から出て別の部屋へ発言しに行く。別の部屋にいる特定の受け手に言葉化口頭の発言を運ぶ。相手の応答を元の部屋に行く。
自②	地域における余暇スキルの計画							自分のスケジュールを理解し、それに従う。時間どおり教室や作業エリアに向かい、緊急や体調後に正しいエリアに入る。時間どおり休憩後に作業を再開する。
自③	地域での余暇活動に必要なお金の計画							常に安全基準(例えば、安全に道具を使う、毒物や火災警報のような警告サインを理解する、危険なエリアや道具を認識したり避けたりする)を確認する。
自④	公共の娯楽行事に関心を示す							公共の場で分別をわきまえた行動をする。他人に著しく影響するような自己刺激行動、自傷行動、注意散漫、奇妙な行動を見せることはない。
自⑤	ペットの世話をする							他人に影響を与えるような軽度の不適切な行動を頻繁に(5回のうち3回以上)見せる。あるいは公共の場で軽度の不適切な行動(例えば、かんしゃく、ステアベンション、自傷行動など見せる)。
自⑥	1人でファーストフードのレストランで食事をする							サインの方を見るように促す必要があるが、公共の場で移動を導くサインを理解し、従うことができる。
自⑦	余暇活動後の片づけ							緊急時に際し、指掌がなくても近くの出口に急いで歩く。あるいは困難や混乱の兆候を示すことなくアナウンスの指掌に従う(例えば、警報、警報、ベル、アナウンス)に反応する。
自⑧	適切に自由時間を過ごす							指定された場所に持ち物を管理する。持ち物をなしたり、間違った場所に置いたりするのを防ぐために(例えば、1月、2回)だが、教える必要がある。
自⑨	協力して遊びに従事する							予定された活動にあっても直接指掌されたものであっても、指掌されずに30分以上適切に自由時間を過ごすことができる。
								指掌しなくても遊びの状況で他者に影響を及ぼさず、おもちゃや道具を共有し、遊びの中で活発に協力する。

「余暇スキル」の分野は、詳細に判断基準例が記載しているためという利点がある一方で、他の分野と様式が異なるため、チェックのしやすさを考慮し、様式をそろえた方がよいのではないかと課題があげられた。

チェックリスト			
<input type="radio"/> 生活習慣（食事、衣服、排泄、清潔） <input type="radio"/> 身体運動（姿勢、移動、操作、技能） <input type="radio"/> 集団参加 <input type="radio"/> コミュニケーション			
氏名			
記入者名	記入年月日	記入者名	記入年月日
小1年	平成 年 月 日	中1年	平成 年 月 日
2年	平成 年 月 日	2年	平成 年 月 日
3年	平成 年 月 日	部3年	平成 年 月 日
4年	平成 年 月 日	高1年	平成 年 月 日
5年	平成 年 月 日	等2年	平成 年 月 日
6年	平成 年 月 日	部3年	平成 年 月 日
鹿児島県立大島養護学校			

上記の2グループの取組の結果、「チェックリスト」と、「社会生活」の改訂版（案）が完成した。

ここで、この二つのチェックリストの改善点について整理する。

「チェックリスト」については、各分野の検査項目の重複・類似事項を整理し、文章表記の検討を行い、項目の加除修正を加えた。5段階評価から3段階評価に変更したため、「発達プロフィール表」を削除した。職員の活用のしやすさと、各項目のチェックを行うことで個々の課題を見つけやすいと考えたからである。このチェックリストは小学部対象に作成されたものであるが、「社会生活」でチェックすることが難しい場合（発達段階が7歳段階に満たない場合）は、これを使用することを最終報告会で全職員に周知した。

図1 小学部対象の「チェックリスト」改訂版（案）の表紙

社会生活に関するチェックリスト	
<input type="radio"/> 生活習慣 <input type="radio"/> 健康・保健 <input type="radio"/> 対人関係 <input type="radio"/> コミュニケーション <input type="radio"/> 余暇スキル	
生徒氏名	
記入者名	記入年月日
中1	平成 年 月 日
中2	平成 年 月 日
中3	平成 年 月 日
高1	平成 年 月 日
高2	平成 年 月 日
高3	平成 年 月 日
鹿児島県立大島養護学校中学部・高等部	

「社会生活」については、「チェックリスト」との系統性をもたせるために、「身辺処理」から「生活習慣」へ、「身体・運動」から「健康・保健」へ、「情緒・コミュニケーション・対人関係」から「対人関係」と「コミュニケーション」へ、「地域生活・余暇」から「余暇スキル」へ、再編成した。各分野の検査項目については、前述のとおり、生徒の課題や指導すべき内容がより明確になるように、一つ一つの内容を細分化した。

図2 中学部・高等部対象の「社会生活に関するチェックリスト」改訂版（案）の表紙

【家庭生活、職業生活】

「家庭生活」や「職業生活」は、他のチェックリストと照合し、関連性のある項目や重複している項目を洗い出し、削除・追加すべき項目を整理した。重複項目に関しては、本校は中学部又は高等部から入学・転入学する生徒がいるため、実態把握に必要と思われる項目は残すことにした。また、次のような問題点があげられた。

- ・ 手立てとして記載されている道具や用具が時代の流れに合っておらず、生徒の実態に合わないものではないか。
- ・ 検査項目は、より評価しやすい表現にした方がよい。
- ・ 「職業生活」の『働くこと』は客観的に評価しにくい。
- ・ 「職業生活」の『作業習慣』に関しては、作業内容によって作業技能が異なり、生徒の意欲面も反映されることが考えられる。よって、作業班を記入できる項目を挿入してはどうか。ただし、作業学習以外でも評価できることも考慮しなければならない。
- ・ 「家庭生活」は、学校における教育活動の様子だけでは評価しにくい項目がある。

これらの課題を解決するために、まず、「家庭生活」では、時代の流れや生徒の実態に合うような道具や用具に変更（「缶切り」から「イージーオープンふたの缶詰」へ、「ビデオ」から「DVD」へ、カセットテープを削除、「ペットボトルや缶ジュースのふたを開ける」を追加等）した。内容によっては作業内容を細分化して指導内容に生かせるようにした。さらに、特記事項を設け、付加すべきことを書き込めるようにした（表8）。

表8 「家庭生活に関するチェックリスト」改訂版（案）の一部抜粋

衣生活								
○：一人できる △：支援があればできる ×：支援ありでもできない								
分野	内 容	中1	中2	中3	高1	高2	高3	
着 装	1 衣服が汚れたら着替える							
	2 下着を毎日取り替える							
	特記事項： 上記リストに付加する記述がある場合や詳細な所見がある場合等に記入する							
被 服 等 管 理	3 汚れたものを洗濯に出す							
	4 洗濯機を使う(洗剤を適切に入れる, 洗濯機の操作方法が分かる)							
	5 洗濯物を干す(物干し竿にタオル等を掛ける)							
	6 衣服をハンガーに掛けることができる							
	7 乾いたら取り込む							
	8 取り込んだ洗濯物をたたむ(タオルや体操服, 下着など)							
	9 シャツなどをしわを伸ばしながらたたむ							
	10 ハンカチのアイロンがけをする							
	11 シャツのアイロンがけをする							
	12 アイロンのドライとスチームを使い分ける							
	13 靴や上履きを洗う(洗剤やせっけんの適切な使用, ブラシの使用)							
	14 ボタンをつける							
	15 スカートやズボンのすそをまつ							
	16 ミシンを使って雑巾を縫う							

家庭生活に関するチェックリスト

○ 衣生活
○ 食生活
○ 住生活

生徒氏名

	記入者名	記入
中1		平成 年 月 日
中2		平成 年 月 日
中3		平成 年 月 日
高1		平成 年 月 日
高2		平成 年 月 日
高3		平成 年 月 日

鹿児島県立大島養護学校 中学部・高等部

次に、保護者に食生活や掃除など聞き取りや、実際に用紙にチェックしてもらうなど、保護者に協力依頼ができるようにした。そのことが職員にも分かるように、表紙にその趣旨を明記した（図2）。

「リストの内容については、学校における教育活動の様子のみではその状況が判断しにくい項目も含まれています。家庭へチェックのお願いをしたり、聞き取りを行ったりして、チェックを行うようにしてください。」と記載した。

図3 「家庭生活に関するチェックリスト」改訂版（案）の表紙

「職業生活」では、「岡山県特別支援教育キャリア教育発達段階表」を参考に『働くことへの理解』の「働くことへの理解ができていく」という項目の評価基準を明記した。検査項目については、作業学習や現場実習で行われている作業内容と照合し、追加したり評価しやすいような表現にしたり、記入例を示したりした。また、各分野の評価の目安についても、より分かりやすいように表現について検討し、変更した（表9）。

表9 「職業生活に関するチェックリスト」改訂版(案)の一部抜粋

働くことへの理解							
※ A:大いにある B:ある C:少しある D:ない							
分野	内 容	中1	中2	中3	高1	高2	高3
働くことへの理解	1	学校での仕事(係活動, 役割分担, 作業学習等)に対する興味・関心がある。					
	2	将来働くことへの興味・関心がある。					
	3	学校での仕事に対する意欲がある。					
	4	将来働くことへの意欲がある。					
	5	なりたい職業がある。(ある場合は具体的に記入)					
	6	働くことへの理解ができています。(該当する項目の記号を記入) ア:役に立つことの喜びを感じる イ:様々な職業があることが分かる ウ:労働と報酬の関係が分かる エ:卒業後の進路について意識できる オ:自分の役割を自覚し,その責任を果たすことができる カ:作業学習や実習で,働くことの意味や大きさが理解できる キ:労働と自己の能力の関係が分かる(参考:岡山県特別支援教育キャリア教育の発達段階表)					
作業習慣							
※ A:一人でできる(または「はい」) B:言葉掛けでできる(または「ふつう」) C:教師と一緒に付いてできる D:難しい(または「いいえ」)							
分野	内 容	中1	中2	中3	高1	高2	高3
準備など 規則	7	作業に必要な道具, 用具を準備する。					
	8	作業後, 使用した道具, 用具を所定の位置に片付ける。					
	9	時間など, 作業の決まりを守る。					
	10	安全に注意して作業する。					
作業能力							
※ A:確実にできる(または「はい」) B:時々できる(または「ふつう」) C:教師の何らかの支援があればできる D:難しい(または「いいえ」)							
→ 職業生活の視点からのチェックのため, 『ひとり』でできる状態像をチェックする							
分野	内 容	中1	中2	中3	高1	高2	高3
細かい作業	11	折り紙の端を合わせて四つに折る。					
	12	蝶結びをする。					
	13	3種類(A4, はがき大, 名刺大;各5枚)の紙を大きさで分類する。					
	14	3色のボールペンを分解し, 再度同じ色で組み立てる。					
	15	直径の違う3種類のボルトナット(各3個)を組み合わせる。					
	16	ドライバーの種類が分かり, ねじを締めたり緩めたりできる。					
※ A:11kg~15kg B:6kg~10kg C:3kg~5kg D:ひとりでは難しい(または「いいえ」)							
→ 職業生活の視点からのチェックのため, 『ひとり』でできる状態像をチェックする							
分野	内 容	中1	中2	中3	高1	高2	高3
持ち上げ	17	床にある荷物を持ち上げる。					
	18	10メートルの距離を, 荷物を持って運ぶ。					
	19	パイプ椅子を持ち上げて運ぶ。(運べる個数に○をする)	4 2 1 0	4 2 1 0	4 2 1 0	4 2 1 0	4 2 1 0
	20	大きな重たい荷物(折りたたみ式の長机等)を二人で協力して運ぶ。					

研究をとおして, グループ内で, 環境的な要因や作業内容によって評価が違ってくことや, 評価者の主観が入ることを念頭に置いて, 活用し, 引継ぐようにしたほうがよいのではないかと
いう意見があがった。また, 生徒がこれまでに積み上げてきた学習内容や定着度, 手立てなどについて, 指導者側が知り, それに基づいた配慮をする必要がある。そこで, チェックリストを

活用する際の注意点や作業班名を表紙に明記し, 職員が意識して評価したり指導に生かしたりすることができるようにした。

職業生活に関するチェックリスト

作業に関する知識・技能

生徒氏名

所属作業班

学年	作業班
1年	1年
2年	2年
3年	3年

鹿兒島県立大島養護学校 中学部・高等部

項目によっては, 複数の主観的な評価になりがちですが, 作業内容や一緒に取り組む友達, 教師との関係によって状態像が変化しますが, それも生徒の成長としての一面なので, 主観的評価も引継ぎや生徒理解を助ける資料となり得るのではないか」という主観的な評価も評価するよう考え, 本チェックリストを適用してください。

記入者名	記入年月日
中1	平成 年 月 日
中2	平成 年 月 日
中3	平成 年 月 日
高1	平成 年 月 日
高2	平成 年 月 日
高3	平成 年 月 日

- 活用に際しての考え方について環境要因や作業内容の違いにより状態像が変化することや, 主観的な評価も引継ぎや生徒理解を助けるための資料となり得ると捉えてほしい趣旨を明記した。
- 作業班名を記入する項目の設定

図4 「職業生活に関するチェックリスト」改訂版(案)の表紙

料理の献立として目玉焼きやレトルト食品などが、作業能力として折り紙や3色ボールペンの分解と組み立てなどが取り上げられていたりするが、これらが選択されているのか根拠が不明である。日常生活の指導や生活単元学習、作業学習の単元や指導目標、指導内容と照合し、検査項目の内容や評価基準についての検証が課題点としてあげられた。

5 プロジェクト研究のまとめ

(1) 成果

- ア 全職員が同じ視点で評価できるように評価基準を明確にしたチェックリストの改訂版（案）を作成することができた。
- イ 数種類のチェックリストの評定基準を統一する、検査項目と説明書を一体化した様式のチェックリストを作成する、検査項目の内容や表現を見直すなど、職員が活用しやすいように工夫することができた。
- ウ チェックリストを行うことで児童生徒の実態を把握し、目標設定や指導内容を考える際に活用できるような検査項目を作成することができた。
- エ チェックリストを見直す際に、根拠となった発達検査等が分かるように、参考文献を明記した。
- オ 年間指導計画との関連を考慮しながら見直すことを意識することで、本校の年間指導計画の課題に気付くことができた。

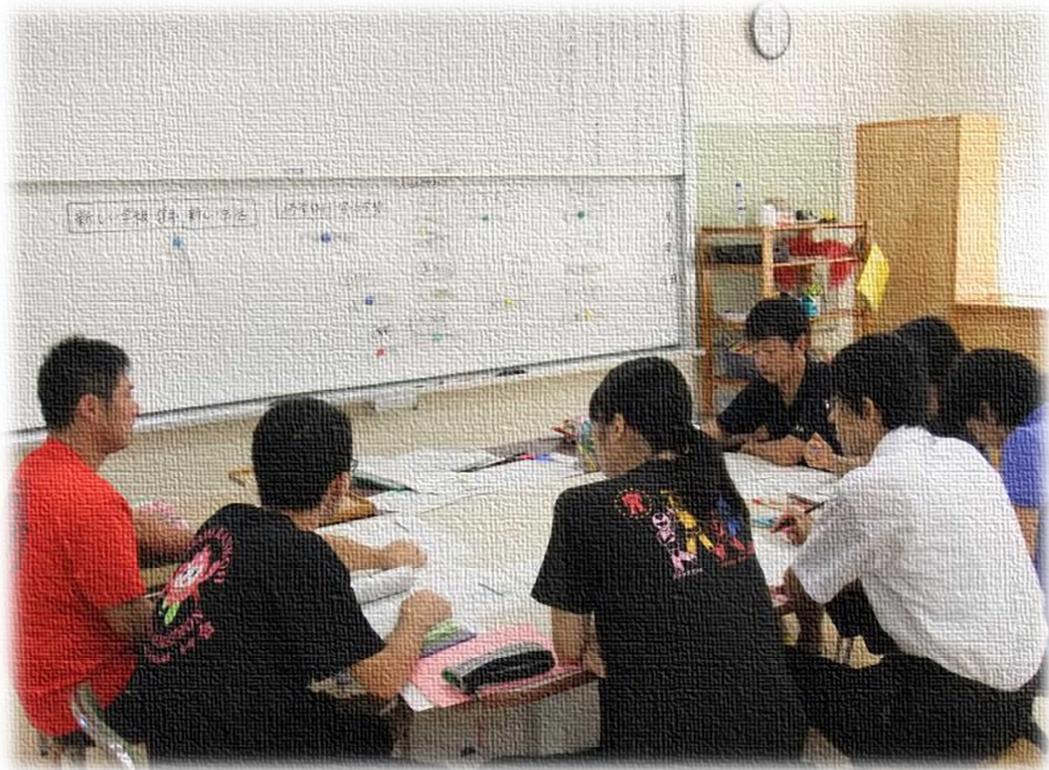
(2) 課題

- ア 職員が活用しやすいように、ある程度様式を統一する必要がある。
- イ 年間指導計画の題材や単元、指導目標、指導内容と検査項目の内容について照合し、検査項目内容の妥当性や指導内容との関連付けについて検証し、見直しを行う必要がある（教育課程の見直しも含めて）。
- ウ より評価しやすく、活用しやすいように検査項目の表現や内容、検査項目数の見直しを行う必要がある。

(3) 来年度へ向けて

- ア 全職員に改訂版（案）のチェックリストを使ってチェックし、意見を集約し、最終版を作成する。
- イ 他のプロジェクトチームと連携を図りながら、各チェックリストとの年間指導計画との関連性や、授業に生かせる内容であるか、チェックリストを活用したアセスメント方法などを検証する。
- ウ 検証後、チェックリスト最終版を平成29年度の各教科等の年間指導計画の「チェックリストとの関連性」に記載する。

プロジェクト研究B 年間指導計画



プロジェクト研究B
年間指導計画

VIII プロジェクト研究B 年間指導計画

I	研究の理由	40
II	研究の目的	
III	研究の仮説	
IV	研究内容と研究方法	40
1	研究の内容と方法	
2	研究計画	
3	研究組織	
V	研究の実際	42
VI	研究のまとめ	52
1	成果	
2	課題	

Ⅷ プロジェクト研究B（年間指導計画）

I 研究（年間指導計画）の理由

全体テーマである「一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導」を受けて、年間指導計画グループでは、生活単元学習と作業学習の課題は何かを話し合った。そこで、以下の二つの課題が挙げられた。

- ・ 生単，作業において，小・中・高各学部を意識した取組ができていない。
- ・ 年間指導計画を整理するなかで小・中・高同じような単元や題材があることが分かったが，各学部のねらいや指導の様子が分からない。

この二つの課題を解決するために，年間指導計画グループでは，各学部の取組が分かるような資料を作成することが必要であると考えた。資料を作成することで，授業を行う際に各学部の取組を意識（共有）しながら取り組んだり，系統性を踏まえたねらいを基に個に応じた目標を考えたり，指導の工夫をしたりすることができるのではないかと考えた。

II 研究の目的

各学部の取組が分かる生活単元学習と作業学習の資料を作成することで，各学部の取組を意識した授業を行うことができる。

III 研究の仮説

生活単元学習・作業学習それぞれの小・中・高のねらいを照らし合わせて系統的に検証していくことで，小・中・高継続した指導ができるのではないかと考えた。

IV 研究内容と研究方法

1 研究の内容と方法

研究内容1：生活単元学習において，単元一覧表と単元のねらいをまとめた資料を作成する。

〈研究方法〉

- ① 各学部の生活単元学習のねらいを持ち寄り，同じような単元ごとにねらいをまとめる。
- ② まとめたものを基に，系統性を考えながら目標の見直しを行う。
- ③ 『生活単元学習ねらい（目標）の一覧表』としてまとめる。
- ④ 単元一覧表を作成する。

研究内容2：作業学習において，単元一覧表を作成する。

〈研究方法〉

- ① 単元一覧表（案）を作成する。
- ② 単元一覧表（案）を基に授業実践を行う。
- ③ 実践を基に単元一覧表（案）の加除・修正を行い，単元一覧表を完成させる。

2 研究計画

月日	曜日	数	実施形態	計画内容	備考
6/2	火	①	全体研究	・研究提案	
6/25	木	②	グループ研究Ⅰ	・Bグループ計画提案 ・生単・作業学習のグループ分け (各グループのまとめ役を決める。)	
7/24	金	③	グループ研究Ⅱ	各グループ(生単・作業学習)での取組 【生単】単元のねらいを持ち寄り、ねらい	現時点での各学部の単元・題材 一覧表を持ち寄り、各学部の今 の取組を 共有する という視点 から取り組んでいく。
8/27	木	④	グループ研究Ⅲ	を見直す作業を行う。(小グループ) 【作業】今後の話し合いを行い、中・高の 単元一覧表(案)を作成する。	
10/1	木	⑤	グループ研究Ⅳ (中間報告会)		
11/5	木	⑥	グループ研究Ⅴ	各グループ(生単・作業学習)での取組 【生単】ねらいの見直しを行う。(生単グ ループ全体) 【作業】単元一覧表(案)を基に実践を行 い、単元一覧表活用の有効性と単元目標の 妥当性について検証を行う。	
11/19	木	⑦	グループ研究Ⅵ	生単グループと作業学習グループそれぞ れの取組の紹介、意見交換を行う。	【意見交換のテーマ】 作業学習をするにあたって、 小学部でできる取組はないか
1/7	木	⑧	グループ研究Ⅶ	各グループ(生単・作業学習)での取組 ・まとめ 【生単】単元一覧表、ねらいの一覧表を完 成させる。 【作業】単元一覧表を完成させる。	
1/28	木	⑨	実践報告会Ⅷ		
3/11	金	⑩	全体研究	・研究まとめ	

(テーマ研究全10回、うちグループ研究8回)

3 研究組織

年間指導計画グループは、小・中・高各学部縦割りの17名で構成されている。そこで、生活単元学習と作業学習の二つのグループに分かれて研究を進めていくことにした。

小学部	中学部		高等部	
生単	生単	作業	生単	作業
山下	前潟	若松	小野	上園
原	高野	小倉	島田	里
今村	前山	二禮木	川畑	米里
美座			北原	原口

V 研究の実際

研究内容 1：生活単元学習において、単元一覧表と単元のねらいをまとめた資料を作成する。

- (1) 生活単元学習のグループでは、まず各学部の単元のねらいを持ち寄り、同じような単元ごとにねらいをまとめる作業を行い、単元のまとまりは以下のとおりになった(表-1)。

表-1 単元のまとまり

①	新しい学部・学年・学級
②	校外学習関係
③	人との関わり
④	修学旅行・宿泊学習
⑤	運動会をがんばろう
⑥	キャリア教育
⑦	学習発表会
⑧	もうすぐ進級・卒業
⑨	栽培・調理
⑩	季節単元
⑪	日生的な単元
⑫	情報

- (2) 次に、まとめたもの(表-2)を基に、生活単元学習グループのなかで小・中・高縦割りのグループを作り、系統性を考えながら単元ごとの目標の見直しを行い、必要に応じて、小・中・高の学部の枠を取り払って考えた(表-3)。その際、ねらいを見直すときの共通理解として、四つのことを確認した(図-1)。

表-2 【例】現在の各学部の単元のねらい

		単元【運動会をがんばろう】
小	低学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会のグッズ作りなどを通して運動会を意識することができる。 ○ 運動会の準備をすることができる。 ○ 友達や教師と一緒に運動会の準備や練習をすることにより、集団の中で身体を動かすことの楽しさを味わうことができる。
	高学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会のグッズ作りや係活動を通して、運動会に見通しをもつことができる。 ○ 友達や教師と一緒に運動会の準備や練習をすることにより、集団の中で身体を動かすことの楽しさを感じることができる。
中		<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会の準備や後片付け、係活動を通して、友達と協力したり、自分の役割を果たそうとしたりすることができる。 ○ 運動会に参加することを通して、健康や運動に対する意欲や関心を高めることができる。 ○ 友達や教師と一緒に運動会の準備や練習を通して、集団の中で体を動かすことの楽しさを感じることができる。
高		<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会のビデオを見たり、自分や友達のチームを知ったりすることを通して、運動会に関心をもつことができる。



- ・ 目標はシンプルに考える。
- ・ 内容を見直すのではなく、目標の系統性を見ていく。
- ・ 必要に応じて加除、修正をしていく。
- ・ 文言をそろえる。(～することができる。)

図-1 見直しをするときの共通理解事項



表-3 【例】(縦割りグループでの)見直し後の単元のねらい

単元【運動会をがんばろう】
<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会について知ることができる。 ○ 運動会への見通しや期待感をもつことができる。 ○ 運動会に必要な道具の準備をすることができる。 ○ 運動会の係や役割を決めることができる。 ○ 運動会に参加することができる。 ○ 運動会の振り返りをするすることができる。 ○ 来年度に向けての期待感を高めることができる。

(3) 更に、生活単元学習グループ全員で、ねらいをそのまま残すもの、新たに加えるもの、削除するもの、順番を入れ替えるものなど、ねらいを検討する作業を行った(表-4)。

表-4 【例】見直し後の単元のねらい

単元【運動会をがんばろう】	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会について知ることができる。 ○ 運動会への見通しや期待感をもつことができる。 ○ 運動会に必要な道具の準備をすることができる。 ○ 運動会の係や役割を決めることができる。 ○ 運動会に参加することができる。 ○ 運動会の振り返りをするすることができる。 ○ 来年度に向けての期待感を高めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ※ 削除 ○ 運動会の係や役割を決めることができる。 ○ 運動会に必要な道具の準備をすることができる。 ※ 削除(当日は学行カウントのため、特活) ※ 削除(運動会の振り返りをするすることで、来年度に向けての期待感が高めることができる。また、「期待感を高めることができる。」という目標は内面的なもので評価をしにくい。評価しやすい行動目標を立てることが必要である。)

(4) 最終的に、[例]運動会をがんばろうのねらいは、四つに絞られた(表-5)。

表-5 【例】単元のねらい

単元【運動会をがんばろう】
<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会について知ることができる。 ○ 運動会の係や役割を決めることができる。 ○ 運動会に必要な道具の準備をすることができる。 ○ 運動会の振り返りをするすることができる。

(5) 見直したねらいを年間指導計画のなかの目標の部分に入れ込む作業を行い(表-6), 資料を作成した(別冊資料)。各学部共通の目標を基に学部の目標を考えたり, 学部の目標を基に学習内容を考えたり工夫したりすることができる考える。

表-6 [例] 中学部 生活単元学習 年間指導計画

単元名	運動会	期間	ここに、ねらいを見直したものを 入れ込む! 小・中・高すべての学部、 同じものが入る。
時数	計9時間 運動会の準備(学級での取組) 3 係活動 4 会場設営 2		
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動会について知ることができる。 ○ 運動会の係や役割を決めることができる。 ○ 運動会に必要な道具の準備をすることができる。 ○ 運動会の振り返りをするすることができる。 		
学習内容	チェックリストとの関連	指導上の留意点	
1 運動会について話し合う。 (1) 昨年の様子を、VTRを見ながら思い出す。 (2) 期日や種目、練習計画を知る。 (3) 係活動について知り、係の希望を提出する。	社-情-コ 社-情-コ 社-情-協	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部共通の目標を基に、学部の目標を考えることができる。 ・学部の目標を基に、学部ごとに学習内容を考えたり工夫したりすることができる。 	

(6) 見直したねらいをどういうふうに学部や個人におろして目標を考えていくかという、図-2のようになる。また、小・中・高のねらいを統一したことで各学部の取組を意識しながら指導することができるようになり(縦の一貫性)、結果的に継続性につながっていくのではないかと考える(図-3)。

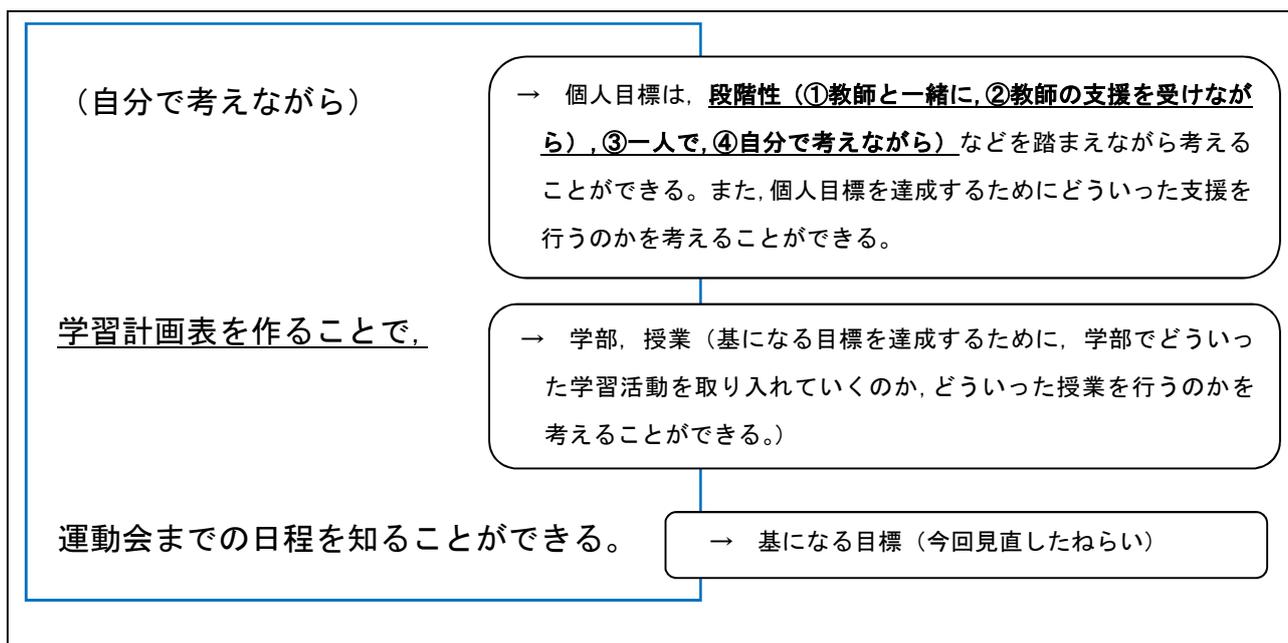


図-2 [例] 個人目標の考え方

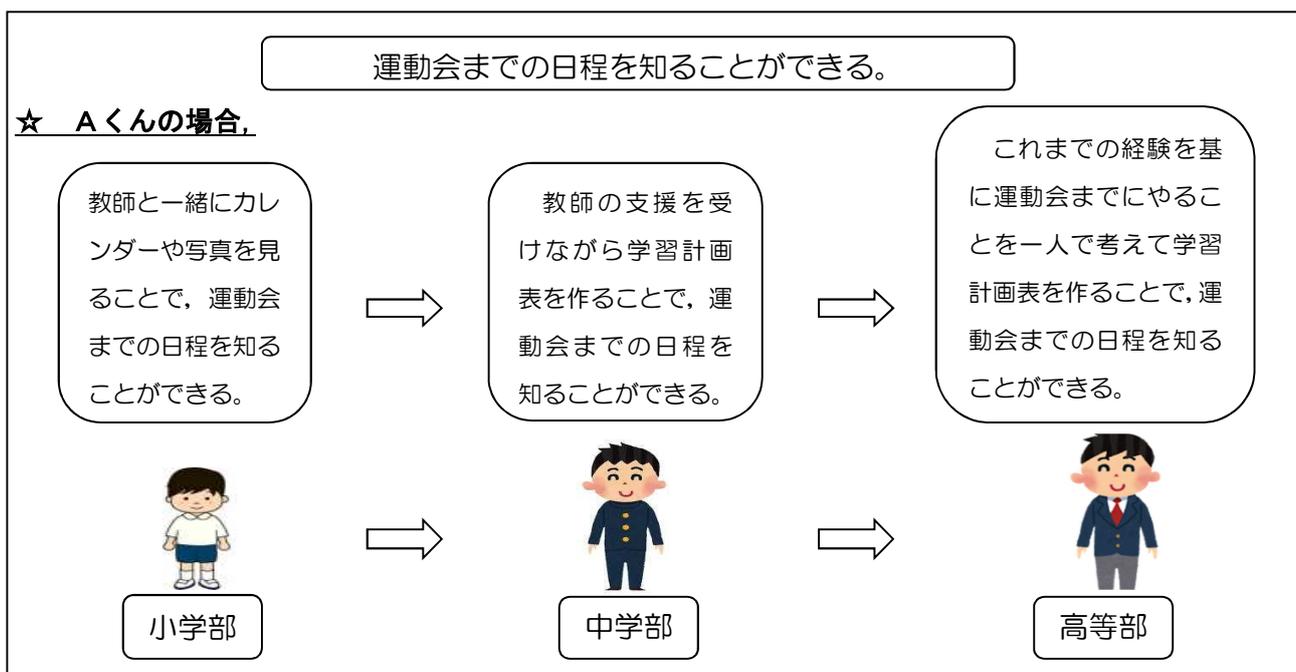


図-3 【例】継続性を踏まえた個人目標の考え方

研究内容 2：作業学習において、単元一覧表を作成する。

(1) 作業学習のグループでは、作業学習における課題についての話し合いを行い、二つの課題が挙げられた。

現在、各学部の作業班別の題材一覧表があり、各学部、各班での作業内容や製作している製品は分かるが、

- ・ 数種類の作業学習班があるなか、学部内での目標の段階性が見えにくい。
(○○班と△△班の各学期の目標の支店は共通しているのか、よく分かっていないのではないか。)
- ・ 中学部→高等部の段階性が見えにくい。

そこで、以下の仮説を立てて取り組んでいくことにした。

学部内での目標の段階性、中学部→高等部の目標の段階性を共通理解できる単元一覧表があれば、継続性のある指導を行うことができるのではないか。

(2) 単元一覧表(案【資料 1】)の作成を行った(8～9月)。その際、作成をするときの共通理解として、四つのことを確認した。

ポイント!



- ・ 現在の指導計画や学習指導要領を踏まえる。
- ・ 各作業班が、共通した視点で指導に当たることができるよう、単元名と単元の目標を示す。
- ・ 1学期→3学期、中学部→高等部の目標の段階性を確認する。
- ・ 単元一覧表は学部ごとに作成するが、並べて示すことで他学部の取り組みを知ることができるようにする。

【作業学習】 中学部 単元一覧

中学部			
月	単元名	目標	教科等との関連
4 12h	『作業学習について知ろう』 『〇〇の作り方を知ろう』 『販売をしよう』	<ul style="list-style-type: none"> ・作業学習の目的, 作業内容を知る。 ・販売までの主な作業工程を知る。 ・作業の一連の流れ(準備～作業～片付け～反省)を知る。 ・製品の作り方を学ぶ。 ・製品作りに必要な道具の名称と使い方を学ぶ。 ・挨拶, 返事, 報告, 質問の仕方や伝え方を学ぶ。 ・分担された作業に取り組む。 ・作り上げる, やり遂げる達成感をもつ。 ・目標の立て方を学ぶ。 ・販売に必要な準備, 係を知る。 ・販売での客とのやり取りを学ぶ。 ・働くことで報酬をもらうことを知り, 働くことへの意欲をもつ。 	生単:働く生活Ⅰ (職場見学)
5 12h			
6 16h			
7 8h			
9 16h	『〇〇を作ろう』 校内実習をしよう, 職場体験をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の一連の流れに見通しをもち, 自主的に行動する。 ・自分から挨拶, 返事, 報告, 質問をする。 ・自分が作りたい製品, 取り組みたいことを選ぶ。 ・分担された作業に責任をもって取り組む。 ・販売を意識して, 丁寧に製品を作る。 ・道具を安全に正しく使う。 ・作り上げる, やり遂げる達成感を高める。 ・自分が達成できそうな目標を自分で立てる。 ・一定期間の継続した作業や実際の事業所で働くことを通して, 将来の働く生活への関心をもつ。(校内実習, 職場体験) 	生単:働く生活Ⅱ (事前事後学習)
10 16h			
11 12h			
12 12h			
1 12h	『〇〇を作ろう』 『バザーに向けて準備をしよう』 『バザーで販売をしよう』 『1年間の反省をしよう』	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの人と協力して作業に取り組む。 ・自分が立てた目標を適切に評価する。 ・販売に必要な準備, 係を自分たちで考える。 ・販売を意識して, 丁寧に製品を扱う。 ・客を意識したやり取りを考える。 ・販売を通して, 達成感や働く喜びを味わい, 働くことへの意欲を高める。 ・売上金の使い方(材料購入, 報酬)を知る。 ・報酬でしたいことを話し合って計画を立て, 周りの人と協力して実行する。 	学習発表会
2 16h			
3 8h			

【作業学習】高等部 単元一覧

高等部				
月	単元名		目標	教科等との関連
4	『作業学習について知ろう』 『〇〇の作り方を知ろう』 前期 産業現場等における実習	I 段階	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の目的, 各班の作業内容を知り, 希望の作業班を選ぶ。(自己選択) ・主な作業工程を知る。 ・様々な製品の作り方を知る。 ・作業の決まりや指示, 伝達, 注意などを守る。 ・分担された作業に, 責任をもって取り組む。 ・掃除の仕方や道具の収納の仕方を学ぶ。 ・製品の良否が分かる。 ●作業に使う道具, 機械などの名称, 操作の仕方を知り, 安全に正しく扱う。 ●時間を守る。 ●注意を集中し, 根気強く作業をする。 ●作業に応じた服装をする。 ●適切な言葉遣いをする。 ●自分の立てた目標を適切に評価する。 	生単:働く生活
5				
6				
7				
9	『〇〇を作ろう』 しおかぜ市場 後期 産業現場等における実習	II 段階	<ul style="list-style-type: none"> ・販売に必要な作業内容や係について知り, 友達と協力して準備する。 ・販売活動を通して, 次の販売に向け必要なことを見つける。 ・物を作り, 育てることの喜びを味わう。 ・製品の良否が分かり, よい物を作る。 ・整理整頓を心掛け, 作業室を清潔に保つ。 ●働くことの喜びを知り, 進んで仕事に参加する。 ●積極的に自分から仕事を探し, 作業する。 ●分からないときに報告・連絡・相談する。 ●丁寧さやスピードを意識して作業する。 ●一定時間継続して作業のできる体力と気力を身に付ける。 ●自分の得意なこと苦手なことを知る。 ●人との関わり方を知る。 ●礼儀を大切にす。 ●作業の決まりを守り, 周囲の人と協力し合って作業する。 	総合:しおかぜ市場を 成功させよう 生単:働く生活
10				
11				
12				
1	『〇〇を作ろう』 『一年のまとめをしよう』 中高バザー	III 段階	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの経験を生かし, 友達と協力して販売活動の準備をする。 ・販売活動を通して物を作り, 育てることの喜びを味わい, 仕事への自信をもつ。 ・販売活動を通して流通について知り, 計画的な消費活動を行う。 ●他の人と協力して作業する態度を身に付ける。 ●スピードや丁寧さを意識して作業する。 ●自分で工夫したり, 友達と協力したりして作業する。 ●急な作業内容の変更や交代にも対応して作業する。 ●場面に応じた声の大きさで, 報告・連絡・相談をする。 ●自分の不得意な部分を補おうと努力したり, 得意なことを生かしたりしようとする。 ●働くことの大切さや厳しさを知り, 卒業後の生活について自覚をもつ。 	学習発表会
2				
3				

●は, 実習にも関する項目。

(3) 作成した単元一覧表（案）を基に，実践を行った（10～11月）。

① 対象作業班

- ・ 中学部陶芸班，高等部窯業班

② 実践の目的

【検証1】

単元一覧表が継続した指導をするうえで有効か，授業をするうえで活用しやすいか。

【検証2】

単元目標（＝各時期で身に付けさせたい力）の妥当性

③ 実践方法及び実際

単元一覧上の「挨拶・返事，報告・連絡・相談」「役割・協力」「目標・評価」に関する目標をピックアップし，それを達成するために行った指導・支援，生徒の様子・変容を記録した（資料2）。

ア 挨拶・返事、報告・連絡・相談

学部	学期 【段階】	単元名 目標	指導・支援	生徒の様子・変容
中学部	1 学期 【基礎】	「〇〇の作り方を知ろう」 ・挨拶、返事、依頼、報告、質問の仕方や伝え方を学ぶ。	・授業開始時の「健康観察」「先生の話」のときに、毎回、挨拶と返事を指導する。 ・エプロンが結べないときは、教師に依頼するように指導する。 ・報告する教師、タイミング、を定めて指導する。報告の文言は、生徒の実態に応じる。 ・分からないときは、教師に質問するように指導する。生徒が困っているときに指導の機会とする。	・「おはようございます」「こんにちは」と、大きな声で挨拶をする。名前を呼ばれたら返事をして答える。 ・自ら依頼、報告、質問をすることができるようになった生徒もいるが、教師からの言葉掛け（「終わりましたか?」「どうしましたか?」など）を受けてから行う生徒もいる。
	2 学期 【定着】	「〇〇を作ろう」 ・自分から挨拶、返事、依頼、報告、質問をすることができる。	・少し離れたところで、生徒が報告しに来るのを待つ。 ・先回りをして状況を整えることをあえて減らし、生徒が質問をする機会をつくる。 ・報告をするタイミングを含めて示した作業工程表を使用する。	・教師からの言葉掛けがなくても、依頼等ができる生徒が増えた。 ・報告のタイミングを自ら判断することは難しい生徒は、左記の作業工程表を活用することで、自分から報告をすることができるのではないか。
高等部	1 学期 【Ⅰ段階】	「〇〇の作り方を知ろう」 「前期産業現場等における実習」 ・適切な言葉遣いをする。	・はじまりの会で「作業用語」を 21 項目復唱し、練習する。 ・生徒の実態に応じて、作業の確認や報告のタイミングを伝える。 ・相手に伝わる声の大きさを意識させたり、友達と話すような言葉遣いにならないよう言葉掛けしたりする。	・練習のときの声は大きい。 ・自信が無いと、教師の言葉掛けを待つ様子も見られたが、ほとんどの生徒は作業が終われば「終わりました。確認をお願いします。」の報告ができるようになった。 ・はきはきした言葉遣いを意識し、実行できると良い。
	2 学期 【Ⅱ段階】	「〇〇を作ろう」 「後期産業現場等における実習」 ・分からないときに報告・連絡・相談する。	・確認や報告のタイミングを伝え、生徒から報告できるようにする。 ・生徒が報告してくるのを待つ、もしくは、報告しなければならない状況を意図的に設ける。 ・相手に伝わる声の大きさを話さず伝える。	・分からないときに自己解決してしまうことが多い。 ・困っているのかな?と思う場面でも、そのままやり過ごしてしまい、助けを求めた様子が見られない。 ・挨拶や返事はできるが、報告に関してはタイミングが分かっていない様子がある。 ・報告・連絡・相談をする声が小さい。

イ 役割・協力

学部	学期【段階】	単元名 目標	指導・支援	生徒の様子・変容
中学部	1 学期【基礎】	「〇〇の作り方について知ろう」 ・挨拶、返事、依頼、報告、質問の仕方や伝え方を学ぶ。 ・販売に必要な準備、係を知る。	・1学期は、挨拶、返事、依頼、報告、質問の仕方や伝え方の学習を通して、人と関わり合いながら作業をすることを指導する。 ・接客、会計、梱包、三つの係に分かれて販売準備・練習をすることを指導する。	・左記の学習を通して、作業班としてのまとまり、仲間意識が出てきた。特に、販売学習は、「1学期に作った製品をお客さんに売る」という一つの目標をもち、分担された係に意欲的に取り組むことができたので良かった。
	2 学期【定着】	「〇〇を作ろう」 「校内実習をしよう」 ・分担された作業に責任をもって取り組む。	・1学期は、全員同じ製品を作ったが、2学期からは、作る製品の種類を増やして担当を決める。	・製品作りを担当制にすることで、一人一人の責任がより明確になり、「がんばろう」「きれいに作りたい」など、作業に対する意欲や集中力が高まりつつある。 ・同じ製品を作る友達がいることで、友達の様子を見て作ったり教えたりする生徒もいる。 ・釉薬掛けや修正では、友達と直接的に協力して取り組むことができた。
	3 学期【発展】	「〇〇を作ろう」 「バザーに向けて準備をしよう」 ・周りの人と協力して作業に取り組む。		
高等部	1 学期【Ⅰ段階】	「〇〇の作り方を知ろう」 「前期産業現場における実習」 ・分担された作業に責任をもって取り組む。	・基礎技法を習得するまで生徒同士ペアをつくり、準備や作業の確認ができるようにする。 ・主な作業工程（〇〇づくり・磨き・釉薬掛け）ごとに友達と協力できるような場面設定（ペア・グループ）や言葉掛けを行う。	・作業内容を覚えるまでは、友達や周りの人を意識して作業することが難しい。 ・磨きや釉薬掛けの作業では、友達同士確認しながら作業を行うことができていた。 ・時々、友達に命令するような言い方をしてしまう生徒がいた。
	2 学期【Ⅱ段階】	「〇〇を作ろう」 「後期産業現場における実習」 ・人との関わり方を知る。 ・作業の決まりを守り、周囲の人と協力し合って作業する。	・作る製品を分担する。 ・道具を貸し借りする場面を意図的に設定する。 ・必要な道具の準備・片付けを分担して行う。 ・同じ製品を担当する友達同士で製品の出来を確認し合う。	・同じ製品を担当する友達がいるものの、関わる機会が少ない。 ・作業内容によっては、生徒同士の関わりは難しい。（釉薬掛けや修正では関わりがもちやすい。） ・声を掛け合って道具の準備・片付けに取り組んでいる。 ・今後、協力し合う、競い合う、切磋琢磨する姿が見られると良い。
	3 学期【Ⅲ段階】	「〇〇を作ろう」 「一年のまとめをしよう」 「中高バザー」 ・他の人と協力して作業する態度を身に付ける。 ・自分で工夫したり、友達と協力したりして作業する。		

ウ 目標・評価

学部	学期 【段階】	単元名 目標	指導・支援	生徒の様子・変容
中学部	1学期 【基礎】	「〇〇の作りかについて知ろう」 ・目標の立て方を学ぶ。	・4, 5月は, 教師が目標を示す。6・7月は, 作業反省時に次時の目標を皆で話し合う。 ・製品作りのポイントや本時でできなかったところが目標につながることを教える。	・作業反省時に, できたこと, できなかったことを考えて発表することができた(評価)。本時の評価をすることで, 次時の目標を見付けることができた。
	2学期 【定着】	「〇〇を作ろう」 「校内実習をしよう」 ・自分が達成できそうな目標を自分で立てる。	・製品作りのポイントを板書しておき, 目標を立てる際の手掛かりとなるようにする。 ・作業反省時に, 本時の作業を受けて次時の目標まで立てるように指導する。 ・校内実習の目標・態度面と技術面で立てるようにする。	・前時の反省と製品作りのポイントを踏まえ, 自分で目標を立てる生徒もいるが, 教師と一緒に考える生徒が多い。 ・自分で考えると, 評価しにくいものになることが多い。
	3学期 【定着】	「〇〇を作ろう」 「バザーに向けて準備をしよう」 「バザーで販売しよう」 「1年間の反省をしよう」 ・自分が立てた目標を適切に評価する。		
高等部	1学期 【1段階】	「〇〇の作り方を知ろう」 「前期産現場における実習」 ・自分が立てた目標を適切に評価する。	・最初の二ヶ月は, 教師が立てた目標を達成できるように取り組んだ。 ・出来上がりの個数を表に記録し, 具体的な目標個数を決められるようにする。 ・目標例を提示する。 ・反省を記入した後, 担当教師からコメントをもらう。 ・反省会の時に二人発表させる。	・前時の作業を振り返り, 改善点や注意点を意識すると, 目標を立てることができる。 ・自分が立てた目標を適切に評価することが難しく, 自分の頑張りを中心に書いている。注意されたことなどは, 教師と一緒に確認した。 ・適切に評価できているが改善が見られなかったり, 目標を意識するための言葉掛けが必要であったりする。
	2学期		・前時の作業から改善点を見出し, 目標を立てられるように指導する。 ・反省発表では, 聞く相手にどんなことをしたのか伝わるように発表できるように指導する。	・生徒によっては, 言葉掛けが必要な生徒もいるが, 相手が聞きやすい発表ができるようになってきた。

④ 実践の成果と課題

【検証1】

単元一覧表が継続した指導をするうえで有効か、授業をするうえで活用しやすいか。

【成果と課題】

- 中・高共通した目標をもって指導・支援し、生徒の様子・変容を記録し情報交換を行うなかで、生徒の課題がいくつかのまとまりで見ることができた。今後、目標の妥当性を確認していくうえで参考になる。更に、学年や作業班、作業内容が変わっても、共通した単元目標をもつことで継続的な指導を行うことができる。
[縦と横のつながり]
 - 単元目標を明確にすることで、指導者間で指導・支援方法を話し合うことができた。同時期に行う指導・支援の方法をほかの作業班と共有することもできるのではないかと。
[横のつながり]
 - 個人に対する継続的な指導に役立つ。
[例]○○くんは、高等部2年生だけど、目標は中学部の定着段階が合っている。
- △ 中・高合わせた一覧表にはなっているが、目標の欄において縦と横のつながりが分かりにくいという表記上の問題がある。

【検証2】

単元目標（＝各時期で身に付けさせたい力）の妥当性

【成果と課題】

- △ 「挨拶・返事、報告・連絡・相談」「役割・協力」「目標・評価」の観点で目標をピックアップして、観点ごとに並べると、段階的になっていないところがある。

(4) 実践のまとめで挙げた課題を踏まえて、単元一覧表を修正する作業を行った（11～12月）。

- ・ 目標を、「挨拶・返事、報告・連絡・相談」「作業技能」「役割・協力」「販売活動」「目標・評価」の五つの観点で分ける。
- ・ それぞれの観点の目標が、学部内・学部間で段階を踏んでいるかを見直し、加除修正を行う。
- ・ 文言や表現で統一できるところは統一する。
- ・ 目標を観点ごとに並べ替え、Bグループとしての単元一覧表を完成させる（別冊資料）。

VI 研究のまとめ

1 成果

生活単元学習及び作業学習において単元一覧表やねらいの一覧表を作成することで、小・中・高各学部の取組を知ることができた。他学部の取組を共有することで、これから先、他学部の取組を意識した授業を展開することができる（一貫性）。また、小・中・高継続した指導ができると考えられる（継続性）。

2 課題（来年度に向けて）

生活単元学習及び作業学習で作成した資料を基に学部や個人目標を考えたり、指導・支援を行ったりすることができる。また、授業実践をとおして単元一覧表の修正を行ったり、目標の妥当性を考えたり、授業改善をしたりすることができる。とよいと考える。

プロジェクト研究C
キャリア教育



プロジェクト研究C
キャリア教育

IX	プロジェクト研究C	キャリア教育	53
1	研究の目的（ねらい）		
2	研究の内容と方法		
3	研究の流れ		
4	研究組織		
5	プロジェクト研究Cの実践		
(1)	課題の明確化と解決案の立案		
(2)	課題解決の取組		
	Aグループ		55
	Bグループ		57
	Cグループ		61
6	プロジェクト研究のまとめ		63
7	研究の構想図と成果・課題図		64

Ⅸ プロジェクト研究C（キャリア教育チーム）

1 プロジェクト研究の目的（ねらい）

キャリア教育は、平成25年5月実施の職員アンケートにおいて取組の必要性が確認されていたものの、平成26年度はアセスメントを利用した指導を中心に研究を行い、今後の課題の一つとされていた。本年度は、プロジェクト研究の一つとしてキャリア教育を位置付け、次のとおり研究の目的を決めた。

キャリア教育の視点を取り入れ、一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導を充実させる。

2 プロジェクト研究の内容と方法

研究は、二段構成で進めた。研究の前半は、キャリア教育に関する職員アンケートの整理と指導に関する問題点の分析を通して課題の明確化を行い、その上で解決策を立てた。後半では、解決策に対して、キャリア教育チームを3グループに分けて研究を進めた。各グループの内容と方法については、5で説明する。

3 プロジェクト研究計画（流れ）

回	期日	内容	研究の段階
1	6月25日	進路指導計画の活用にあたっての問題点を挙げる	↓ 課題の明確化 解決策の立案
2	7月24日	進路指導計画の活用のための課題と今後の取組を決める	
3	8月27日	中間報告に向けてのまとめ（取組の方針を確認）	
4	11月5日	グループごとの研究	↓ 課題解決の取組
5	11月19日	グループごとの研究	
6	1月7日	各グループの研究の報告	

4 プロジェクト研究組織

グループ	研究メンバー
キャリア教育(A)	嘉村 塗木 ○栞 淵上 宮ノ前 岩元（吉岡）
キャリア教育(B)	富岡 馬場 坂元 日高 ○榊 東也（小牧 板敷）
キャリア教育(C)	石原 岩本 瀧田 徳重 ○春口

※○は、各グループのリーダー

5 プロジェクト研究Cの実践

(1) 課題の明確化と解決策の立案

全教員を対象にしたアンケート（平成27年5月実施）とキャリア教育チームのメンバーを対象にしたアンケート（平成27年6月実施）の結果から、キャリア教育に関する主な問題点・疑問点として次のものが挙げられた。

- ・ 各学部でどのような力を見に付けるべきかが共有・整理されていないのではないか。
- ・ 日常の学習が児童・生徒の将来の生活の質の向上につながっているのか。
- ・ ボトムアップ的アプローチとトップダウン的アプローチをどのように結び付けていけばいいのか？

これらの問題点・疑問点から、取り組むべき問題の優先順位や有効性などの観点からチーム内で検討した結果、次のことを課題として設定することとした。

キャリア教育の視点から、各学部で身に付けておきたい力について整理し、共有する。

この課題に対しては、既に本校には「キャリア教育の指導計画」（以下、「指導計画」）を「キ

キャリア教育の指導計画」という意味で用いる。)があり、これを活用することが課題の解決につながるものと考えた。そこで、「指導計画」の活用にあたっての問題点の整理と分析、及び、課題解決のための取組の方向性の検討を行った。

問題点の整理と分析については、キャリア教育チームを(A)(B)(C)の3グループに分け、各グループ内で問題点をカードに列挙し、グループごとに分けるという方法で行った。以下は、各グループがまとめた問題点である。

Aグループ
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学部間でギャップがある <ul style="list-style-type: none"> ・ 夢を見る中学部と現実を見る高等部とのギャップが現状の課題である。 ○ 「指導計画」の指導内容と実際の授業内容の差が大きく、活用が難しい <ul style="list-style-type: none"> ・ 各学部の理想の生徒像と指導する生徒の実態に差があるので使いにくい。 ・ I 課程から全ての課程で同じ目標となっている。 ・ 進路指導の内容が大きくて、力がついているのか分からない。 ・ いろいろな種類の指導計画がある。たくさんあり過ぎて活用できているのか。 ・ 「指導計画」にある「指導内容」が具体的でない。 ・ 「指導計画」の内容が多すぎる。そのため、分かりにくく、読み込めない。 ○ 指導内容の絞り込み <ul style="list-style-type: none"> ・ 「指導計画」を活用したとしてのゴール(卒業後)が具体的にイメージできない。全て網羅することは難しいことから、少しずつ実践例を挙げるのはどうか。 ・ 「身に付ける」「定着する」という点で、かけている時間が少ない。もっと指導内容を絞り込んでどうか。
Bグループ
<ul style="list-style-type: none"> ○ 内容がわかりづらい <ul style="list-style-type: none"> ・ 「指導計画」の内容が多く、絞り込めていない。 ・ 内容が細かすぎて(大切なことですが)、全体像が見えない。分かりやすい大きな目標が欲しい。 ・ 枚数が多い。ぱっと見て分からない。 ・ ポイントが不明確。 ○ 活用の仕方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「指導計画」を活用できていない。 ・ せっかくある「指導計画」をじっくり見る時間がない。研修の時間とかに目を通す時間があればよい。 ・ 「指導計画」がサーバーに入っているらしいが、どこに入っているのか知らなかった。教育課程のフォルダに入れるべき。 ・ 教育課程のサーバーに入っていないため、周知・認知されていない。 ・ 身だしなみ一つをとっても、これを見ても活用できない。 ○ 位置付け <ul style="list-style-type: none"> ・ 「指導計画」と年間指導計画・支援指導計画との関連を意識することが必要。 ・ 「指導計画」の全体の中での位置付けが不明確である。 ○ 授業に生かせない <ul style="list-style-type: none"> ・ 「指導計画」を見ても授業に生かせるような内容になっていない。 ・ 各授業の内容の寄せ集めになっていて、学部間や学年におけるつながりが見えない。 ○ 個別の指導計画との関連 <ul style="list-style-type: none"> ・ キャリア教育の意味を教員一人一人がしっかりと理解し、教育活動に生かすことが必要である。 ・ 生徒によって実態も様々で、指導計画に沿った内容を必ずしもクリアできるとは限らない。(どこまでできたらクリアなのか分かりづらい) ・ 「キャリア教育の指導計画」と「個別の指導計画」を柔軟に対応させる教師の力が必要。 ○ たて・よこのつながり <ul style="list-style-type: none"> ・ 小・中・高の縦のつながりが分かるようではない。 ・ 日生・遊び・生単・作業の位置付けなどは、「指導計画」では分からない。

Cグループ

- 「指導計画」を意識して授業をしているか
 - ・ 教師一人一人は日常の中で、児童・生徒に身に付けさせたい力とキャリア教育を自然に結び付けて指導しているが、児童生徒の実態に応じて、ボトムアップとトップダウンの視点の切り替えなど教師の見立てに委ねている。周りの教師とケース会などで共通理解。
 - ・ 「指導計画」を意識していない。(小学部の目標は日生や生単の目標と変わらない)
 - ・ キャリア教育の観点をみんなが分かっているとは限らない。
 - ・ 「指導計画」を意識して授業をしていない。
- 各学部の連携
 - ・ 各学部で一貫した取組ができていない。
 - ・ 進路指導で小学部でもっとやっておいてほしいことがあれば知りたい。
 - ・ 学部の指導に対する特性からアプローチを考えるしかない？
- 「指導計画」の見直し
 - ・ 小・中・高の学部間引き継ぎの際、個別の指導計画や教育支援計画の労働・福祉の欄などをキャリア教育の視点で記入するなど工夫してもよいのでは？
 - ・ 計画をどう授業に生かしていけばいいかよく分からない。
 - ・ さらに「指導計画」を見やすくする。
 - ・ 「指導計画」に目を通していている人が少ない？(目を通していない人がいるのでは?)
 - ・ 計画自体をよく見ていないのかも(内容理解不足)。もう少し視覚的だと頭に入りやすい。
 - ・ 日々の授業の参考になり得る内容にしないといけない。
 - ・ 読んでも内容が難しく、理解しにくい。

さらに、3グループが挙げた問題点を整理することで、「指導計画」の活用に関する主たる問題点を次のとおりとすることができた。

【内容面】

- ① 12年間を通じた目指す方向性が共有されていない。
- ② 指導内容が絞り込めていない。

【活用面】

- ① 個別の教育支援計画・指導計画との関連を意識する機会が少ない。
- ② 「キャリア教育の指導計画」を目にする時間・機会がない。

これらの主たる問題点をもとに、構想図のとおり研究の方向性を決定した。(64頁「キャリア教育グループの取組の構想図」)

(2) 課題解決の取組

【研究A】 キャリア教育(A)グループ

1 研究の目的

「キャリア教育」というキーワードや、既に作成されている「キャリア教育の指導計画」を基に日頃の授業や児童生徒の指導に当たっているが、なかなか「キャリア教育」に取り組んでいるという実感が得られない。

そこで、「キャリア教育」を意識しやすくすることと、生活年齢や学部の段階に沿って日頃の実践が進められるようにするためにツールとなるものを考え、提案することを研究の目的とした。

2 研究の方法

上記で述べる「ツールとなるもの」を「キャッチフレーズ」と位置付ける。

各学部の教育目標とそれを詳しく説明したものについて内容を分析し、小学部、中学部、高等部へと段階(つながり)が感じられるような「キャッチフレーズ」を学部ごとに作成する。「キャッチフレーズ」は、具体的な指導内容を考えたり、キャリア教育を意識しやすくしたりするようなものになるようにする。

3 研究の実際

具体的な作業に入る前に、グループにおいて「キャリア教育」について考える機会を設定し、キャリア教育が日常的に行われるためのポイントについて確認した。

具体的な研究は、グループのメンバーを中心に各自で各学部の教育目標とそれを詳しく説明したものの内容を読み込む作業をし、その後グループで集まって協議しながら「キャッチフレーズ」を導き出すための話し合いを行った。グループで集まったの協議を4回行い「キャッチフレーズ」の作成を進め、次の「キャッチフレーズ」を作成した。

◆ 小学部「キャッチフレーズ」

みつけよう 広げよう
～教師や友達との多様な体験を通して～

◆ 中学部「キャッチフレーズ」

みつめよう 高めよう
～一歩踏み出し、挑戦しながら～

◆ 高等部「キャッチフレーズ」

みとめよう 生かそう
～社会生活に向けて～

4 研究による成果と課題

プロジェクト研究「キャリア教育」グループとして、『キャリア教育を実践するためには、どのようなことを意識しながら日頃の児童生徒の指導に当たることが大切か』ということについてグループ内で話し合いをしたり、メンバーの一員を講師として見立てての研修（「キャリア教育」について考える機会）を設定したりしながら、キャリア教育に関する理解を深めることができたことが今回の研究を通しての一番の成果であったと考える。あたりまえのことのようと思われるが、この、キャリア教育に関する理解を深めるという取組が、キャリア教育を意識した実践をするということにつながる大切なポイントであるように感じる。そのことを踏まえた上で、今回作成した各学部の「キャッチフレーズ」は生きていくと思われる。

今後の課題としては、今回作成した各学部の「キャッチフレーズ」は、学校全体のごく一部のメンバーの協議によるものであり、学校として、学部として採用するに値するものであるかどうか、更には、この「キャッチフレーズ」を活用しながら、キャリア教育を意識した実践を行うことができるかどうかということが、今後検証していかなければならないこととして考えられる。

5 まとめ

今回の研究では、「キャッチフレーズ」を作成するという具体的な目標に向けて研究を進めてきたが、この「キャッチフレーズ」を作成するという作業において「言葉を選ぶ」ということが一番難しいことであった。言葉には一般的な意味や限定的な意味があり、そのことにとらわれてしまうと、今回提案する「キャッチフレーズ」によって、私たちの指導が制限されたり、限定的なものに陥ったりすることも予想される。

キャリア教育の視点を踏まえた指導を実践するためには、「キャッチフレーズ」のようなイメージしやすいものを『活用する力』が教員に必要である。私たちの「キャリア発達」は、今どのような状況にあるだろうか。

【研究B】 キャリア教育（B）グループ

1 はじめに

キャリア教育Bグループは、キャリア教育全体計画の内容面における課題解決のための取組として、「指導の形態間の関係を明確にし、キャリア教育の観点を位置づける」ことを目的に研究に取り組んだ。

2 研究方法と実際

(1) 平成27年8月27日（グループ研究I）

キャリア教育について目指す方向性や内容を話し合う前に、研究の方向性を定める目的で、次のように、Bグループ内でのキャリア教育についての共通理解をした。

テーマ研究（キャリア教育Bグループ）

H27. 8. 27

キャリア教育の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

キャリア発達とは

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。

知的障害特別支援学校におけるキャリア教育とは

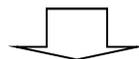
自分でやれることを増やしていこうとする態度・意欲（勤労観）をはぐくみ、自らの生き方を主体的に考え、進路を適切に選択できる能力・態度（職業観）を障害の特性や発達段階に応じて育成する教育

今、子どもたちには、将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力が求められています。

この視点に立って日々の教育活動を展開することこそが、キャリア教育の実践の姿です。

キャリア教育の定義、キャリア発達及び知的障害特別支援学校におけるキャリア教育を確認することで、キャリア教育とは「能力・態度を育成する教育」であることを確認し、キャリア教育の実践とは「～を指導すること」から「指導内容が、～の能力育成につながる」ということであることを共通理解した。

- ・ 教師児童生徒に～を指導すること
- ・ 児童生徒が授業で～をすること



キャリア教育の観点（考え方）を変える！

- ・ 学習活動や指導内容が、将来～の能力育成につながる
- ・ 学習活動や指導内容が、将来～の役に立つ

今後の研究活動については、次のように確認した。

- ① キャリア教育の視点から、各指導形態間のつながりを明確にした上で、主となる「キャリア教育計画」の「項目」に挙げられる能力を位置付ける。
- ② ①を踏まえ、図を作成する。
- ③ ①②の内容に関する説明を文章にまとめる。

また、作業スケジュールについては、次のように確認した。

11月5日（グループ研究Ⅱ）：本校のキャリア教育全体計画の4能力16項目の指導内容を指導の形態（「遊びの指導」「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」）ごとに整理したものの確認をする。

- 指導の形態ごとの担当者
 - 遊びの指導：富岡
 - 日常生活の指導：東也（小牧）
 - 生活単元学習：板敷，日高
 - 作業学習：馬場，坂元
 - とりまとめ：榊

11月19日（グループ研究Ⅲ）：グループ研究Ⅰで確認した指導の形態ごとの指導内容を図式化したものを検討する。

(2) 平成27年11月5日（グループ研究Ⅱ）

本校のキャリア教育全体計画の4能力16項目の指導内容を「遊びの指導」「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」ごとに整理した資料の確認をした。

また、中間報告会のアンケート結果から、指導の形態間の関係を図に示すことの必要性の有無の意見があり、グループ内で計画の見直しをした。その結果、図に示すのではなく、指導の形態間ごとに指導内容を整理する過程で、「キャリア教育に関する指導計画と現在の年間指導計画の整合性が合わない点などがあつた」という意見があつたことから、本年度の指導計画から指導内容の転記漏れ等の見直しをすることにした。その見直した結果からキャリア教育の実践にむけた効果的な方策を見出すことにした。

(3) 平成27年11月19日（グループ研究Ⅲ）

本校のキャリア教育全体計画の4能力16項目の指導内容を「遊びの指導」「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」ごとに整理し、さらに、本年度の指導計画から指導内容の転記漏れ等を見直し最終的にまとめたもの（別紙資料）を確認した。

また、メンバー一人一人が各自担当する作業のデータの提出をする際に、「今回の作業をする中で、意識が変わつた」「こんなに4能力16項目に当てはまる指導内容があるとは思わなかつた」というような言葉を聞くことができたことから、「作業をした一人一人の感想」を記録し、今年度のキャリア教育Bグループにおける取組を今後の大島養護学校でのキャリア教育実践で生かしていく方策を検討することにした。

「作業をした一人一人の感想」の抜粋

- ・ 将来を見据えた指導内容が明確になったり整理されたりすることで、授業を行う上で子どもに身につけさせたいが力が見えてきた。
- ・ キャリア教育の中の4領域のどこと深く関わりがあるのか一覧で確認できるようになった。一単位時間の授業の中でもどこが重点となるのか分かりやすくなった。
- ・ 内容を教科ごとに分ける作業をすることで「小→中→高へのつながり」や教科間のつながりを知ることができた。
- ・ 教師が意識をもち指導していくことがキャリア教育になるのだと思う。
- ・ 作業学習(高)の指導内容を、実際に「キャリア教育に関する指導計画」での4能力

16項目に振り分ける作業をしてみて、高等部の5つの作業班それぞれで、同じ項目の育てることをねらった活動があることに気がついた。

- ・ ある程度文章を短くまとめないと入れられなかったので生単そのものの教育課程の文言とは違っている部分がある。
- ・ どの授業や教科・領域においても「視点」があるのかは分かっているが自分がどれほどそのことを意識していないか、というのは感じたように思います。
- ・ 収穫としては、自分たちが再認識できたこと、小から高まで切れ目なく続く学習でなくてはならないこと、トップダウンとボトムアップを緩やかにつなぎ合わせる必要を感じたこと。
- ・ 日々の授業でやっていることが、「こんなキャリアを育てるんだ」という意識が高まった、気付くことができた。
- ・ キャリア教育の4能力16項目の視点で日々の授業の展開（活動）をするようになった。目的意識「なぜこれを学ぶのか」を考えさせるようになり、子どもたちに先のことを考えさせることができています。（時間設定ができています。）
- ・ 指導の形態ごとに分ける作業をすることで、日頃から指導している内容がキャリア教育にうたわれている4能力16項目に全体的に当てはまり、しかも思った以上に数が多いことが分かった。
- ・ キャリア教育に関する指導計画の具体例（表）を現行版に改訂する基本資料を作成することができた。

3 考察

別紙資料から、現在行われている指導内容が、キャリア教育でうたわれている4能力16項目の育成に十分に相当する活動であり、指導内容によっては複数の指導の形態に共通していることがわかる。しかし、年度初めのアンケート記述集約にあるように「日常の学習と卒業後の状況とのつながりが疑問」や「今の学習が将来につながるのか」、「キャリア教育の具体的な指導を知りたい」という声があるのも事実である。これらの要因として

- ・ キャリア教育というものの理解が教師によって温度差がある、統一されていない（定義の共通理解がなされていない）。
- ・ キャリア教育の実践というものが、今までの学習活動・指導内容とはまったく別の活動を取り入れるものだという意識がある

などが考えられる。

そこで、まずキャリア教育の概念を職員で共通理解し、現在児童生徒が学習しているものへの指導の一つ一つが、キャリア教育における自立に向けて基盤となる能力の育成につながっていくという意識をもつことが教師と児童生徒が共に実感するキャリア教育の実践につながると考える。

4 成果と課題

キャリア教育Bグループのメンバーによる、本校のキャリア教育全体計画及び本年度の指導計画から指導内容の転記漏れ等を見直し最終的にまとめた資料（別紙資料）作成から、次のような成果が上げられる。

キャリア教育Bグループのメンバーによる「作業をした一人一人の感想」からも分かるように、本校のキャリア教育全体計画の指導内容を「遊びの指導」「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」ごとに整理し、さらに、本年度の指導計画から指導内容の転記漏れ等を見直し最終的にまとめたことで、作業する段階で、本校で既に行われている指導内容が、キャリア教育につながるものであることを再認識したり、キャリア教育でうたわれている4能力16項目の育成に相当する活動であることに気付いたりすることができたことである。また、他の職員も別紙資料を見ることで、視覚的に4能力16項目に該当する指導内容であることの確認と気づきを促すことができる。

今後の課題としては、より効果的に自立に向けての基盤となる能力を育成できるような指導内容・支援方法の検討はこれからも年間指導計画の見直しをする中で心掛けていくのは当然で

あるが、まず教師が、「現在の指導内容の一つ一つがキャリア教育における自立に向けて基盤となる能力の育成につながっていること」を毎日の授業実践の中で、どのようにして意識していくかということである。

5 次年度にむけての提案

キャリア教育の視点（観点）を意識して毎日に授業が意識できるように、指導案や指導計画の学習活動や指導内容の一つ一つがキャリア教育全体計画にうたわれている4能力16項目のどの項目に該当するのかを、以下の例のように記述してみるといいのではないかと考えた。こうすることで、児童生徒が今行っている活動は、「将来～の能力育成につながる。」「将来～の役に立つ」という視点をもつことができ、教師もそれに向けた指導内容や支援方法の検討・実践することにつながると考える。

【例】

過程 (時間)	主な学習活動	指導上の留意事項	資料・準備
導入 (0分)			
展開 (0分)	作業をすすめる際に必要な報告等を行う。 (意思表示) 目的地までの情報を、様々な方法で調べる。 (情報収集と活用) 10年後の自分の姿を想像して手紙を書く。 (夢や希望)		
終末 (0分)			

【研究C】 キャリア教育（C）グループ

1 研究の意義

今回、キャリア教育Cグループにおいて、日々の教育活動の中でキャリア教育をより身近なものとする 것을 目指し、キャリア発達段階・内容表を活用した「授業における観点位置付け・授業改善シート」（以下：授業改善シート）を活用することとした。（図1）

キャリア発達段階・内容表【活用】活用による「授業における観点位置付け・授業改善シート」

学年・学期	鹿児島県立大島実業学校 中学部 2 年	場所	□年□組教室	本時目標	
指導形態		指導者			
題材名					

学習内容	欠点と指導上の留意点	キャリア発達段階・内容表【活用】		気づき		
		主たる観点	関連する観点	本時の授業改善点	教育課程への反映	生活全般への反映
導入						
展開						
まとめ						

（図1 キャリア発達段階・内容表を活用した「授業における観点位置付け・授業改善シート」）

この授業改善シートは、国立特別支援教育総合研究所の菊池氏により2011年に提案されたものであり、略案にキャリア教育の観点や内容を位置付けるものとなっている。また、日々の授業の略案としても使用できる形式となっているため、使いやすい。

菊池氏による研究からは、この授業改善シートを利用することにより、次の利点が現場において感じられるであろうと示唆されている。

- ・ 教員にとって身近な授業を切り口とすることにより、キャリア教育に取り組みやすい。
- ・ 授業を題材にキャリア教育について考えられるため、授業を行った後の教育課程改善にもつながりやすい。

そこで、Cグループはこの授業改善シートを活用し、日々の教育活動で取り込まれるキャリア教育の視点を改めて捉え直すことで、本校のキャリア教育の推進につながるのではないかと考えた。そこで実際に本校の各学部において授業を行い、その成果について実証することとした。

2 研究の方法

小学部、中学部、高等部の各学部で授業改善シートを用いた授業実践を行うこととした。教科や担当者は以下のとおりである。

- | | | |
|-------|---------|-------|
| ・ 小学部 | 日常生活の指導 | 石原 |
| ・ 中学部 | 生活単元学習 | 岩本 |
| ・ 高等部 | 作業学習 | 濱田・徳重 |

また、テーマ研究の時間でそれぞれの授業に対する改善点や、キャリア教育の視点をを用い、今後の教育課程への反映をどのようにすればよいかを話し合う時間を設けた。

3 研究の実際

実際に授業を行い、改善点について話し合った。

研究の実際については、別紙にそれぞれの授業の略案及び改善点等をまとめた資料を添付してあるので、そちらを参照していただきたい。

4 本研究による成果と課題

本研究をとおして、以下のような成果と課題があった。

(1) 授業改善シートを用いることによる成果

本研究をとおして、以下のような成果が感想として挙げられた。

- ・ 授業における観点位置付け・授業改善シートを作成することで、普段の授業を本校のキャリア教育年間指導計画の各観点を意識して作成し、授業を行うことができた。作成する中で、改めてキャリア発達段階・内容のどの部分が授業の中に含まれているのかを確認することができ、該当する観点を意識しながら授業を行うことができた。
- ・ 授業者全員が本校キャリア教育年間指導計画やキャリア教育の観点を意識して授業を組み立てる事ができた。
- ・ 指導案を作成し授業を行ったことで、本校キャリア教育年間指導計画を見て、各観点の確認ができたり、自分が行った授業内容のどの部分に各観点が当てはまるのかなどを考えたりすることができ、キャリア発達段階・内容を確認する機会となり、良かった。

やはり、「日々の授業に対するキャリア教育の意識付け」が大きな成果として感じられた。児童・生徒が、キャリア教育のどの発達段階にいるのかを実態を考慮しながら考えることもできた。

また、以下のような成果も感想として挙げられていた。

- ・ 授業を参観することで、先生方が大ことに考えているところがよく分かり、自分の学部と照らし合わせることができた。
- ・ 日常生活の指導、生活単元学習、作業学習という異なる3つの授業を実施したことで、各学部の領域・教科を合わせた指導を見る良い機会となった。
- ・ 各学部段階や生徒の実態に応じた授業内容を知ることができた。
- ・ 授業をお互いに見合うことは、とても大切なことだと思った。特に、他学部の授業を見ることはとても勉強になると思った。

キャリア教育において、児童・生徒の発達段階を考えながら授業するに当たり、生活年齢を重ねた際にどのような指導が必要となるかを考えることが大切である。それを学ぶためには、各学部の授業を見ることがキャリア教育の実践のために大切な方法であることも示唆された。

(2) 授業改善シートを用いることによる課題

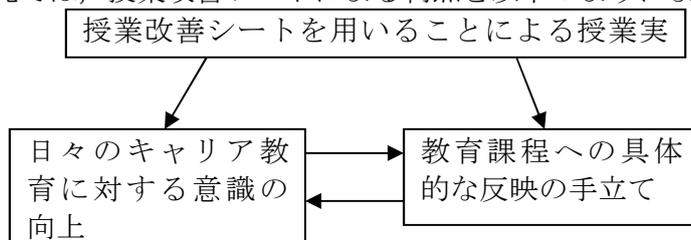
本研究をとおして、以下のような課題が感想として挙げられた。

- ・ 当たり前のことではあるが、改めて日々キャリア教育発達段階・内容を意識しながら、授業をする必要性を感じた。
- ・ キャリア教育の視点に立った指導案作りができたが、項目に照らし合わせることで精一杯だった。
- ・ 毎時間の活動へ反映させるのは難しいが、単元を構成する時に、キャリア教育の視点で考えてみることも大切なことではないかと感じた。
- ・ 毎回、このように授業改善シートを作成できれば良いが、難しいと思う。普段の略案に観点を挿入できるようにするだけでも、キャリア教育発達段階・内容を意識することにつながるだろうか。日々の授業に負担をあまり掛けない範囲で、意識向上を図る手立てがあると良いと思う。
- ・ 教育課程や日常生活への反映をどのように行っていくかについても、この授業を行うことで授業改善シートをもとに情報交換等ができ、とても良かったが、情報交換で得た意見等を具体的に反映させるための手立ても考えていかないといけないと思った。
- ・ 来年度のテーマ研修に今年度の研修結果をどう生かしていくか。

キャリア教育の視点を普通の授業に組み込むことの重要性については、成果を述べた項目でも取り上げた。しかし、毎時間この授業改善シートを使用することには負担感等から慎重な意見も出た。そのため、普通の略案にキャリア教育の観点を挿入するだけでもよいのではないか、という代案も出てきた。また、教育課程への反映を目指し、今の授業にどのような手立てが必要なのか考えることができる（フィードバック）ための時間の必要性や今回の研修をどのように来年度へとつなげるか、といった課題も出た。

5 まとめ

今回の研究では、授業改善シートによる利点を以下のようにまとめることができた。



また、各学部の授業を見ることにより、児童生徒の将来を見据えた授業づくりに対する手立てを反映させることができることも分かった。

しかし、日々の利用にあたっては、キャリア教育の観点挿入のみに留めるなど、さらなる改良も必要ではないかと考えられた。

今後、キャリア教育を主眼にした授業をするにあたり、この授業改善シートを活用することができれば、さらなる意識付けにつながると考えられる。また、難しいときは普通の略案にキャリア教育の観点を挿入するだけでもよいだろう。

キャリア教育Cグループは、児童・生徒の卒業後を見据えたキャリア形成の力を育成するために、授業改善シートの考え方を軸とし、普通の略案にキャリア教育の視点をを用いることで、日々の授業を充実させていくことを提案したい。

6 プロジェクト研究のまとめ

(1) 成果

- ・ キャッチフレーズの作成を通して、キャリア教育に関する理解が深められた。
- ・ 「指導計画」の4領域16項目を遊び・日生・生単・作業ごとに整理することで、現在の指導内容の一つ一つがキャリア教育につながっていることを確認できた。
- ・ 観点位置付け・授業改善シートを用いた授業を行うことで、シートがキャリア教育の観点を意識した授業につながるツールとして有効である一方、日々の授業で用いるには負担が大きいことが分かった。

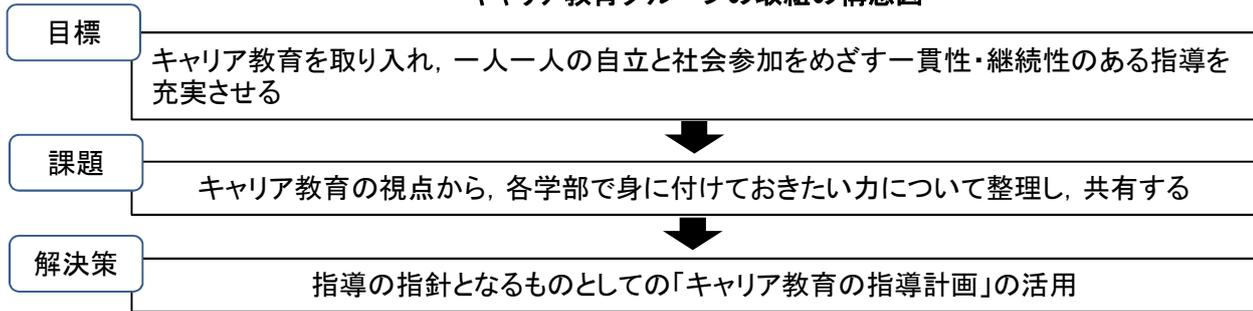
(2) 課題

- ・ キャッチフレーズは一部のメンバーの協議で作ったものであり、今後の方向性が定まっていない。学部・学校として採用するものに値するかどうか、また、どのように取り入れていくかの検討が必要である。
- ・ 教師間でキャリア教育に対する考え方が共有されていない状況がある。日々の授業でキャリア教育を意識できるようにしていく仕組みを作ることが必要であるとする。
- ・ 観点位置付け・授業改善シートは、日々の授業で用いるには負担が大きい。普通の略案にキャリア教育の観点を挿入することで代替することを検討していきたい。
- ・ 教育課程への反映を目指し、今の授業にどのような手立てが必要なのか考えることができる（フィードバック）ための時間が必要なのではないか。

(3) 来年度へ向けて

キャリア教育の観点を取り入れていくには、日々の授業の中に負担感なく分かりやすい形で取り組める仕組みを作っていくことが必要である。その方法としては、キャリア教育の4領域16項目の観点を年間指導計画または略案に書き込むことなどが考えられる。キャッチフレーズの今後の方向性などのその他の課題とも関連付けながら取り組んでいきたい。

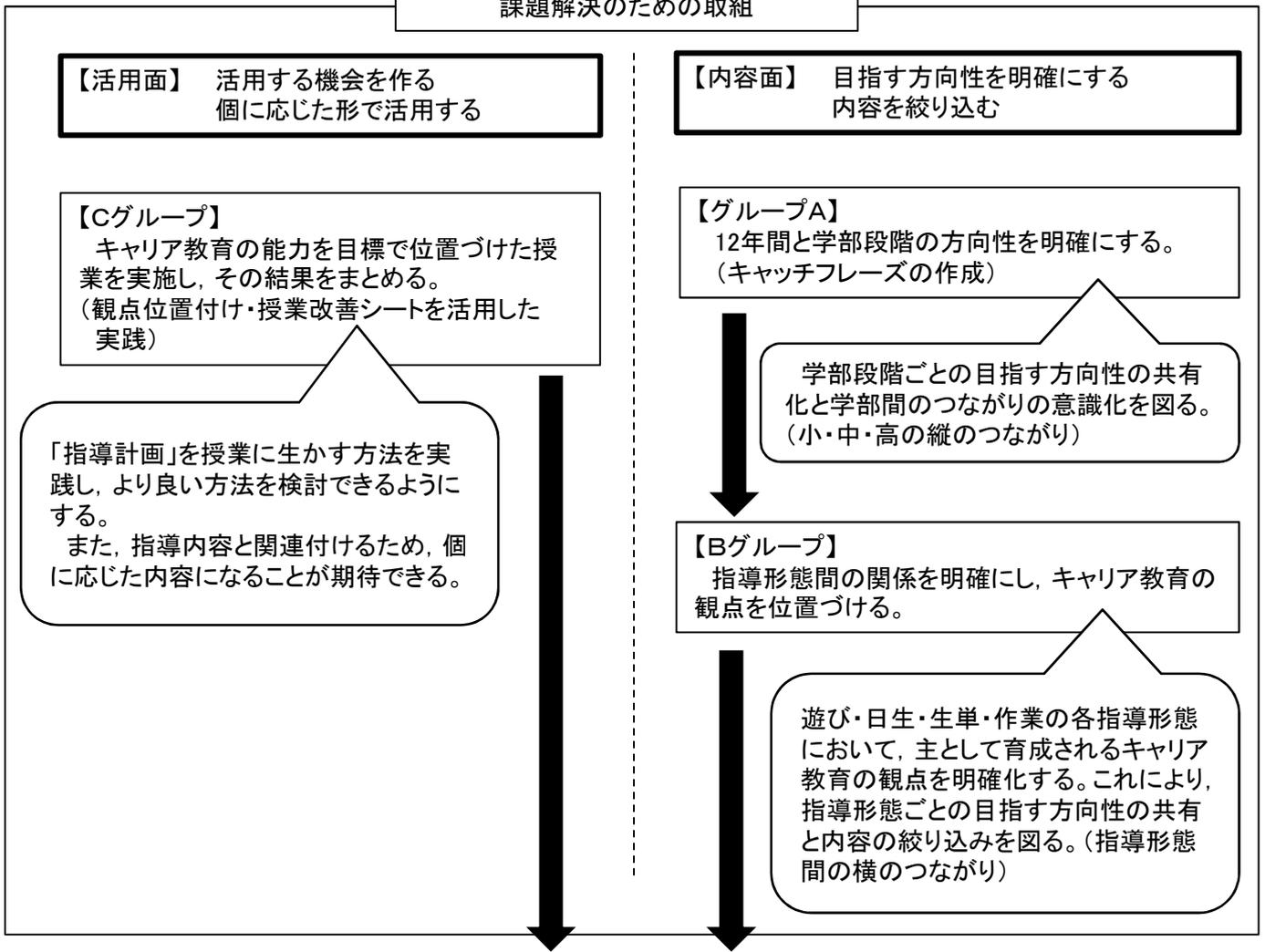
キャリア教育グループの取組の構想図



活用に当たっての
主な問題点

- 【内容面】 ①12年間を通じた目指す方向性が共有されていない
②指導内容が絞り込めていない
- 【活用面】 ①個別の教育支援計画・指導計画との関連を意識する機会が少ない
②目にする時間・機会がない

課題解決のための取組



平成27年度の成果を踏まえた実践

平成28年度に授業実践を行い検証する

「小・中・高の縦のつながり」と、「指導形態間の横のつながり」を明確にした上での実践

キャリア教育グループの研究の成果と課題

目標

キャリア教育を取り入れ、一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導を充実させる

課題

キャリア教育の視点から、各学部で身に付けておきたい力について整理し、共有する

解決策

指導の指針となるものとしての「キャリア教育の指導計画」の活用

研究の成果と課題

【活用面】 活用する機会を作る
個に応じた形で活用する

【Cグループ】

キャリア教育の能力を目標で位置づけた授業を実施し、その結果をまとめる。
(観点位置付け・授業改善シートを活用した実践)

【成果】

・シートの利用は、キャリア教育の意識化に有効である反面、日々の実践に取り入れるにはシート作成の負担が大きいことが明らかになった。

【課題】

・普段の略案にキャリア教育の観点を挿入することで、シートと同様に意識化につながるのではないかと。
・教育課程への反映を目指し、今の授業にどのような手立てが必要なのか考えることができる(フィードバック)ための時間が必要なのではないかと。

【内容面】 目指す方向性を明確にする
内容を絞り込む

【グループA】

12年間と学部段階の方向性を明確にする。
(キャッチフレーズの作成)

【成果】

- ・キャッチフレーズを作成した。
- ・キャリア教育への理解が深まった。
- 小学部
みつけよう 広げよう
～教師や友達との多様な体験を通して～
- 中学部
みつめよう 高めよう
～一歩踏み出し、挑戦しながら～
- 高等部
みとめよう 生かそう
～社会生活に向けて～

【課題】

・キャッチフレーズの今後の方向性が未定である。

【Bグループ】

指導形態間の関係を明確にし、キャリア教育の観点を位置づける。

【成果】

- ・指導形態ごとにキャリア教育の観点を整理し、キャリア教育の中の4領域のどこと深く関わりがあるのか一覧で確認できるようになった。
- ・現在の指導内容の一つ一つがキャリア教育につながっていることを確認できた。

【課題】

・キャリア教育の観点を日々の授業に取り入れるための方法の検討が必要である。

日々の授業の中に負担感なく分かりやすい形で取り組める仕組み作りが必要

プロジェクト研究D アセスメント



プロジェクト研究D
アセスメント

X	プロジェクト研究D アセスメント・・・・・・・・・・・・・・・・	66
1	全体研究テーマ	
2	プロジェクト研究「アセスメント」テーマ	
3	プロジェクト研究の目指すところ	
4	プロジェクト研究の内容と方法	
5	プロジェクト研究の流れ	
ア	社会性の発達について・・・・・・・・・・・・・・・・	67
イ	コミュニケーションの発達について・・・・・・・・	69
ウ	運動・動作の発達について・・・・・・・・	71
エ	数概念の発達について・・・・・・・・	77
6	プロジェクト研究のまとめ・・・・・・・・	82

X プロジェクト研究D「アセスメント」

1 全体研究テーマ

一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導

2 プロジェクト研究「アセスメント」テーマ

他学部の意見（分析）を交えたアセスメントによる授業力向上

(1) チームとして研究したいこと（話し合い）

- ア アセスメントの方法を細かく分けて研究したい。
- イ 文献研究をしたい。
- ウ 実態把握の方法を勉強したい。
- エ アセスメントを説明できるようになりたい。

3 プロジェクト研究の目指すところ

発達段階表の活用によるアセスメントスキルの向上

4 プロジェクト研究の内容と方法

(1) 研究内容

- ア 「社会性」「コミュニケーション」「運動・動作」「概念」の4つのグループに分かれ、文献を基に発達段階表を作成する。
- イ アセスメントチーム内で、発達段階表を共有する。
- ウ 発達段階表を活用する。

(2) 研究組織

社会性グループ	小学部：飛永， 中学部：藤山， 高等部：中和田
コミュニケーショングループ	小学部：藤尾， 中学部：田浦， 高等部：東史・菊田
運動・動作グループ	小学部：中水， 中学部：飛松， 高等部：大重・久保
概念グループ	小学部：団塚， 中学部：川村， 高等部：下野

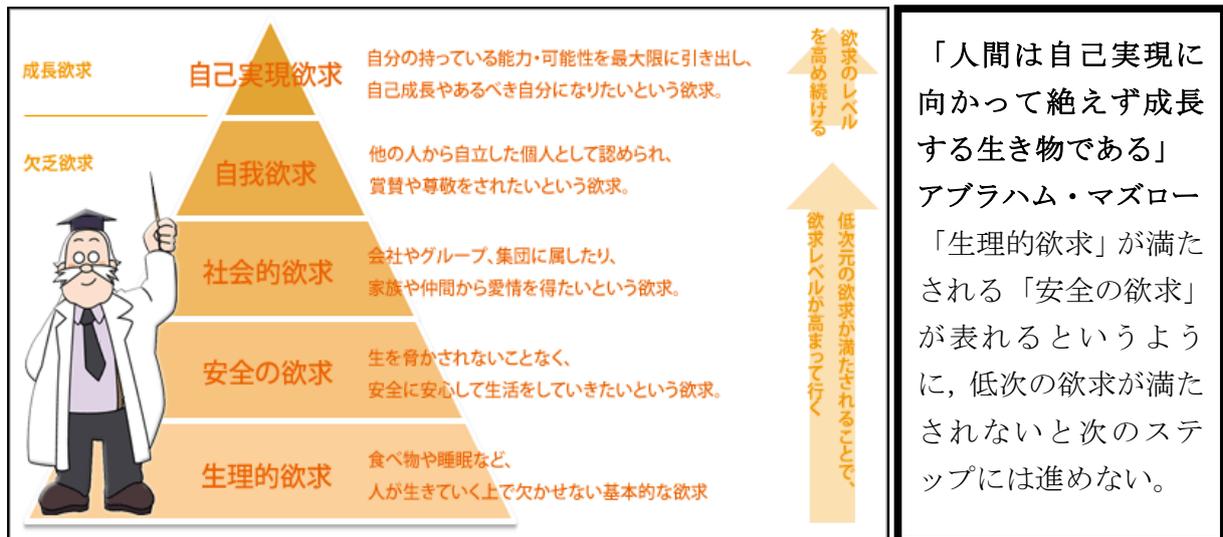
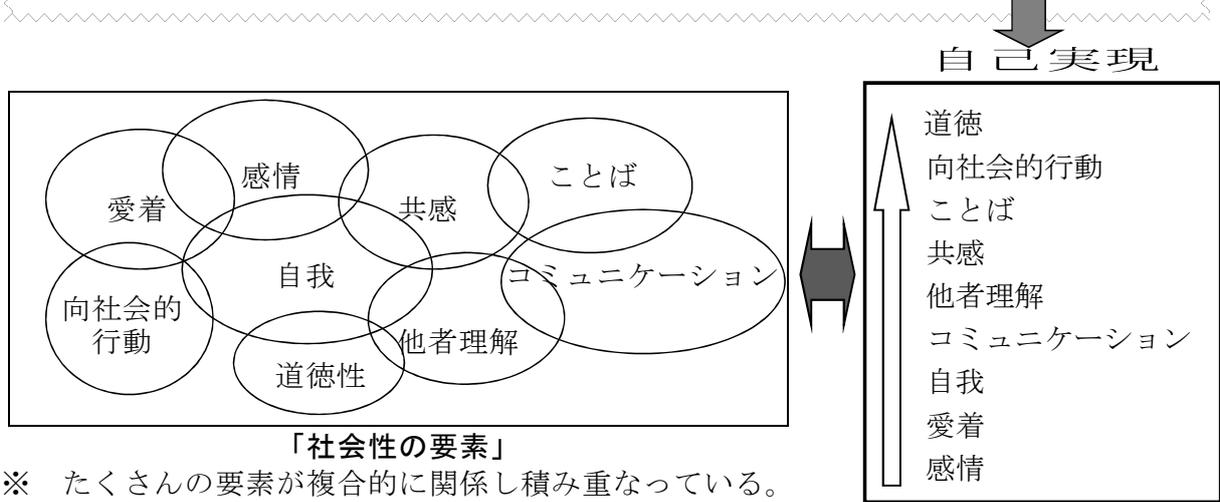
5 プロジェクト研究の流れ

回	期 日	内 容	備 考
1	6月25日	チームでの研究の進め方及びグループ研究①（方向性の検討）	
2	7月24日	グループ研究②（文献研究及び発達段階表の作成）	各グループ 内で、分担 した内容を 調査する個 人研究及び 臨時研究会 の期間
3	8月27日	グループ研究③（文献研究及び発達段階表の作成）	
4	10月1日	中間報告会	
5	11月5日	チーム内報告会①（各グループの研究内容発表）	
6	11月19日	グループ研究④（文献研究及び発達段階表の作成とまとめ）	
7	1月7日	チーム内報告会②（各グループの研究のまとめ及び発達段階表についての説明・事例研究・チーム内まとめ）	
8	1月28日	実践報告会	

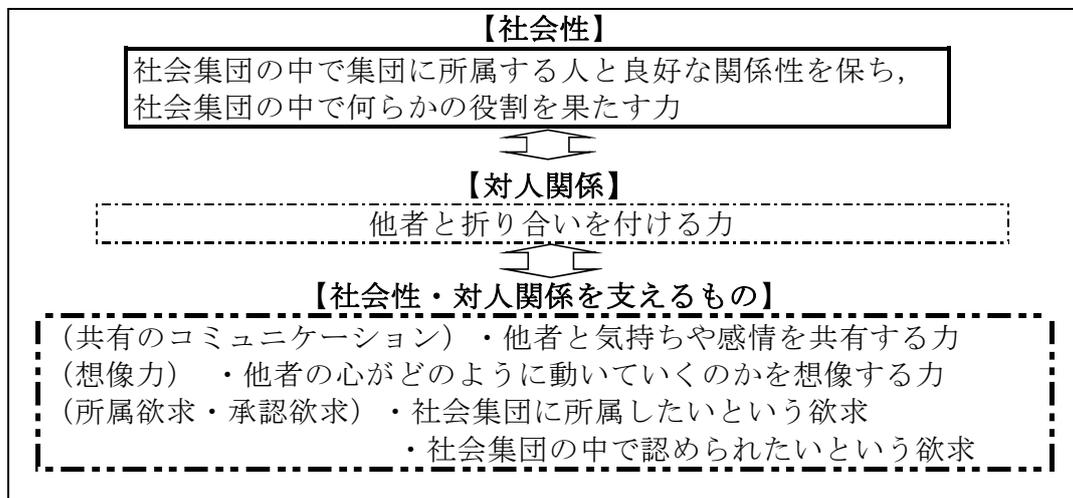
ア 社会性の発達について

(ア) 社会性とは

社会集団の中にあるルール、規範、常識、暗黙の了解などをうまく把握し、その社会集団の中で良好な関係性を保ちながら社会のために何らかの役割を果たす力



「マズローの自己実現理論」



「社会性の成り立ち」

(イ) 社会性の発達段階表 (一部抜粋)

	【自立】	【ことば】	【感情・共感】	【愛着】	【自我】	【他者理解・意識】
4歳	<ul style="list-style-type: none"> 自分の得手不得手がわかってくる。 順序数がわかり始める。 全能感・挑戦意欲が高まる。 頭足人をかく。 四角をかく。 集団であそぶようになる。 子ども同士で話し合いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 人の嫌がること、汚いことばを使うことがある。 理由をつけて主張するようになる。 アニメや空想の世界に熱中する。 お姫様ごっこ、ヒーローごっこから劇遊びを楽しむようになる。 大変おしゃべりになる。このころのおしゃべりは一種のあそび。 「地」「ドウテ」という質問が多くなる。 各品詞がさかんに使われ、話しことばが一応完成する。 「ボク」「ワシ」という主語をさかんに使う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の得手不得手がわかってくる。 「つらい」「悔しい」気持ちが出てくる。 努力を評価してほしがちになる。 集団であそぶようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人の内面(感情)に気づき始める。 	<ul style="list-style-type: none"> 理由をつけて主張するようになる。 あきらめられるようになってくる。 「～かもしれない」と思い始める。 「勝ちたい」気持ちが強まる。 順序数がわかり始める。 集団であそぶようになる。 全能感、挑戦意欲が高まる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人の評価を気にし始める。 あこがれの発生。 人の嫌がること、汚いことばを使うことがある。 集団であそぶようになる。
5歳	<ul style="list-style-type: none"> 練習に励むようになる。 三角(斜線)をかく。 	<ul style="list-style-type: none"> 感情コントロール力をつけ始める。 うそをつくことがある。 大部分の子どもが正しい発音ができるようになる。 自然物や動植物に関することばが増える。 目的にあった問い方、答え方ができるようになる。 先生から家への伝言をきちんと伝えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「恥ずかしい」という気持ちが出てくる。 (失敗しないように) 備えるようになる。 恐怖心が表れる。 	<p>4歳で人の評価を気にし始め、5歳になると徐々に「恥ずかしい」という気持ちが芽生える。そして、失敗に備えるようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> じゃんけんを理解し始める。 ルールを理解、ルールを守ろうとする。 仲間意識、帰属意識が芽生える。 自他の能力の違いに気づく。 (失敗しないように) 備えるようになる。 練習に励むようになる。 セクシュアル、アイデンティティーの確立。 	<ul style="list-style-type: none"> 自他の能力の違いに気づく。 仲間意識・帰属意識が芽生える。 「恥ずかしい」という気持ちが出てくる。 あこがれに近づきたいと思いはじめ始める。

イ コミュニケーションの発達について

(ア) コミュニケーションとは

本研究にあたり、「コミュニケーション」とその特性について、以下のように整理して捉えることとした。

○「コミュニケーション」の全般的な捉え

「コミュニケーション」という言葉を用いるとき、人によってその概念が微妙に異なることがしばしばある。そこで本研究においては「コミュニケーション」を以下のように捉え、研究のベースとした。

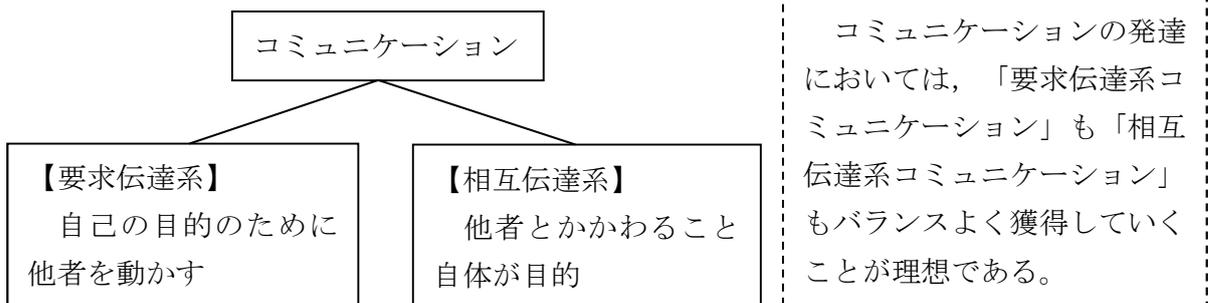
「コミュニケーションとは、ことばあるいは他のさまざまな手段による人間相互の交流と理解のプロセスである。それは、話し手と聞き手の間に交わされる伝達のプロセスを含むものである。」

※引用『実践インリアルアプローチ事例集 豊かなコミュニケーションのために』
監修：竹田契一 著：里見恵子 河内清美 石井喜代香

○コミュニケーションの四つの段階

- ・聞き手効果段階…誕生から10か月頃まで。意図は聞き手によって解釈される。
- ・意図的伝達段階…10か月～1歳頃に始まる。意図を行為で伝えるようになる。
- ・命題伝達段階…1歳～1歳4か月頃に始まる。ことばで伝えられるようになる。
- ・文と会話段階…1歳半～2歳頃に始まる。文での表現が始まり、3歳頃から大人の会話スタイルに近づく。

○コミュニケーションの二重性



○コミュニケーションの六つの機能

感情表出	物事の好き嫌いや自分の感情、または「Yes/No」等、気持ちを表出する機能
発信行動	必要な事柄を相手に伝えたり、経験したことを表現したりする機能
受容行動	相手の表出（言葉等）を受け止める機能
拒否・要求行動	いらないものや欲しいもの等について、言葉や態度で表す機能
基礎理解・行動	人や物の名前が分かる、指示を理解する等の機能
あいさつ	非言語的なものを含めて、挨拶をする機能

(イ) コミュニケーションの発達段階表 (一部抜粋)

	【感情表出】	【発信行動】	【受容行動】	【拒否・要求行動】	【基礎理解・行動】	【あいさつ】	
2歳	0	<ul style="list-style-type: none"> ・言いたいことがたくさんあって「アノネ」というが、後が続かない。 ・「きれいね」「おいしいね」等の表現が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士で追いかけることができる。 ・簡単な文章を言うことができる。 ・言いたいことがたくさんあって「アノネ」というが、後が続かない。 ・子ども同士でふざけあうことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士で追いかけることができる。 ・子ども同士でふざけあうことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊び友達の名前が言える。 ・子ども同士で追いかけることができる。 ・子ども同士でふざけあうことができる。 ・「きれいね」「おいしいね」等の表現が分かる 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊び友達の名前が言える。 ・言いたいことがたくさんあって「アノネ」というが、後が続かない。 	
	1						
	2						
2歳	3	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌なことをされたときに、否定の言葉を使うことができる(「いや」「やめて」「だめ」)。 ・聞かれると、二つの物の中で好きな方を選ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・促されると、「どうぞ」「ありがとう」を言うことができる(はっきり言えなくても可)。 ・「～しているの誰？」という質問に、指さして答えることができる。 ・“～ね、～よ”などの助詞を使って話すことができる(「お外行こうね」「ママ遊ぼうよ」等)。 ・「これなあに？」という質問をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言われると、やっていることをやめて、2回に1回は親の言うことに従うことができる。 ・音楽や物語を5～10分聴くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌なことをされたときに、否定の言葉を使うことができる(「いや」「やめて」「だめ」)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言われると、やっていることを止めて、2回に1回は親の言うことに従うことができる。 ・言われると、他の部屋から物をもって来る、他の部屋にいる人に物を渡してることができる。 ・音楽や物語を5～10分聞くことができる。 ・聞かれると、二つの物の中で好きな方を選ぶことができる。 ・「今何してるの？」という質問に答えることができる。 ・「～はどこ？」という質問に答えることができる。 ・聞かれると、男か女かいうことができる。 ・言われると、特定の本を見つけることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・促されると、「どうぞ」「ありがとう」を言うことができる(はっきり言えなくても可)。
	3						

発達初期(0歳代～1歳代)は、コミュニケーションの機能のうち、「発信行動」と「拒否・要求行動」が中心である。
多くの「発信行動」「拒否・要求行動」の土台の上で、徐々に「受容行動」の広がりが見られるようになる。

ウ 運動・動作の発達について

(ア) 模倣とは

新生児の原初模倣から始まる「模倣」は、初めは反射的なものから相手の意図を理解して真似する模倣へと、その発達段階とともに成長し変化していく。学齢期に入ると、学習、遊び、余暇などいろいろな場面で、とっかかりは指導者(大人)の模倣から始まることが多い。また、卒業後の進路先においても、教わる側と教える側にとって模倣は重要なコミュニケーションのツールとなる。このことから、模倣は将来の社会参加と自立のためにもとても重要な行動であるといえる。

模倣の構造

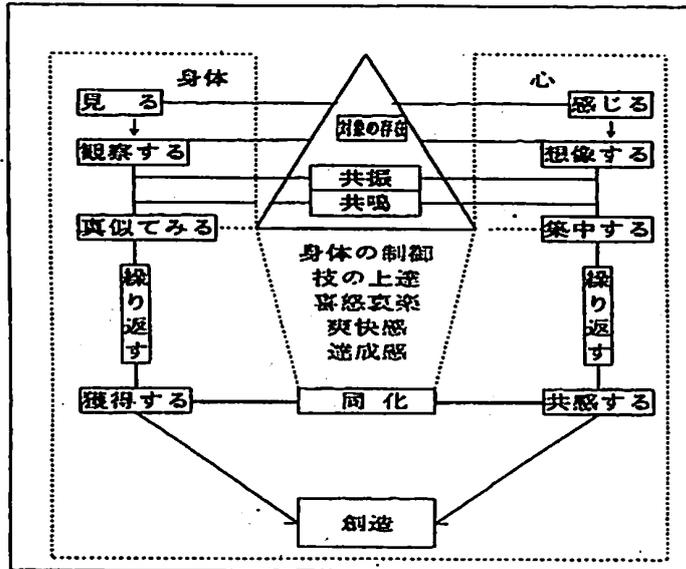


図1 教育における模倣の構造図

大阪教育大学紀要

第IV部門第45巻

第1号 59～72頁

(1996年9月)

身体学習における『模倣』の構造
～幼児教育と武道の技能獲得過程の類似点を通して～

古市久子・横山勝彦

図によると、模倣の段階設定の概略は、《対象の存在》を出発として、それに《共振》していき、《共鳴》し、それを繰り返し行っている間にしだいに同一化の方向に進む。すべての《同一化》がなされ、模倣がしっかりできるようになると、《創造》への方向に向かう、とされる。また、図の左右に眼を向けると、模倣とは、「見る」「観察する」「真似てみる」「繰り返す」「獲得する」という身体を使う部分(目に見える部分)と、「感じる」「想像する」「集中する」「繰り返す」「共感する」という心を使う部分(目に見えない部分)が相互に作用し合って成り立つ行動である。つまり、基本的な運動能力、認知能力の保持と「やってみよう」「やってみたい」「できるようになりたい」と思える心の成長ができていくことが前提となる。

(イ) 模倣の発達段階表

発達水準		Ⅲ水準	Ⅳ水準	V水準	Ⅵ水準	Ⅶ水準
模倣の 発達段階	模倣の芽生え					
	一方だし模倣					
	パターン模倣					
	即時対応模倣					
	象徴的模倣					
模倣内容	道具操作模倣					
	身体模倣					
	音声模倣					
姿勢運動	身体接着模倣					
	身体非接着模倣					
	座位での模倣					
	立位での模倣					
運動方向	左右対称模倣					
	左右非対称模倣					
	前後奥行き模倣					
	交叉模倣					
模倣環境	絵や録音モデル					
	人をモデル					
	個別場面					
	集団場面					

※ 破線は芽生えの時期を表わす。

○ 感覚と運動の高次化からみた発達水準について

発達の層	水準	名称
第Ⅰ層 (初期感覚の世界)	I水準	感覚入力水準
	Ⅱ水準	感覚運動水準
	Ⅲ水準	知覚運動水準
第Ⅱ層 (知覚の世界)	Ⅳ水準	パターン知覚水準
	Ⅴ水準	対応知覚水準
第Ⅲ層 (象徴化の世界)	Ⅵ水準	象徴化水準
第Ⅳ層 (概念化の世界)	Ⅶ水準	概念化1水準
	Ⅷ水準	概念化2水準

【Ⅰ水準】＝ 感覚入力水準

感覚と運動が最もつながりにくい段階。感覚器官からの入力そのものが初期的で、情報が入力されたことと運動や表現とが繋がりにくく、反応が読み取りにくい。感覚を使えば動きは静止させ、運動を起こせば感覚を使わなくなることも多い。しかし受容されやすい感覚もある。揺れ、高い高い、グルグルまわし等の前庭感覚入力や、強くおしつける圧覚や手首や足首、膝や肘等の関節への刺激入力（固有感覚入力）、触れるといった触感覚入力等は、快の表情が表出されやすく、入力されていることはわかりやすい。

感覚刺激は、どちらかというとな弱めの方が受容しやすく、感覚が開きやすい。

【Ⅱ水準】＝ 感覚運動水準

感覚と運動の繋がりが少し芽生えてきた段階である。感覚の受容能力が高まり、そのために姿勢を整え、運動を組み立てようとする力も芽生えてくる。しかし感覚が運動に優先しているというわけではなく、感覚は運動の後追いあるいは追従して使われる傾向が強い。

【Ⅲ水準】＝ 知覚運動水準

手を使った事物操作や粗大な動きを通して、徐々に目や耳と運動が繋がっていくことが大きな特徴である。それだけ目や耳が外界に関与しようとしはじめるというよい。

【Ⅳ水準】＝ パターン知覚水準

パターン化が極端に強いあるいは貯蔵的な知覚が中心となる段階である。この水準は以下の二つの特徴であらわされる。

ひとつは目や耳によって運動を少しずつ制御できるようになる。視覚・聴覚 \geq 運動という図式であらわせる。Ⅲ水準の知覚運動水準と比べれば、より目や耳が先行して運動の方向を確認し、予測し、コントロールしていくということになる。もうひとつの特徴は情報処理がパターンのあるいは貯蔵的で固いことである。いつもと同じ行動様式を繰り返すことに固執しがちであり（その方が安心できるという意味）、新しい場面や人は苦手である。慣れない事態は予測がつきにくく、わからないために情緒が不安定になりやすい。固く固執が強いということは、好き嫌いも強いので嫌いという拒否行動やトラブルも多い。

【V水準】 = 対応知覚水準

徐々に柔軟な処理ができるようになる。表象機能も芽生え、人にも物にも対応生を増していくという意味で対応知覚水準と呼ぶ。IV水準（パターン知覚水準）の認知様式の固さ、パターン化の強さ、拒否の強さと比べると、「やわらかさ」を増してきた子どもたちである。

【VI水準】 = 象徴化水準

重要な情報を頭の中に表象（記憶）としてしまいこみ、必要に応じて動作イメージやことばとして産出していく。

事物や行為を、別の文脈のものにみたてたり置き換えたりする象徴的な機能が成立するということでもある。例えばチョークを、お父さんが吸っているタバコにみたてて、吸うまねをするといった具合である。本来意味するもの（チョーク）と違う文脈の意味されるもの（タバコ）に置き換える、という思考様式の拡がりが見られることになる。

【VII水準】 = 概念化1水準

「複数のカテゴリーから属性や概念を見だし、可逆的に別のカテゴリーで分類したり記号化する力」と捉えることができる。例えば、①赤いりんご、②緑色のメロン、③黄色いバナナ、④赤いスポーツカー、⑤緑色のバイク、⑥黄色い自転車という6枚の絵があったとする。まず果物と乗り物に分類させる。その直後に色で分類させても混乱しないで新しいカテゴリーで再構成できる。こうした頭の中で分類基準を柔軟にきりかえるという作業が、概念化の成立であると考えている。

【VIII水準】 = 概念化2水準（絶対的概念から相対的概念へ）

繰り返された内容を学習してパターンで概念を形成することは、さほど難しいことではない。自閉症児であればV水準（対応知覚水準）ぐらいの子どもであっても、みかけ上は文字が読めて、加算が可能であったりする子どももいる。

パターン化が得意であるという点が、一見高次の概念が形成できているかのように思わせる。実際には文章の内容は理解できなかつたり、加算ができていても、数の大小がわからなかつたり、「りんごを半分にするといくつ？」というような質問にも答えられなかつたりする。要するに概念の柔軟な操作ができないために、本当の力になり得ていないということであろう。

概念の相対化とは、一つ概念と他の概念を相対的に比較できる柔軟な概念化の作業であるということができる。

○ 模倣の発達段階について（用語解説）

・模倣の芽生え

まれに大人の玩具操作を真似したり、拍手等の身体のごく一部の模倣や、母音等の一部の音素を真似したりすることがみられる。しかしいずれのばあいも、ごくまれなことであり、きわめて偶発的な行為である。相手の模倣の動きを注視することも、芽生えとして評価してよい。

・一方だし模倣

どちらかという気が向いたときに、模倣活動としてではなく独りでやっているばあいが多い。この段階はしばらく続くことが多いのだが、やがて一緒に模倣する段階が訪れるというサインとして重要である。

・パターン模倣

模倣場面で一緒に模倣することが可能になる。しかしいつも繰り返された模倣活動に限って可能であり、新しい型の模倣活動は難しい。

・即時対応模倣

即時的な模倣でも対応してできるようになる。他者に合わせて模倣することが楽しいということが大人にもよく伝わる。集団場面での模倣活動も積極的に参加できることが多い。

・象徴的模倣

模倣そのものに象徴的な意味を付与して行う。例えば、両手をバタバタとヨコに振るのは「鳥」を意味するということがわかって表現できるということである。過去の生活を再現するためのふり行為やみたてあそびも広義の象徴的模倣と捉えて良い。

・道具操作模倣・身体模倣

視覚処理としての模倣である。道具操作模倣は、他者が楽器やおもちゃを操作するのを見て真似して模倣することであり、簡単な道具操作模倣であれば、身体模倣よりはやさしくはやく産出する。

・音声模倣

聴覚処理としての模倣である。音声に合わせて動いたり、発声したりする。

※ 視覚系と聴覚系の模倣とでは、どちらがはやいかという原則はなく、聴覚優位タイプの子どもであれば音声模倣の方がはやく出るし、ケースバイケースである。

- ・身体接着模倣

「頭、肩、膝、ポン」のような身体と身体が接着する模倣は、やさしいため比較的是やくから産出されやすい。拍手やちょうだい等の模倣も同様である。

- ・身体非接着模倣

腕を横や上に伸展させるといった非接着模倣は難しく難易度が高い。この理由は接着型の方が運動の終わりをつくりやすいことと、身体部位に手を接着させる行為は姿勢を保持しやすくし、それだけ模倣もやりやすくなるといえる。

- ・座位での模倣・立位での模倣

椅子に着席した模倣と立位での模倣とでは、明らかに前者の方がやさしい。座位の姿勢は、目でモデルとなる人物を定位することが楽であり、また模倣で上肢の調節が必要とされる際に姿勢保持が楽なためであろう。

- ・左右対称模倣・左右非対象模倣

両手を同時に上に挙げるといった左右体操的（同側的）な模倣か、右手が上で左手は横といった非対称的な模倣かを区別して考える。むろん前者の対称的な模倣の方がやさしい。非対称的な模倣は運動の調節力においても難しいが、二つのことを同時に捉えなければならない点でも2容量記憶と同様な注意力も必要とされる。

- ・前後奥行き模倣・交叉模倣

非対象模倣の延長線上に、うさぎの耳のまねのように手掌部分を前向きか後ろ向きか、ボクシングのように両手を交互に打つ模倣、両腕を交叉させて行う模倣等、より高度な模倣形態が考えられる。

- ・身体模倣のモデル（絵や録音・人）について

模倣のための見本をどのように提示するかという問題も、模倣の芽生え期には重要である。一見、人のモデルの方がよさそうにおもいがちなのだが、模倣が苦手な自閉症児にとっては、動かない絵カードをみて模倣する方が産出しやすい。人か否かが重要ではなく、絵は背景から模倣モデルが浮き出ている、つまり図と地がはっきりしなおかつ静止画像であるというところに利点があるのかもしれない。

- ・音声の同時提示身体模倣と音声なし身体模倣

歌等の音声を同時に提示する身体模倣の方が音声なしよりも、はるかに産出しやすい。おそらく歌等の音声が随伴されて提示されることで、注意が喚起され、次の動作パターンへの変更の予測がしやすいこと等が、理由として考えられる。

- ・個別場面・集団場面

これも両者には大きな違いがあり、個別場面の方がはるかに産出しやすい。それだけモデルへの注意や集中が向けられやすいということであろう。

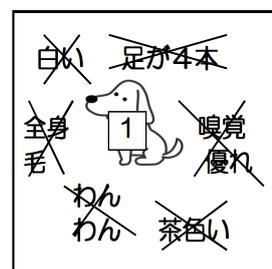
エ 数概念の発達について

(ア) 数概念とは

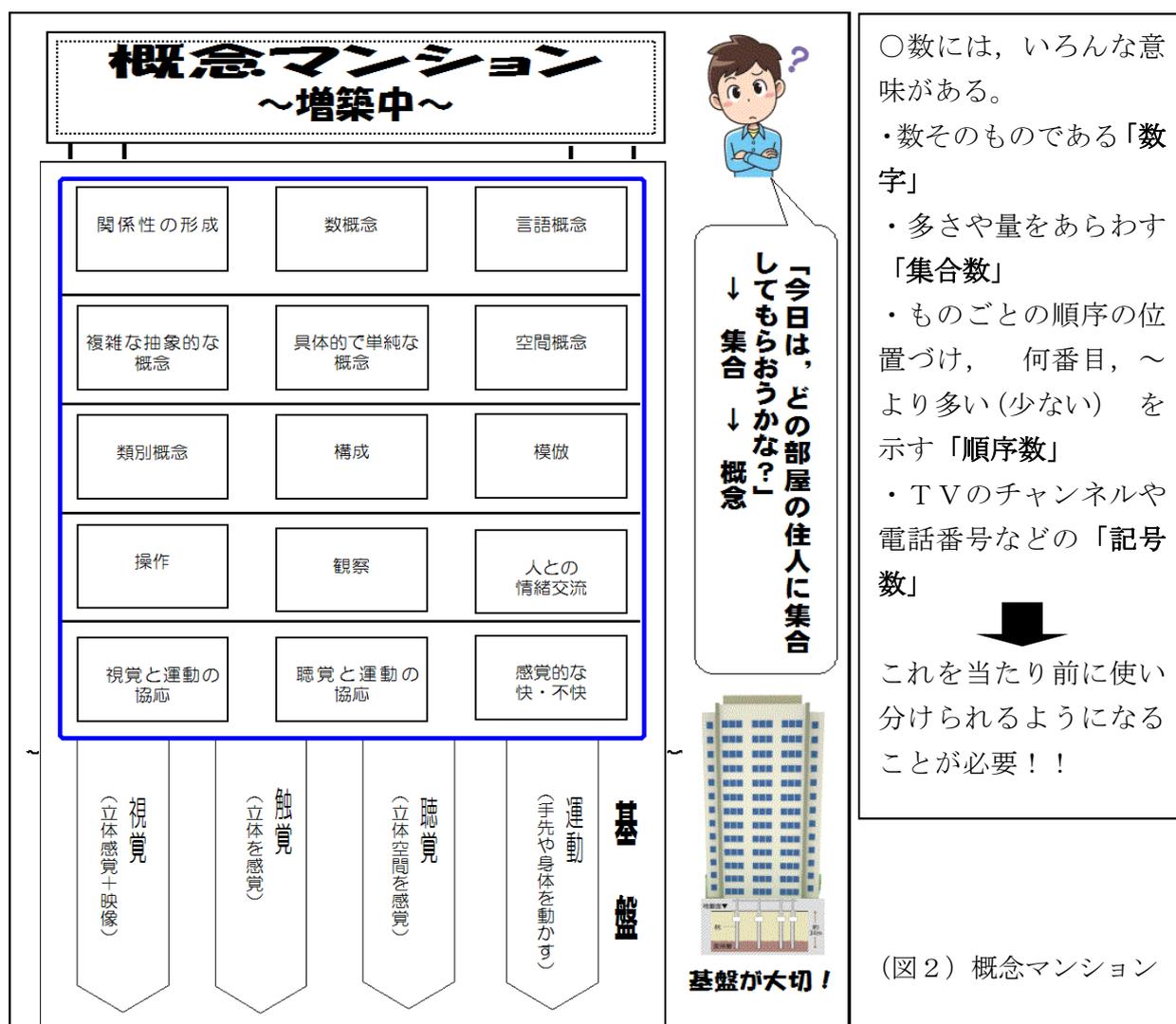
数には、順序数（序数）を表すものと集合数（基数）を表すものがある。順序数を表すものとは、順番を示すもので、6番目の1つ後が7番目で、1つ前が5番目である。集合数は、自動車6台もみかん6個も犬6匹も、全てその集合の要素、すなわち濃度において6という共通点をもっており、5や7と異なっている。数概念とは、これら2つのものが統合されたところに成立するものである。

数概念は、その対象の諸性質を捨象するということが大きい意義をもつ、一般の具体的な事物の場合には、その概念はその対象の全ての性質を捨象してしまっては成立しない。それらの中の共通な、しかも本質的な属性を抽象することによって成立する。ところが、数概念の発達過程は対象の一連の性質を捨象するだけでなく、対象そのものも捨象する過程である。（図1）

また、数概念の発達は、図2にあるように、独立して考えられるものではない。数を理解するにはさまざまな情報処理が行われており、数の概念は視覚・聴覚・手指の器用さ・発声・抽象化の能力・意欲なども複雑に絡み合いながら発達している。生まれてから様々な経験をし、いろいろな概念を獲得した上でなければとらえられないし、上辺だけの理解にとどまることも考えられる。



(図1)



(図2) 概念マンション

(イ) 数概念の発達段階表 (一部抜粋)

年齢	数の理解の発達	数の基礎概念	集合数	順序数
0歳	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの物に触れる, つかむ, なめる ・指しゃぶりをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物をつかもうとする ・具体物を指さす 	<ul style="list-style-type: none"> ・対象をはっきりつかめる 	
1歳		(個別化) <ul style="list-style-type: none"> ・身近にある物や人の名を聞いて指差すことができる ・目の前で隠された物を探すことができる 		
2歳	<ul style="list-style-type: none"> ・数を唱え始める ・並べる遊びをする 	(類別) <ul style="list-style-type: none"> ・形の異なる2つのもの(色は同じ)の中から, 示された形の物を選ぶことができる ・色の異なる2つのもの(大きさ同じ)の中から, 示された色の物を選ぶことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・1対1対応ができる ・単に口で唱える(数唱) ・ものの集まりから, 数を知る ・数詞が, 順序正しく, 発音正しく言える(3まで) 	<ul style="list-style-type: none"> ・数詞が, 順序正しく, 発音正しく言える(3まで)
3歳	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の区別ができる(自分の物, 他者の物の分類ができる) ・決まった場所を提示すれば片付けられる 	(同等性) <ul style="list-style-type: none"> ・具体物を使い, 一対一対応をすることができる(4枚の皿に4個のケーキ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・3の事物を見せていくつあるかが分かる時と分からないときがある ・「いち, に, さん, ろく, く, じゅう」と途中を抜かして10まで唱える。<数が事物の集まりの多さ(集合)を表し, 2は1が2集まった物や3は2に1がプラスされたものという概念が形成されていない> ・数詞が, 順序正しく, 発音正しく言える(5まで) ・数詞を言って, 数が取れる(3まで) 	<ul style="list-style-type: none"> ・数詞が, 順序正しく, 発音正しく言える(5まで)

2歳：数を唱え始める

3歳：数詞を言って, 数が取れる(3まで)

5歳：数詞を言って, 数が取れる(5まで)

(2) 事例研究（発達段階表の活用）

発達段階表を使ってアセスメントしてみよう

ア 高等部 Aさんの実態（個別の指導計画より一部抜粋）

(ア) 日常行動観察（自立活動の内容の視点から）

<p>2 心理的な安定 (1)(2)(3)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初対面の人との会話や初めての活動に抵抗を示す。 ・ 作業や発表のときに教師を見ながら行うなど、他者の評価を気にする様子が見られる。 ・ 受け身的で自分から行動することが少ない。
<p>他者の評価を気にする様子が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 慣れてくると、男性の教師や学園の職員に対して過度に体に触れてくる行動が見られる。 ・ 経験したことのない活動や初めて行う活動に対して「無理です」など消極的な姿勢を見せることがある。
<p>「無理です」などの消極的な姿勢が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文字を読み飛ばすことがある。 ・ 発音と文字の表記が一致しないことがある。 ・ 文字の書き写し（特に漢字）のときに余計な線があったり線が足りなかったりする。
<p>体操や遊戯などの真似が難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな動きがぎこちない。 ・ 身体全体を使う体操や遊戯などの真似がむずかしい。 ・ はさみで指定された形に切ることがむずかしい。 ・ 靴ひもを結ぶことがむずかしい。
<p>自発的な質問はほとんどない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早口で他者が聞き取りにくい話し方をすることがある。 ・ 嬉しいことや自分の強い気持ちを伝えることに声の大きさが調整できないことがある。 ・ 相手に対して適切な言葉遣いができていないことがある。 ・ 自分の思いや考えを整理して話すことが難しい。
<p>たまに友達にいたづらをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自発的に質問することはほとんどない。 ・ 友達とのやりとりでイタズラする様子もたまに見られる。

(イ) チェックリスト結果

国語チェックリスト：7～8歳

算数・数学チェックリスト：7～8歳

(ウ) 標準検査の結果等

WISC-III VIQ 60 PIQ 46 FIQ 48



イ 社会性の発達段階表を活用して

	自立	ことば	感情・共感	発音	自我	他者理解・意識	
3歳	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。
4歳	<ul style="list-style-type: none"> 自分の得意不得手がわかる。 順序数がわかり始める。 全順序・跳順意識が高まる。 頭足人をかく。 四角をかき。 集団であそぶようになる。 子ども同士で話し合える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 					
5歳	<ul style="list-style-type: none"> 自分の得意不得手がわかる。 順序数がわかり始める。 全順序・跳順意識が高まる。 頭足人をかく。 四角をかき。 集団であそぶようになる。 子ども同士で話し合える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 					

3歳 好きなもの、したいことへの主張が強くなる。

現在の行動

4歳 人の評価を気にし始める。

4歳 人の嫌がること、汚いことばを使うことがある。

5歳 「恥ずかしい」という気持ちが出てくる。

5歳 (失敗しないように) 備えるようになる。

現在の行動

現在の行動

(ア) Aさんの社会性の発達段階

- ことば、感情・共感、他者理解・意識については、4～5歳段階を獲得している。
- 自我については、3歳段階で未獲得の項目もある。

ウ コミュニケーションの発達段階表を活用して

2歳	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 	
3歳	<ul style="list-style-type: none"> 他の子どもに「～しようか」と誘う。 「もう一つ」「もう一回」と要求することができる。 他の子どもに「～しようか」と誘う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 					
4歳	<ul style="list-style-type: none"> 他の子どもに「～しようか」と誘う。 「もう一つ」「もう一回」と要求することができる。 他の子どもに「～しようか」と誘う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 「いただきます」を覚える。 					

未

3歳 他の子どもに「～しようか」と誘う。

現在の行動

習得

3歳 集団において、呼名に対して返事をする。

(ア) Aさんのコミュニケーションの発達段階

- 挨拶や基礎理解・行動に関しては、5～6歳段階を獲得している。
- 発信行動、拒否・要求行動に関しては、2～3歳の段階にある。

エ 運動・動作の発達段階表を活用して

模倣の発達臨牀的要因		III水準	IV水準	V水準	VI水準	VII水準
模倣の発達段階	模倣の芽生え	→	→			
	一方だし模倣	---	→	→		
	パターン模倣		---	→		
	即時対応模倣			---	→	
	象徴的模倣				---	→
模倣内容	道具操作模倣	---	→	→	→	→
	身体模倣	---	---	→	→	→
	音声模倣	---	---	→	→	→
姿勢運動	身体接着模倣		---	→	→	→
	身体非接着模倣			---	→	→
	座位での模倣		---	→	→	→
	立位での模倣			---	→	→
運動方向	左右対称模倣	---	→	→	→	→
	左右非対象模倣		---	→	→	→
	前後奥行き模倣			---	→	→
	交叉模倣			---	→	→
模倣環境	絵や録音モデル		---	→	→	→
	人をモデル		---	→	→	→
	個別場面		---	→	→	→
	集団場面		---	→	→	→

(ア) Aさんの模倣の発達について

- IV水準である。

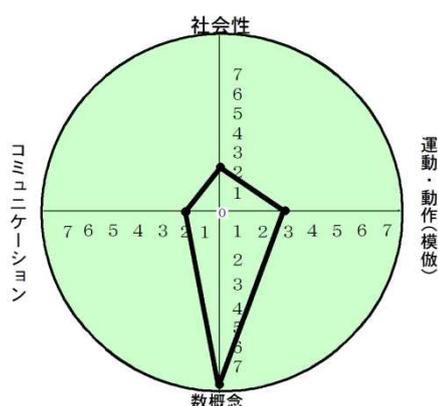
オ 数概念の発達段階表を活用して

	数の理解の発達	数の基礎概念	集合数	順序数
7歳～	・操作的な比較の段階(減らしも増やしもしなかったから同じ)	全て習得	<ul style="list-style-type: none"> ○個数を数える。 ・対象をはっきりつかめる。 ・数詞と、1対1対応しながら数えられる。 ・直感的に数えられる。 ・置き換えて数えられる。 ・まとめて数えられる。 ○数の大小を比較する。 ・対応づけにより、同等・多少が分かる。 ・集合の大きさを比べ、数の大小が分かる。 数直線の比較ができる。 ○数系列を理解する。 ・順序正しく数詞が言える。 ・逆の順に数詞が言える。 ・10進数が分かる。 ○数の合成・分解ができる。 ・直感的に数えられる。 ・5までの数の合成・分解ができる。 ・6～9の合成・分解ができる。 ・10の合成・分解ができる。 ・位取りの考え方が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○数系列における0を理解する。 ・10までの数を、数直線に表すことができる。 ・数直線の0は、始まりの意味であることが分かる。 ○20までの数系列を理解する。 ・1～20までの数の階段づくりができる。 ・20までの数の順序が分かる。 ・数の系列における数の位置、大小、順序が分かる。 ・2とびの数の系列が分かる。 ○100まで及び、100以上の数系列を理解する。 ・1～100までの数の階段や、数表づくりができる。 ・100及び、100以上の数の順序が分かる。 ・数の系列上における数の位置、大小、順序が分かる。 ・5とび、10とびの数系列が分かる。

(ア) Aさんの数概念の発達について

- 7歳以上を獲得している。

カ 発達段階表から考えられるAさんの全体像



- (ア) 学習や経験で積み上げてきたスキル（技術）を獲得している反面、大切な発達のベースとなる段階では、まだ獲得していない部分がある状態。
- (イ) 積み上げてきたスキルを更に向上させていくことも大事だが、まだ獲得していないベースの部分にもアプローチした指導をする必要がある。

キ 事例研究を通してのAさんの担任の感想

- (ア) 4つの視点で見ることができたことで、発達のアンバランスさが分かった。
- (イ) これは「できるはず」と思っていることが「できない」と経験不足なのかと思っていたが、発達段階表を見る中で腑に落ちた。
- (ウ) 課題の設定をするときに非常に役立つと思う。
- (エ) 発達段階表があって良かった。
- (オ) 発達段階表を作って良かった。

6 プロジェクト研究のまとめ

(1) 成果

- ア 今年度は、それぞれのグループが一つのことについて、文献研究をしたり、グループ内で協議したりしたことで、担当した領域の発達段階を熟知することができた。
- イ 「社会性」「コミュニケーション」「運動・動作」「概念」の4つの発達段階表をチーム全体で共有することができた。
- ウ 小中高各学部で編成されたグループで研究できたことで、より広い意見を聞くことができた。
- エ 本校独自の発達段階表を作成することができた。
- オ 児童生徒の全体像をとらえるのに分かりやすい発達段階表ができた。

(2) 課題

- ア モデルケースでは、生徒の全体像をつかむことができたが、個人での活用には至っていない。
- イ 実態把握→課題設定につなげるところまでは至っていない。

(3) 来年度に向けて

- ア 発達段階表を今後も活用し、児童生徒の実態把握→目標設定→目標設定のための手立て→授業実践→評価→改善へと生かせるようにする。
- イ 「社会性」「コミュニケーション」「運動・動作」「概念」の4つの発達段階表には、共通する部分もたくさんあるので、融合できると、更に発達段階について熟知できる。また、活用しやすい。
- ウ 今後、学校としてこの発達段階表をどのように活用していくことができるか。

研究のまとめ

～来年度へ向けて～



研究のまとめ

XI 研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

1 研究の結果

2 研究の成果と課題

3 来年度へ向けて

XII 参考・引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

XI 研究のまとめ

1 研究の結果

本研究では、個別の教育的ニーズのある児童生徒に対する、一貫性・継続性のある指導を取り組む上で、1年次（平成26年度）の研究にてあげられた解決すべき課題についてプロジェクトチームを編成し、課題解決や授業力向上を行った。（実践的研究）

また、本研究では、学部を解いたチームを編成したことで他学部の意見や考え方を取り入れるなど、職員の同僚性を発揮し、継続性のある指導について意識を高めることにもつながった。

結果、全てのプロジェクト研究において、年度当初に掲げた「研究のゴール」に達成することができた。以下に、各チームの具体的な結果を述べる。

(1) チェックリストチーム

- ・ 全職員が同じ視点で評価できるように評価基準を明確にしたチェックリストの改訂版（案）を作成
- ・ 数種類のチェックリストの評定基準を統一する、検査項目と説明書を一体化した様式のチェックリストを作成する、検査項目の内容や表現を見直すなど、職員が活用しやすいように工夫
- ・ チェックリストを行うことで児童生徒の実態を把握し、目標設定や指導内容を考える際に活用できるような検査項目を作成
- ・ チェックリストを今後見直す際に、根拠となった発達検査等が分かるように、参考文献を明記
- ・ 年間指導計画との関連を考慮しながら見直すことを意識することで、本校の年間指導計画の課題を認識

(2) 年間指導計画チーム

- ・ 単元一覧表やねらいの一覧表を作成することで、小・中・高各学部の取組を理解
- ・ 他学部の取組を共有したことで、①他学部の取組を意識した授業を展開（一貫性）や②小・中・高継続した指導へ（継続性）
- ・ 生単：年間指導計画（小－中－高）の単元一覧表の作成及び目標の系統性を整理
- ・ 作業：中学部、高等部の各作業班共通の単元一覧の作成（目標、展開のつながりを整理）

(3) キャリア教育チーム

- ・ 各学部目標からの学部キャッチフレーズ作成を通して、キャリア教育に関する理解の深化
- ・ 本校「平成27年度キャリア教育全体計画」の4領域16項目を遊びの指導、日常生活の指導、生活単元学習、作業学習ごとに整理することで、現在の指導内容の一つ一つがキャリア教育につながっていることを確認
- ・ 観点位置付け・授業改善シートを用いた授業を行うことで、シートがキャリア教育の観点を意識した授業につながるツールとして有効（一方、日々の授業で用いるには負担が大きい）

(4) アセスメントチーム

- ・ 四つそれぞれのグループが一つのことについて、文献研究をしたり、グループ内で協議したりしたことで、担当した領域の発達段階を熟知
- ・ 「社会性」「コミュニケーション」「運動・動作」「概念」の4つの発達段階表をチーム全体で共有
- ・ 小・中・高各学部で編成されたグループで研究したことで、より広い意見を集約
- ・ 児童生徒の全体像をとらえるのに分かりやすい発達段階表の作成（本校独自）
- ・ 作成した発達段階表を活用し、対象生徒の分析を（解釈）実施

2 研究の成果と課題

研究の結果やテーマ研究⑤「中間報告会」、テーマ研究⑨「実践報告会」にてあげられた意見から本研究の成果と課題を述べる。

(1) 成果

- ・ チェックリストの改訂版によってチェックがしやすくなった。これによって、チェックリストの更なる活用が図られる。
- ・ 今ある資料を見直し、整理することができた。
- ・ 回数が限られた中で、生単、作業の年間指導計画一覧表や発達段階表を作成することができた。
- ・ 分担して研究（作業）ができたので、負担も少なく感じた。
- ・ 各プロジェクト研究を共有でき、指導計画や方法が充実（児童生徒へ還元）される。
- ・ 各チームの取組からたくさんのことを学ぶことができた。
- ・ 各チームの研究は、小・中・高の指導の一貫性につながる。
- ・ 多方面に自立と社会参加を考えることができた。
- ・ 各チームが目的を明確にして、それに対して研究をすることができた。
- ・ “チーム”として同僚性を発揮し、「研究のゴール」に沿った成果を確実に残すことができた。
- ・ 各チームに分かれて「主体的」に研究に取り組めた。学部を超えた縦割りの研究で間接的にも連携することができた。
- ・ 学部を越えて、一つの課題に対して意見を出し合うことができた。
- ・ 実践的な研究が数年続いていたが、今回、理論面について研究でき、土台が作られたことを実感できた。

(2) 課題

- ・ 一つ一つのプロジェクトが大きい（学校全体で一斉に取り組んでいくような内容）ため、3年目の研究が大変になりそうである。
- ・ 一つ一つが学校全体で取り組むべき内容、レベルのもので、一部の人たちの意見で取り組めるものではない。
- ・ 内容が多すぎた（多岐にわたる）ため、まとまってどうあるべき研究テーマなのかという所が分かりづらい。
- ・ 4チームの関連がうすい。

- ・ チーム同士の研究の関連性を明確にするとともにチームの数を絞っても良いのではないか。
- ・ 全員が共有できないと実践へ返すことができないが、今回の研究では可能か疑問である。(シンプルにできないか?)
- ・ チーム内で成果を共有する時間が欲しかった。(実践につなげるための方策を考える時間)
- ・ 全てのチームが作成したものをどう使うのか、児童生徒がどう変容した、という実践研究にしてほしい。
- ・ 今後どのように教育活動(日々の授業や指導等)に生かしていくか。
- ・ 各チームに課題があり、課題だけを見てしまうと増えた感じがする。

3 来年度へ向けて

私たちは、主テーマ「一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導」を掲げ、3か年計画で研究を開始した。昨年度、主テーマに迫る具体的な方法として副テーマ「アセスメントを利用した指導を中心に」を設定した。その成果として、アセスメントの一連の流れを協働し、「一貫性」、「継続性」について言葉の定義を定めたり、特別支援教育に携わる教職員の専門性や知識や技能の向上にもつなげたりすることができた。一方、チェックリスト、年間指導計画、キャリア教育、アセスメントについては課題が出された。

これらの成果と課題から、平成26年度当初に計画されていた3か年の副テーマを変更した上で、今年度、「解決すべき課題」として研究内容を四つ設定し、プロジェクト研究として学部を解いた縦割りの研究組織にて研究を進めた。(図4)

これらの研究の方向性は昨年度の時点で、残りの研究期間(2年)や実施できるテーマ研究の時間(年間10回)を考慮し、一貫性・継続性のある指導へつなげるために「テーマ研究」として取り組んでいく課題として意見を集約したものであった。

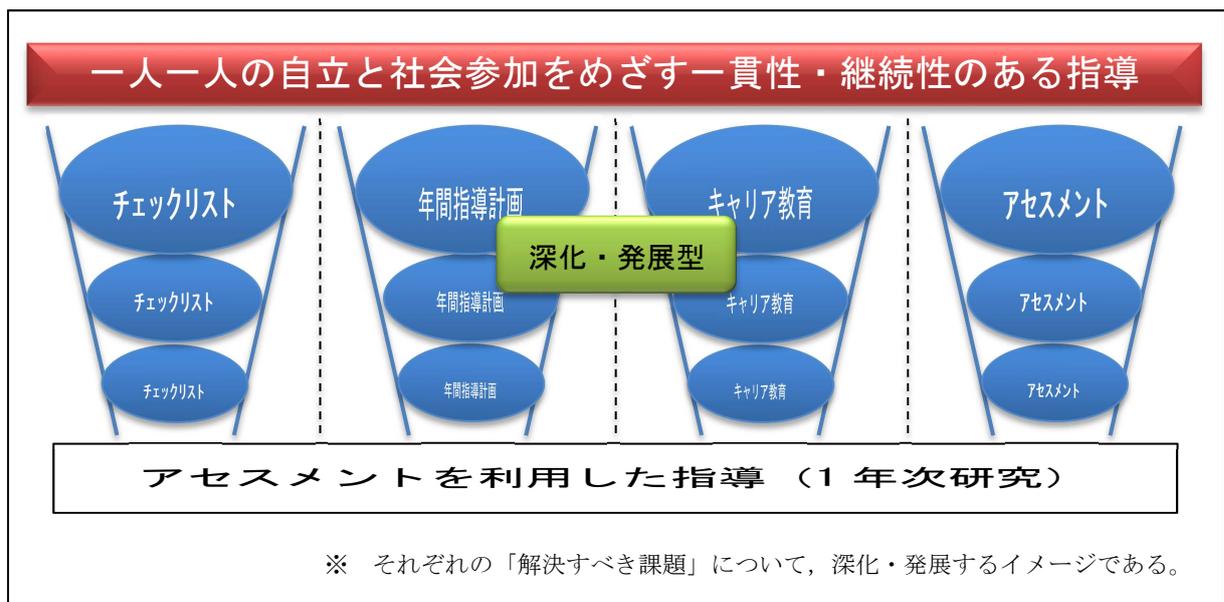


図4 平成27年度当初の研究のイメージ

しかし、今年度の成果と課題から分かるように、「解決すべき課題」について、全てのプロジェクトチームが「研究のゴール」に達成することができたもの、各チームの「解決すべき課題」の大きさに不安を感じていたり“テーマ研究としてあるべき研究の姿(方法)”についての考え方に差があったりしたことで、特に来年度の方向性に対する提案が多く出された。

これらのことは、各プロジェクト研究の相互関係やプロジェクト研究と主テーマとのつながりをきめ細かく説明し、共通理解するまでに至らなかったことや来年度実施予定の「かごしま学力向上プログラム」における授業公開との関連を青写真として示せなかったことが原因の一つとして考えられる。

そこで、各プロジェクトチームからの意見も集約し、大きくチェックリストチームとアセスメントチーム、年間指導計画チームとキャリア教育チームをそれぞれ融合し、生活単元学習に絞って授業公開を行うという方向性を考えた。

具体的には、改訂版(案)のチェックリストや発達段階表を使用し、アセスメントの一連の流れをチームで協働的に行う。次にねらいや目標が整理された生活単元学習の年間指導計画を用いて、アセスメントで明らかにされた(裏付けされた)実態や教育的ニーズから目標や指導内容を決定していく。その際、キャリア教育の4領域16項目の観点を指導案に書き込んでいくことで、教師自身が意識を高めながら実践に取り組むことへつなげていく。これらの実践をとおして、チェックリストの意見(使いやすさ)を集約し、改訂版を作成したり、チェックリスト改訂版と年間指導計画の関連を見直したり、生活単元学習の授業実践をとおして単元一覧表の修正(キャリア教育の観点を追加)を行ったり、発達段階表の今後の使い方について方向性を見出したりすることができると思われる。

以上のような来年度の方向性を案として示し、来年度の研究(3か年研究の最終年)では、「日々の授業を大切にしたい」という本校職員の想いを日々の実践に還元し、《児童生徒がどう変容したか》を検証方法としながら、今後の大島養護の財産として残る「改訂版チェックリスト」、「(生活単元学習)(作業学習)年間指導計画」、「発達段階表」の作成につなげていきたい。

4 テーマ研究⑩(平成 28 年 3 月 10 日)より

1年次や本年度の研究の成果と課題から、来年度へ向けて先に述べた案をテーマ研究⑩にて提案した。その際、以下のような意見や案が出された。

- ・ 来年度の研究は授業法の改善に絞って行い、「改訂版チェックリスト」、「(生活単元学習)(作業学習)年間指導計画」、「発達段階表」は(完成された)資料として活用していく形はどうか。(別冊資料集の改善等を行わない。今まである物を使う)
- ・ 主テーマの検証方法として、児童生徒の変容があげられていた。学部教育目標から具体的な児童生徒の姿を考えるということではあるが、どうなったら授業が改善されたかという姿(イメージ)をはっきりさせておく必要がある。そのためにも児童生徒の前の姿を早い時期に、正しく捉えることが重要である。

- ・ 主テーマの検証方法としては、児童生徒だけではなく、教師の姿という視点も入れてみてはどうか。きっと研究をとおして教師が一番変わるはずである。
- ・ 研究をどんなスピード（全体計画）で行うのが大切である。授業公開と関連させるということであるが、公開前2か月ぐらいからバタバタとならないようにしたい。
- ・ 授業公開と関連させるが、授業公開が終了→研究も終わりということにならないように、今年度の成果と課題であげられていることも含めて、授業公開後も研究がスムーズに続くような研究計画にしてほしい。
- ・ 研究のプロセスは「実践にすぐに生かすことのできるもの（役に立つもの）が作成できた」、「実践にはすぐに生かすことはできなかった（使いにくい）けれど、勉強にはなった」ということを繰り返すことがよくある。それが研究であるとする。
- ・ 教育課程/年間指導計画の PDCA サイクル自体を再度細かく振り返った時に、それぞれの妥当性（特に「P」）はどうであったかを考える必要がある。

XII 参考・引用文献

- ・ 文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(幼稚部・小学部・中学部)
- ・ 文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(高等部)
- ・ 文部科学省 HP「今後の中央教育審議会の審議イメージ」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/
- ・ 中央教育審議会 初等中等教育分科会（平成 24 年 7 月 23 日）
「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」
- ・ 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 HP「アセスメントとは」<https://www.nise.go.jp/portal/elearn/asesument.html>
- ・ 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
特別支援教育の基礎・基本 新訂版 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築
- ・ 鹿児島県総合教育センター 平成 25 年度研究紀要
「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究 ー知的障害のある児童生徒の pdca サイクルに基づいた授業づくりを目指してー」
- ・ 鹿児島県総合教育センター 指導資料
「知的障害のある児童生徒に対する発達の視点を踏まえたアセスメントの在り方」（平成 25 年 4 月発行）
「校内研修の充実をめざして」（平成 22 年 10 月発行）



資料



(版画：高等部3年 越間 那央弥「友達」)

資料

《資料 1》

平成 27 年度「研究グループ」についての希望調査(記述集約)

平成 27 年 6 月 2 日

テーマ研究係

プロジェクトA <チェックリスト>

○ どのような課題(日常の校務で困ったことや疑問に思ったこと)をお持ちですか。

- 1 チェックリストの判断基準
- 2 重度重複障害のある児童生徒のチェックできる項目があまりない。例えば、評価等で「物を握ることができる」という項目があるとすれば、「反射で握る」でも○なのか…「不随意的動きによってできる」でも○なのか…など疑問に思うことがある。
- 3 チェックリストの量が多いので、計画的に実施しないと大変だと去年の反省です。(内容によっては保護者に聞かないと分からないこともあるので)
- 4 チェックしてあるが(前年度)今年実践してみてもできなくなっていることがあるが、評価基準があいまいだから? 児童が忘れたから?
- 5 校内支援係とのからみ
- 6 なかなか活用できていない
- 8 学級ごとにファイルにまとめて確認しやすいようになっているが、高等部では実際に活用して指導することができていない。
- 9 なかなか見る機会がない。(去年は、テーマ研究と年度末しか見なかった)
- 10 活用されていない。(していない。)

○ 具体的な研究の進め方や実践したいことなど、アイデアや意見をお書きください。

- 1 具体的なことが浮かびません。すみません。
- 2 「生活習慣、身体運動、集団参加、コミュニケーション」のチェックリスト、国、算・数のチェックリストそれぞれ見直しをして、具体化できる項目があればいいと思います。
- 3 去年もあったと思うのですが、チェックリスト確認週間のような感じでお知らせが。あると、意識してチェックすることができると思います。また、その実態・課題を把握することで学習内容に生かしていける気もします。
- 4 未記入
- 5 具体的にどの項目のどれが記入しにくいのかの洗い出し。チェックリストのデータ化、データ管理の方法の確立
- 6 未記入
- 8 チェックリストの項目の中で教科指導に必要な項目のみコピーし、教科ごとにファイルでまとめ、活用するのはどうかと思います。(教科担当がいつでも見られる)
- 9 チェックリストの内容を見ながら、授業の内容を考える。(チェックリストに〇〇があるから、授業でためしてみよう!)
- 10 活用しやすいチェックリストづくり。見直し。

○ テーマ研究全般について、御意見、アドバイスなどをお書きください。

- ・ いつもお疲れ様です!!
- ・ どこに入れるか迷いました…

プロジェクトB <年間指導計画>

○ どのような課題(日常の校務で困ったことや疑問に思ったこと)をお持ちですか。

- 1 生活に生かせる生活単元学習をしていきたい
- 2 一つの単元が大きすぎてなかなか時数通りにいかないのが悩みです
- 3 中一高の継続性とか(作業とか)できているのかな?ということ
- 4 担任や教科担当で作成した年間指導計画をできるだけ頭に入れ、常に意識しながら教育現場へと思いがちなかなか実践できない。時間をかけて作成するのだからもっと大事に日頃から見直しをもって意識して取り組みたい(と個人的なことです)
- 5 学部間で指導計画の引継事項を確認することでもっと継続性について結びつきが強くなるのではないかと感じている。中等教育がどのような連携を図っているかについては疑問を感じる。
- 7 園芸(作業)の苗を植える時期, 夏休み前の収穫, パザー(販売)に合わせた栽培など具体的に計画が必要(奄美の気候に合わせた)
- 8 作業学習において, 授業の円滑な運営が先行し, 個別の指導計画等, 一人一人に反映されていない時がある。中の作業との一貫性(なかなか時間がとれない)
- 9 実態差がありすぎて同じように進めるのが難しい
- 10 学部間の一貫性について考えていきたい
- 11 授業準備を計画的に進めることができていない。
- 12 目標設定に向けていくつか例示があれば参考になる。また授業担当者間で目標や手立て作成の差があまり出にくい。
- 12 生単…高なのに小学部よりも重点的に取り組んでいる。作業…販売する際の製品の値段設定理由が明確でない。
- 12 清掃の仕方がしっかり学べていない
- 13 研究しながら学んでいきたいと思う。
- 14 様々な実態に対応できるような改善が必要な部分があると思う(IV課程の中でも, 主障害が肢体か知的かで学習内容が違ってくるため)
- 15 園芸班の作業 雨天時の計画(学習内容)を当日に決めたりする。(天候に左右されてしまう)

○ 具体的な研究の進め方や実践したいことなど, アイディアや意見をお書きください。

- 1 キャリア教育の視点で考える
 - 2 単元→題材→1単位授業の流れがあると PDCA のサイクルも進めやすいのでは…
 - 3 中の段階でどこまでできたらいいか, 高の作業での中学部からの生徒の様子意見交換など
 - 4 未記入
 - 5 学校としての取組を入れてみてはどうか?中の作業学習と高の作業学習の関連付けを生徒・教師ともに理解することがあると, 授業する側も受ける側も分かりやすい。
 - 7 記録(日誌)から詳細な年間計画を作成
 - 8 係の具体案でよいと思っています。
 - 9 授業でのワークシートを実態に合わせていくつか準備するなど
 - 10 未記入
 - 11 一人一人の必要な力を明確にした指導の研究
 - 12 中等教育で掃除の仕方を共通課題として取り組んでみてはどうかと考えます。
 - 14 小→中→高の継続性のためには, お互いの授業を参観したり, 小中高で縦割グループを作って研修したりということも考えてもいいかな?と思う。
 - 15
 - ・ 年間指導計画の中に雨天時計画があっても良いと思う。(大事かも)
 - ・ 1年間に栽培する野菜をあらかじめきめておけるような計画を立てたい。(立てようと思いつつ先延ばしにしています)
 - ・ 今の年間指導計画をもう少し具体的にしていた方がいいのかな?と思います。
- ※ (教育課程の問題がクリアできたら) 作業学習を中・高合同で実施する。中の生徒は先輩を見て学びながら自分たちもこうなりたいというイメージがつく。高の生徒は中の生徒に教えることなどをとおして, 責任感などが自然とつくと思う。まさに中・高の連携!

○ テーマ研究全般について, 御意見, アドバイスなどをお書きください。

- ・ テーマ研係!! Fight!!
- ・ よろしくお願いします
- ・ 今年も1年間よろしくお願いします。
- ・ グループでの意見交換や世間話から出るトークがとにかく貴重です。
- ・ 研究の取組が子どもたちに返っていくようなものになるといいです。
- ・ テーマ研を進める上で, どうしても必要な研究授業だけを設定してください。(Dがするから, A・B・Cもするとかならない様に)

プロジェクトC <キャリア教育>

○ どのような課題(日常の校務で困ったことや疑問に思ったこと)をお持ちですか。

- 2 小学部段階で将来に向けてできることや考えておいた方がいいことなどあれば知りたいです。
- 3 将来に向けてどんな力が必要なのかを整理できたらよいと思う。
- 4 「一貫性・継続性」とよく言葉にはするが、指導となるとちゃんとできているか悩むことが多い。「キャリア教育」に視点を当て、小・中・高段階でのキャリア発達を考えて指導のあり方について考えてみたい。
- 5 各学部でどの程度の力を子どもに身につけさせるか、具体的に分かれば指導がしやすいのではないかな。
- 7 今ある課題に取り組むだけでなく、早い段階から出口を見据えてどのような指導に取り組みばよいか考えたい。卒業後の生活は学校生活の何倍も長い。
- 8 小・中学部段階でのキャリア教育の具体的な指導を知りたい、共有したい。社会人として働くことがイメージできていない生徒が多い。→夢をもっていない中学部生徒もいる。
- 9
 - ・ キャリア教育の視点を取り入れた小・中・高一貫した進路指導←重点取組事項
 - ・ 毎日の授業・指導が将来につながる→授業そのものが進路指導であるという意識
 - ・ 小～高までの 12 年間におけるボトムアップとトップダウンの視点での指導の在り方
- 10 日常の学習と卒業後の状況とのつながり。今やっていることは将来につながるのだろうかというギモン
- 11 生徒の将来の就労への意識をいかに高めていくか。
- 12 それぞれの社会自立（高卒業後）からトップダウン的におろしていく。課題と小学部からボトムアップ的に積み上げていく。成果をどう結びつけたらいいのか
- 13 生活年齢の若い段階で取り組んで、ある程度クリアしておいてほしいことが、高等部段階でもなかなかクリアされていない。（と思われる）
- 14 目先の身につけさせたいことばかりが先行して、長い目で確実に必要だと思う身につけさせたいものにたどりついていない気がする。具体的な必要である物が自分の中でさだまらない。

○ 具体的な研究の進め方や実践したいことなど、アイディアや意見をお書きください。

- 2 未記入
- 3 特になし
- 4
 - ・ 各学部段階でのキャリア発達をおさえる。（本校児童生徒の実態等を踏まえ）
 - ・ 各教科等に具体的におろして指導のあり方を考える。
 - ・ キャリア発達の視点をふまえて、授業実践する。
- 5 段階ごとに習得させたい力をまとめる
- 7
 - ・ 漠然としたテーマではなく、一つにしばって共通実践を行う。
 - ・ 将来をみすえた日生、就職をみすえたあいさつ（生徒指導）など
- 8 小・中・高で分ける
 - 小→日生中心（目的:自分のことは自分で！身辺処理の自立）を共有しあう
 - 中→作業（国数）中心（目的:報・連・相の仕方、作業の様子など高などからアドバイス共有など）
 - 高→作業（目的:total 的な内容 進路を意識、全てにおいて徹底）
 - 国数（目的:より具体的に生きる力の育成 小・中の先生方からのアドバイスなど）
- 9 毎日の授業や指導における各学部職員一人一人のキャリア教育、進路指導の視点の意識調査→共通理解→意識向上→年間指導計画や個別の指導計画への反映
- 10 未記入
- 11 作業学習、生単などの授業を通じて、どのように生徒の職業意識を高める取組をし、それが生徒にどのような変容をもたらしたかがわかる研究になればよいのかなと思います。
- 12 未記入
- 13 指導内容（学習内容）についてある程度優先順位を共通理解し（3学部で）それを年間指導計画に反映させる。
- 14 将来社会参加をするのあたって、この能力が身に付いていたので良かったなどを聞いて、小学部段階ではどんなことができるのか子どもたちへつなげていきたい。

○ テーマ研究全般について、御意見、アドバイスなどをお書きください。

- ・ 出来ることやアイディアなどがなかなかなくて御迷惑をおかけしますが、出来ること（記録など）で学びを深めていければと思います。よろしく願いいたします。
- ・ よろしく願います。
- ・ みんなで意見を出し合い、日々の教育に生かせる研究になったらいいなと思います。
- ・ 分かりやすく、即学校生活に生かせる共通実践があると教育課程の改善にも生かしやすいのではないかな。
- ・ テーマ研究の時間の中でできる研究をおねがいします。
- ・ 職員にとって実のある研究となり、それを生徒の成長に還元させていければいいと思います。
- ・ 特にありません。みんなで頑張りましょう。

プロジェクトD <アセスメント>

○ どのような課題(日常の校務で困ったことや疑問に思ったこと)をお持ちですか。

- 1 未記入
- 2 去年やったことをどう深めるのか…もし今年度も対象児童生徒を決めて縦割のグループでアセスメントしていくとしたら、対象児童生徒の先生だけが大変になるのは避けたいです。
- 3 子どもの実態を把握したいときにどのようなアセスメントをとれば把握できるかがわかりにくいから。明確になると「コミュニケーション面では…」「運動機能面では…」などか課題がクリアになり、指導しやすくなると思います。
- 4 指示したことが伝わっていないことや、伝えたいことがなかなか伝わらないことがある。

○ 具体的な研究の進め方や実践したいことなど、アイデアや意見をお書きください。

- 1 昨年のアセスメントで出た反省を生かしてほしい
- 2 それぞれのグループも関連しながらですかねえ…例えばA（チェックリスト）とD（アセスメント）はよくからまりあいそう
- 3
 - ・ ケースで考えてみて、この実態ではこのアセスメントをとって見たらどうかという文献研究と実態を合わせた内容
 - ・ 実際にとったアセスメントから解釈をみんな（チーム）で行う研修
 - ・ 記録についてワークショップまでできるといいですね。

○ テーマ研究全般について、御意見、アドバイスなどをお書きください。

- ・ テーマ研、大好きです♡
- ・ ぜひいろいろなケースが準備されているので「自分たちで選んだ」ことを楽しみながら、そして実践に「ここでつながった！」と思える研究になるといいですね。大切なのは他のチームの成果を「共有できること」⇒これは報告でなく、経過をチームに発信するといいのでは…。いい研究になることを楽しみにしています。係のみなさんよろしくお願ひします。

《資料 2》

テーマ研究① アンケート集約 <チェックリストチーム>

平成 27 年 6 月 8 日
テーマ研究係

1 所属するプロジェクトのことについてお答えください。

本日の全体及びプロジェクト研究の話や別紙の「平成 27 年度「研究グループ」についての希望調査(記述集約)」からチーム内の意見を共有した上で、具体的な研究の進め方や実践について取り組んでみたいことやご意見をお書きください。(他の意見に賛同するのも OK です！)

- ・ できれば全てのチェックリストの項目の見直しや評価基準の明確化ができればと思う。(3)

※ 評価基準については発達検査等を参考にできるとよい。(1)

※ 希望調査の中にもありましたが、「チェックされている項目が今年はやらない」ということがあるので評価基準をしっかりと定める必要があると思う。また「重度重複障害の生徒のチェックできる項目」という意見に賛成。(2)

※ 教科というより認知面のチェックリスト, 身体動作面のチェックリスト, 職業自立に必要なチェックリスト, コミュニケーション能力についてのチェックリストなど各種検査法を参考に簡便にかつ効果的なものを作り, チェックリストの能力に対応した具体的な手立てを導き出せるようにしたらよい。

※ チェック項目の精選。(1)

※ いつチェックするのか。年間指導計画と見比べながら, どの単元でチェックリストのどのような項目をねらっているのか。(量が多いと思われませんが) (1)

- ・ 活用しやすいチェックリスト作成。(3)

※ チェックする時期, 量, ○×の基準など。

- ・ チェックリストのデータ化 (3)
- ・ 全体での共有 (2)
- ・ 具体的にどの項目のどれが記入しにくいのかの洗い出し。(2)
- ・ データ管理の方法の確立
- ・ グループで取り組む。

テーマ研究① アンケート集約 <年間指導計画チーム>

平成 27 年 6 月 8 日
 テーマ研究係
 [アンケート提出→17名]

1 所属するプロジェクトのことについてお答えください。

本日の全体及びプロジェクト研究の話や別紙の「平成 27 年度「研究グループ」についての希望調査(記述集約)」からチーム内の意見を共有した上で、具体的な研究の進め方や実践について取り組んでみたいことやご意見をお書きください。(他の意見に賛同するのも OK です!)

- ・ 作業学習で何を狙うのか?ねらいを焦点化すれば、何をすればよいか分かるような…。
- ・ 作業学習班，生単班に分けて研究をした方がよい。
- ・ 作業と生単に分かれてする。
- ・ 作業と生単チームに分かれて取り組む。
- ・ 作業と生単に分かれて取り組む。
- ・ 各学部の単元一覧を並べて，つながりを持たせた計画を作成する。
- ・ 年間指導計画の継続性を基にした見直し
- ・ 作業学習→教育課程「基本的な考え方」を踏まえた年間指導計画の作成
 - 高等部・中学部それぞれの考え方が載せてある。
 - 中段階で見に付ける力，高段階で見に付ける力を明確にした
- ・ 職場体験(中)→現場実習(高)のつながり，校内実習(中)→現場，校内実習(高)のつながりの見直し
- ・ 実態別に応じたワークシート，日誌の内容を考えて作成し活用できたら・・・と思う。
- ・ 中・高で作業の様子や実態の意見交換ができれば，早い段階から実態に合わせた活動ができるのではと思いました。(アンケート結果を参考に)
- ・ 自分自身が年間指導計画や教育課程の把握という点で分かり切っていないところが多いのが現状です。すみません。その中で，年間指導計画の知識・理解を深めながら，年間指導計画がどのようなものなのか，学校生活や授業の中でどのように関わっているのかを考えていきたいです。
- ・ 小中高で動くとなると生単なのかと・・・ただ中高の連携となると作業かなと・・・幅広いので，どんなのがいいのか悩むところですが，作業は「中はこういう姿」を，「高の段階では，こういう姿」を目指したいという目標を作っていけばいいのかなと。態度/あいさつ などなど
- ・ 「年間指導計画の継続性を見直しと改善」ということですが，他学部の年間指導計画について知らないことも多いので，まずはそれぞれの学部でどのような計画で学習が進められているかを共有できたらと思います。1年間ですることにはある程度限られてくるので，教科や領域等をしばった方がよいと思います。
- ・ 年間指導計画にある目標を具体化して，そのまま通知表の評価につながるように目標の精選をしていく。
- ・ 児童生徒が最終的に身に付けるべきこと(挨拶の仕方，時間一杯集中することなのか，片付けの仕方なのか)を小一中一高で共通理解，再確認したい。学部目標を基に，更に具体的に(卒業後を見据えて)どういう風にしていきたいのか確認して，作業学習や生単の年間指導計画と一緒に確認していきたいです。
- ・ 単元・題材一覧表について，複数でそれぞれの教科について詳しく考えていく。年間指導計画についても同様に考えていく。
- ・ 作業や生単の学部・学年における目指すところ目標，ねらい，単元等の設定について共有し，整理することから始めてはどうか。段階性がよく見えていない。縦割りだからこそできる研究なので，お互いの学部の教育課程を学び合い，教育課程の改善につながるとよい。
- ・ 作業
 - 掃除の仕方の共通課題
 - 年間指導計画の見直し(作業を計画的に進めていけるように，作業準備を計画的にできるような工夫をどのようにすればよいか)
- ・ 職員一人一人の取組や意見，感じ方など様々ではあるが，チーム!という一つの型を意識し，共有しながら，たくさんの情報を収集することが第一だと思う。小での生単，中・高での作業学習について個人的にいろいろな意見が聞きたい。
- ・ 年間指導計画を見たときに，生徒のどんな成長や学びを願っているのが共通理解できるものであれば，指導しやすいのかな?と思います。(やることは分かるけど，アレンジしにくい・・・みたいな気持ちがあります。)

テーマ研究① アンケート集約 <キャリア教育チーム>

平成 27 年 6 月 8 日
テーマ研究係

1 所属するプロジェクトのことについてお答えください。

本日の全体及びプロジェクト研究の話や別紙の「平成 27 年度「研究グループ」についての希望調査(記述集約)」からチーム内の意見を共有した上で、具体的な研究の進め方や実践について取り組んでみたいことやご意見をお書きください。(他の意見に賛同するのも OK です!)

- ・ 指導計画の中で、小学部～高等部まで、ある育てたい力（意思表現など…）について、1つ研究するものを決めて、それぞれの取組をまとめるとかどうでしょうか。
- ・ 個別の教育支援計画（個別の指導計画）の活用
- ・ 進路の指導計画にある目標や内容が今行っている日々の授業にすでに含まれているのではないかな…。少し意識することで、できていること、やっていること、やったほうがいいこと（やっていないこと）などを明らかにする。また、進路の指導計画の目標や内容を、ボトムアップとトップダウンの両視点から見直していく。
- ・ 進路指導に関する指導計画があることを普段意識していないので、みんなで目を通す機会も必要ではないかと思った。
- ・ テーマ研の時間でできることをするという方針に賛成です。時間は限られていますが、いろいろな経験をお持ちの先生方で意見や考えを出し合うことで、貴重な学び合いの場になればと思っています。
- ・ この指導計画をどうやったら各学部でうまく生かして授業ができるかを考える。
- ・ キャリア教育とは何かを子どもたちに分かりやすく伝えていくためにどうしたらいいか考える。
- ・ 意識調査をしてみる。
- ・ 計画の中の指導内容がどの教科等に反映しているかを見やすく一覧にしてみるとか…？
- ・ 小・中・高の段階ではどのような指導が必要か。指導計画はあるが、あまりにも多くありすぎて…。ポイントをしぼりこめないか。
- ・ アンケートからも将来に結びつく力を高・小・中段階でどう身に付けさせていくのかといったことや「指導計画（授業実践）への反映」という意見が多い。それぞれの学部が抱えている課題（キャリア教育に関して）を話し合いで（本音で）出し合わない先にはすすめない気がします。
- ・ 着替えや挨拶の指導などの具体的なことに絞って、指導計画を参照しつつ小・中・高のそれぞれの実践を検討する。
- ・ 進路指導計画を職員に周知させる。
- ・ 授業の中で、キャリア教育の視点から、どの発達段階、ねらいがあるかを先生方がしっかり意識できるような環境作り（進路指導計画をふだんの授業におろせるような内容、研究でしたらいいですね）。

テーマ研究① アンケート集約 <アセスメントチーム>

平成 27 年 6 月 8 日
テーマ研究係

1 所属するプロジェクトのことについてお答えください。

本日の全体及びプロジェクト研究の話や別紙の「平成 27 年度「研究グループ」についての希望調査(記述集約)」からチーム内の意見を共有した上で、具体的な研究の進め方や実践について取り組んでみたいことやご意見をお書きください。(他の意見に賛同するのも OK です!)

- ・ 普段の授業につながるアセスメントを小さいところから取り上げていきまとめる。
- ・ 子どもの実態を受けて、こう実践につなげているというのは日々の授業で先生方も行っていると思うので、「○○だったから△△したら□□なった」といったものを集めるのもいいかと思う。(アセスメントではないかもしれませんがすみません)
- ・ じっくりアセスメントについての文献研究をしたい。
- ・ 1年間を通して「コミュニケーションなら」「感覚運動なら」こんなアセスメントをとればいいということがまとめられると成果があがるのでは。
- ・ 合わせて記録の取り方も考えていければいいですね。
- ・ 文献研究は宿題にしてワークショップ形のテーマ研にしていくと「わかりやすく成果がやすい」のではないのでしょうか。
- ・ 自分たちで選んだことを楽しめるために少人数なのはとてもいい。意見も出やすい、素直に分からないことは分からないと言合えるプロジェクトになると思う。というかなってほしい。アセスメントを自分の言葉で説明できるようにがんばります。
- ・ 現在小学校からの転入生が学級にいて教科によって実態差が大きいものもあれば似たような課題をもっているものもある。きっと中学部になればもっとたくさんの外部入学者が増え、その個人差はたくさんあると思う。それに戸惑わないように小学校で取り組んできたことを戻らないように他校との継続性も大切にしたい。
- ・ アットホームな雰囲気良かったです。
- ・ ケースで考えてみて、この実態ではこのアセスメントをとってみたらどうかなど、何パターンの方法を研究したい。実際には生徒に行っている方法でもよいし、情報の共有ができればよいのかなと思う。具体的にどのようにしたらよいかははっきりしていませんが、すみません。
- ・ 実態把握をしたいときに、どのようなアセスメントを行えば把握できるのか・・・アセスメントの方法を細かく分けて研究していけたらと思う。
- ・ チームの研究を全体に還元することを目指しているのですが、個人的にはまずアセスメントの力をじっくりちゃんとつけたい！ざっくりしたものでもいいからフローチャートのようなものができると誰でもある程度のアセスメントができるのかな。
- ・ 希望調査に記述してある「ケースで考えてみて、この実態ではアセスメントをとってみたらどうかという文献調査と実態を合わせた内容」に取り組んでみたいです。実際にとったアセスメントから解釈をみんなで行うこともやってみたいです。あとお恥ずかしいですが、「アセスメント」という言葉がまだまいちしっかり理解できていないです。
- ・ 対象児童生徒選び、人数、形態、いろいろ難しいところはありますが、縦割りでアセスメントするのは、より広い視野でいろいろな考えが聞けておもしろそうだなと思います。ただ他学部の児童生徒のアセスメントとなったときに自分の学部じゃないからなんか言いにくいなあとか、こんな考え方でいいのかなあとか思ってしまいそうなので、気軽に思ったことを(疑問でも何でも)話せるグループの雰囲気だとありがたいなあと思います。
- ・ 勉強させてください。
- ・ 今は、それぞれの先生方がそれぞれの手法視点でアセスメントを行っているように思います。「大島養護学校版アセスメント」の基本型(Basic)を作ってはどうかと思います。(昨年度の深化)(研究授業はアセスメントのあくまで一部としてそこまでは重点的にならなくても良いのではと思います)

《資料 3》

テーマ研究① 授業公開に関するアンケート集約

平成 27 年 6 月 8 日
テーマ研究係

- 1 かごしま学力向上プログラムにおける授業公開*の実施について、その年度はいつがいいと思いますか。

※ かごしま学力向上プログラムの取組として、県下の特別支援学校は平成 27～29 年度のうち1回以上は授業公開と授業研究会を実施することになっています。

ア 平成 27 年度（研究 2 年次） 1 人

イ 平成 28 年度（研究 3 年次：まとめの年度） 47 人

ウ 平成 29 年度（新たな研究テーマ） 2 人

- 2 かごしま学力向上プログラムにおける授業公開の実施について、運営のアイデアやご意見をお書きください。

- ・ オースドックスな公開でいいと思います。（パネル発表，研究授業など）
- ・ 特別支援教育における学力って何なのでしょうか？通常学校に求められているものと同じではいけないと思うのですが…。逆に特別支援学校で個別の力を伸ばす方法を発信してもよいのでは。
- ・ キャリア教育との関連性が明らかになりやすい教科・領域の授業がいいと思います。
- ・ テーマ研究とからめる。
- ・ 一部に負担の偏らないものにしていけたらと思います。
- ・ 実施年度になってからテーマの方向性などを検討すると、決まるのが遅くなり授業者の負担となるので、実施の前年度のうちにある程度の方向性を決められるように準備していけるとよいと思います。
- ・ 昨年度の反省を生かしていくのであれば今年でもいいのかと思いますが、新たに取り組むテーマ？になるなら H28 年度以降かな。公開となると今年設定してもできるものなのか。
- ・ 本テーマでのテーマ研として取り組んでいくのならまとめのイかな？！あまりテーマ研とからまないならウかな。
- ・ 前回の授業公開のノウハウ（授業研究の方法等も含めて）を生かすと負担が減ると思う（2）
- ・ 日程は授業研究を参加者と本校職員是認で行いたいので、児童生徒の下校は 13:30 下校（または 11:30 下校）外と思う。
- ・ 参加者を集めるのにも随分苦労したので、大島地区の小中高の巡回相談等を利用して積極的に呼び掛けるようにする。
- ・ 授業する上で、どのように工夫し手立てを考えたかが分かる取組をしてほしい。
- ・ 今のところアイデアが出ません。今のところ分かりません。（4）
- ・ まとめ年度ということなので、研究の成果を外部の方々に知ってもらう機会になると思う。
- ・ 生単グループと作業グループに分かれて実践する。
- ・ 難しくてよく分からない。
- ・ 昨年どのように取り組まれていたのかが、まだよく分かっていません。（勉強不足で、すみません。）
- ・ テーマ研が進めやすいように、一緒に取り組みたいと思います。
- ・ 研究何年次にやるかで違ってくると思うのですが、今年度のようにいくつかのプロジェクトに分かれるのであれば、プロジェクト同士がどのように関係し合うのかを明確にして、全体像が見えやすいようにしてほしい。
- ・ 前年度からの比較で、前年度に評価して更に良くなったことを授業実践しながら公開
- ・ かごしま学力向上プログラム・・・すみません、具体的にどんなプログラムかが分からないので、意見が書けません。
- ・ 単元の中で、授業の、例えば 1/10 時間目と 10/10 時間目で、どれだけ学力が向上したかをデータ化し、指導方法と合わせて発表する。
- ・ 27 年度の県音研と組み合わせない方がよい。授業公開ありきの研究とすべきではなく、2 年掛けて準備を進めるべき。プロジェクトを立ち上げた今年の授業公開で何を示すかは難しいと思う。

- ・ 運営にあたり、あらゆる幅広い課題や編成等あると思うが、こういう意見の収集を基に、楽しみながらの運営を臨みます。
- ・ 昨年、アセスメント中心に取り組んだので、今年各チームで型（！？）を作り、来年度実践をするような流れがよいのでは？
- ・ プロジェクト毎の発表になると思うが、必ずしも授業公開とはならないように感じる。
- ・ Bグループは、今年度指導計画作成、来年度その実践となる授業という感じになると思われるので H28 の公開かな？
- ・ テーマ研と授業公開の具体的なつなげ方について早いうちにもてるようにした方がいいと思います。（例：A～D チームからそれぞれ一本ずつ？ 1 チームが行って他は研究成果をまとめる？等・・・）
- ・ プロジェクトチームでしたことを発表できるような形で公開できればいいのではと思います。各チームで 1 本ずつ授業公開に限らず、「プロジェクト説明」のような内容で分科会をもってもおもしろいのでは。
- ・ どのようにして協力すればよいのか・・・

《資料 4》

平成 27 年 10 月 1 日（木） テーマ研究⑤ 「中間報告会」 個人感想集約

A チェックリストチーム

リーダー	東 明美	サブリーダー	古村 洋介, 尾前 誠一
小学部	竹崎浩記, 永野由佳, 平千登勢, 松元真紀		
中学部	宮崎究, 駒走俊彦		
高等部	永正彰人, 栢木翔, 有満勝利, 国分佳子, 内山沙織, 平麻衣子, 島元渚紗		

- 国・数のチェックリストに説明を付けることで、評価基準が明らかになるとともに、授業内容にも生かされそう。基盤になる資料がしっかりあって良い。家庭生活のチェックリストについては、確かに保護者にやってもらった方がよい項目がある。
- 使うためのチェックリストなので、簡単に誰でもチェックできるという視点は大切だと思います。上限をどこにおくかが難しいと思います。（本校卒業時に目指すところをゴールにするのか？）
- 授業に生かせる項目にするというのはとても良かった。チェックリストを記入する際、出来るか分からない項目などもあり、あえて取りませなければならぬ項目などもあった。授業で生かせる項目があると、取りませやすいし、また、取り組んでいるものでもありチェックリストの記入もしやすいと思う。
- 一から作ることは、大変ですが、すごくいい取組だと思います。チェックリストの項目が個別の指導計画にすぐおろせる内容になっていると系統的な個別の指導計画につながっていくと思います。
- 研究のゴールが明確になっていい。チェックリストが増えて仕事が増える（困り感）→チェックリストがあると実態把握がしやすく便利（利便性）への意識改革をぜひみなさんにアピールしてください。
- 継続性、一貫性があると確認できたことが成果。基準などでできれば後は私たちが自信をもって使っていけばよい。
- 生活習慣、身体運動グループの項目細分化は、分かりやすくなっていると感じたが、文章表記での見やすさが加わるより使いやすいものになるのではないかな。
- チェックリストの見直しでさらに使えるものになっているように感じた。中高等部あたりでは、国・数に関して教科担任がチェックリストを所持すれば活用が図られるのではないかなと思う。保護者にチェックしてもらう項目だけ別紙にまとめてあれば聞き取りの際に活用しやすいのではないかなと思う。
- 担任だけでは難しい部分も多いので、保護者と担任と両方でチェックできるようなものにしてもらえると気持ち的に楽になると思う。
- 問題点について考え、項目を改善していったところ。
- 「判断基準を明確になる」ということに取り組んでいるので、Aチームの今年度の研究（課題）は、成果がはっきりと出たと思う。
- 各グループでの取組はすばらしいと思う。他のグループとの関連項目や重複がないかを確認することも必要では？
- 各グループで問題点をピックアップして改善につながっている。分かりやすい。
- チェックリストの項目や判断基準を明確にし、今後内容等も検討することで、チェックリストが活用しやすくなると思われるのでよいと思う。
- 新たに作るのではなく、今活用しているものを再検討していくのは良い取組だと思う。評価基準や記入に当たっての説明書を整備していくのもとても良いと思う。
- 授業に返せるような項目にしたり、参考文献（発達検査）を明記したりしていることで、活用しやすくなると思う。良いと思う。
- チェックリストのしやすさ分かりやすさの配慮から、検査項目と説明書を一体化した書式は見やすく良いと思った。
- 全職員が同じ視点で評価できるのは、大切ですね。授業に返せるような項目はありがたいです。
- 国語のチェックリストにおいて、検査項目と説明書を一体化した書式にすると、とても分かりやすいと思った。また、発達検査の項目などに対して未熟な自分に対してはとても参考になると思った。
- 具体的な取組だと思う。実際に使ってみて、質問と説明が違うページにあったことが使いにくかったように思う。
- チェックリストの内容を見直し、実際に活用しやすい物に改善できていて良い。改善したものを使ってみることで、また使いやすさ、活用のしやすさが分かってくると思う。
- 5つのグループに分かれて、より具体的に項目を検討されている部分は素晴らしいと思った。生活習慣、身体運動グループの7歳以上の（身体運動）の項目は項目立てすることがなかなか難しいですね…。

- チェックリストの見直しや追加・削除するなど使いやすいものに改良されていていく感じることができました。来年度、実際に使ってみたいと思いました。
- チェックしやすく、わかりやすく、改善されています。
- チェックリストの細分化は良いと思う。例えば国語グループでは検査項目と説明書の一体化させた書式にすることで誰が見ても分かりやすい内容になると思った。
- チェックリストの評価基準がより明確になることはとてもよい（今までのあいまい）
- 各グループ書式がバラバラなので、書式も統一できるとよい。（国語と算数、数学は同じがよいのではないか）国語の問題点に「説明書とリスト両方見ながら行うこと」が挙げられているので、算数、数学もチェックリストの横に解説をつけてはどうか。
- 解説があるとチェック、判断しやすくてよいのではと感じます。検証が出来るのであれば、よりよい項目設定のきっかけにもなるのではないかと感じました。
- これまでのチェックリストの項目を細分化したことで、見やすく評価がしやすくなったように感じる。
- 課題や指導内容の細分化では、保護者から見ても、分かりやすく教師側から見ても指導しやすいと思った。
- チェックリストの使いづらいつの改善点が示されていて良かった。改訂版を早く使ってみたい。
- 小学部、中・高等部のチェックリストで同じものや似たような項目があったので、見直されることで改善されたら良いです。現在、使いにくかったり、例が分かりにくかったりするもので、細分化されることで分かりやすくなると思います。
- より使いやすいチェックリストに改訂されており、よかったです。また、明確な判断基準も示され、よかったです。
- 検査項目と説明書の一体化で使いやすくなると思う。使いやすさと内容の充実を追求してほしいと思う。
- 問題がそれぞれ出され、それを解決するための取組がなされていていいと思いました。国語では具体的に改善点が出されていましたが、細かく変更してあり、チェックはしやすそうな印象を受けました。膨大な量の見直しになるので大変だ…と思いました。
- 新しく形式を変えるのは大変そうだが、NEW バージョンのチェックリストは使いやすいかなと思った。
- 評価項目を細分化したり、誰が見ても分かるような、活用できるようなチェックリストに改善されているところが良いと思いました。
- それぞれチェックしやすくなるように改訂しようとしている。チェックすることで児童生徒の指導、支援ができるようにしていくことが大事だと改めて感じた。より細かい部分を知りたい場合は検査を活用していく。
- なかなか評価しづらい表現（「働くことへの理解」等）にも着目し、評価しやすいように改善していくのは、とても良いと思った。
- 一から作るのではなく、各領域に一貫性をもたせるように見直して検証しているところがよいと思いました。
- 国語グループの▲ これらの検査項目の基盤は何か →根拠のことでしょうか。
- アセスメントチームの発達段階表を活用することが大事かなと思う。また、年間指導計画（生単・作業）の指導内容との関連、キャリア教育の能力（？）との照らし合わせなどが必要になってくると思われる。（チェックしたい項目の抜けがないか）
- 社会生活、職業生活等は先行研究、文献もあるようです。（上岡一世先生？）
- 表現が具体的にすることはいいと思う。だが「できる」にも様々な「できる」があると思います。例えば「言葉掛けで」「カードを見て」「一緒に」「指差して」などあるので、そこをどのようにチェックリストで伝えていくかが難しいですね…。
- 自分がチェックリストをするときに項目が多いと大変である。チェック項目をしぼって簡略化か段階別にすると、見やすくチェックしやすくなるのではないかな？
- データ入力にできないか（データ入力を基本にしてプリントアウトは必要なときのみ）①重なる項目は自動入力されるようにエクセル式を組む。②1.できる 2.ややできる などのように数字（点数）で入力 →合計点が出る
- できていたことができなくなる理由を記載できると、指導の手掛かりになるのではないかなと思う。
- 項目が多くなりすぎずに共通理解できるとよい。
- 各グループが一度集まって検討（情報交換）できたらいいです…
- 形式をある程度そろえられたら、分かりやすいのではないかな。（各グループ同士のすり合せの時間が必要）
- チェックリストを個別の指導計画の目標設定に活用できるとよいと思っているが、いつ活用すれば良いのかが難しいと思う。

B 年間指導計画チーム

リーダー	前潟 久美子	サブリーダー	原 正憲, 若松 千代
小学部	山下晃生, 美座あかり, 今村三枝子		
中学部	小倉寿彦, 二禮木智香, 高野博一, 前山優香		
高等部	島田理香, 川畑真希, 上園菜穂子, 米里みなみ, 小野恭一, 里康一郎, 北原貴志, 原口麗胤		

- 生単…基になる目標→学部目標→個人目標の流れはとても良い。ずっと同じ目標、年齢が上がったのに目標の段階が下がっている、目標設定の視点が担任によってバラバラ…ということが減りそうである。
- 作業…キャリア教育, チェックリスト(家庭生活・職業生活)作成資料を一読し、関連を見たい。
- 生単・作業は最も一貫性・系統性が配慮される内容ではと考えますが、実際、作業種目も高になると全く違うものが出てくるので、作業の内容などは絞り込んだ方がいい?生単は、現状では実態差もあり、グループによってはくり返しが必要な生徒もいるので、一概に学部で…とは考えにくい面もあるかも…と思います。
- 単元ごとの個人目標を決める際に、小学部1年～の単元を見直しどんなことをしてきたのだろうと考えている。その際、今は去年より少し上げた物をしなければと思うが、高までの系統性を考えてできるかと言ったら難しい。基があればかなり道すじがあり、方向付けがそろっていくのではと感じた。
- 生単と作業学習の横のつながり?一貫性?もこれから見ていかないといけないですね。
- 作業学習を中・高で段階性をおって単元一覧にしているのは見通しがもちやすくわかりやすくいいと思う。内容についても中高の作業班でのつながりが明確になるともっといいと思う。
- 生単「運動会に向けて」の例を見て、小～高までいろいろな目標が指導計画には書いてあるが、整理すると5点に絞り込まれた!という発表を聞いて、とてもスッキリしたし、このようにシンプルにしていくことが私たちの指導の一貫性・継続性に大きく貢献する!と感じた。指導の形態部会にて、他の教科もこのような視点で取り組むべきだと思う。とにかくシンプルに!
- 「運動会までの日程を知る」では、中学部・高等部共通の枠やシートのたたき台を最初に作成しておく、内容も継続性が高まるように感じた。
- 生単や作業学習について、小中高の一貫性、継続性について考えていくことも大切で、同じことを何度もすることがなくなっていくと思う。作業学習については、学習指導要領の職業の段階表を参考にしてみてもいいと思います。小=教師と一緒に…ではなく個によっては、小の児童でも中の目標設定でもよいのですよね。
- 小・中・高への継続性のつながりが個人を育てることになるということがよく分かった。
- 「生単、作業における単元・題材一覧表を作成する」ということに取り組んでいるので、Bチームの今年度の研究(課題)は、成果がはっきりと出たと思う。
- 全体を見渡して、小・中・高と、横並びに項目を並べ、整理していつているところ。
- 生単では、個人目標も書きやすく、継続性につながると思った。作業も、一覧で見られることから、段階的や継続した指導につながる改善だと思う。
- 目標が学部ごとで明確にあれば、そこに近づいていこうと、教師側も指導しやすいと思います。目標をシンプルにして、より具体的に個人に下ろしていくという方法はとてもいいと思います。
- 目標設定が分かりやすいので、個人に下ろした際に、個の能力に応じた目標を考えやすい。そして、次の担任が同じ単元で目標を考える際に昨年度までの成長をみることができるのではないかな。
- まさに、課題になっていたところは、ずっと思っていて系統性はとれているのかなと疑問をもっていた。正直、自分の学部以外の生単の内容、単元等、知らないことが多い。そこで一覧化できること、同じ時期に同じような単元の扱いがあると他学部のことも前学部のことも分かりやすい。
- 個人目標に下ろしたときに、各学部の基本になる目標が定めてあれば、それぞれの生徒の実態に合わせての個人目標が設定しやすくなると思います。
- 同じような内容を整理し、見やすいものにしていくことで、段階性や系統性が明確になる計画が出来ていて、取組が良いと思う。
- 基になる目標が作られることで、個人目標を立てやすくなり良いと思った。
- ねらいをまとめた資料、良いと思います。
- 一本の軸となるねらいがあることで、それに(一人で)(教師と一緒に)など付け加えることで、ねらいも立てやすく、継続性も生まれると思った。

- 生単：全学部を通して目標を見つけることができるので、とても良いと思った。作業：今は他学部でどんな活動が行われているか分からないので、良い取組。
- 単元の目標の系統性に注目していたことがよいと思う。(生単) 中等教育の系統性、つながりを考え、作業学習の内容にもふれるというのもよいのでは(作業)
- 見直しをするときの共通理解の中の「目標はシンプルに考える」「内容を見直すのではなく、目標の系統性をみていく」ことはとても分かりやすかった。
- 各学部の段階性・系統性を意識して取り組んでいることが分かった。目標の段階性を小→中→高と示された資料があると授業の目標や評価もしやすくなると思った。
- 小・中・高の指導の継続性につながる。分かりやすい。
- 各学部の授業(単元・題材)における目標が、段階的に整理されるとのこと。共通した視点で段階的に指導内容、目標の設定をすることにつながるのよい。
- とてもよい取組で、学部間の一貫性が確保されれば、指導の充実につながるかと思います。他の教科でも取組を進められればよいと思いますが、時間が必要ですね。(次の学習指導要領改訂も見込まれますし…)
- 系統性を考えながら、単元目標の見直しを行っているところがよいと思いました。「どういふうに学部や個人目標におろしていくかというところ…」の例がとても分かりやすかったです。
- 一貫性などを考えるとやはり学部間での共通理解は必要だと思います。生単グループの例えは分かりやすかったです。
- 生単、作業学習等、小・中・高等部の一貫性の教育を利用した指導ができれば良いと思います。
- 分かりやすい発表で、改めて小・中・高の目標設定の意図を考えさせられた。他学部の内容を知る前に、自分たちの内容を再確認する必要があると個人的に思っています。
- これまで、小・中・高の題材は知ることはできて、どんなことを目標に取り組んでいるのかが見えないことがあったため、これが改善されると一貫性や継続性がより意識できるのではないかと思います。
- 他学部の作業内容と目標を知ることが出来れば、今後の授業に役立て、支援等を考えることができると思いました。
- 年間指導計画(生単と作業)の中には、同じような単元やねらいがあったりするので、各学部でどこまでを目指すのかを明確にすることで、系統性も出てくると思う。
- 段階性①～④の一覧が分かりやすく、系統性を意識して取り組むことができやすいと思います。こうして思い切った見直しをするのであれば指導計画の書式も統一するとより見やすいかとも思いました。
- どの作業班も共通してねらえる目標の整理というものは、分かりやすくよいと思った。中→高の段階性をもっと見やすくなると使いやすいのではと思った。
- 中・高一貫した内容や継続した指導ができるように作業、生単の指導計画を見直し中。見やすい指導しやすい指導計画になればいいなと思います。
- 毎年、くり返しのある行事等で、目標にすることや内容が分かりづらかったので、子どもたちがどの段階にいるのか参考にしながら指導に活用していくことができ良いと思いました。
- 同じ内容でも目標が違うということが分かりやすくなって良いと思う。
- 全学部で系統性を考えて、単元の目標を見直しているところがすごいと感じた。小・中・高同じ題材で取り組んでいても、確かに様子が分からなかったもので、この単元・題材一覧表は有り難いと思います。
- 作業学習で、他学部がどんな内容を行っているか、(しおかぜ市場の際、たまたま他学部の先生とお話する機会があり、他学部の取組に驚いた。中学部の方が高等部より質の高い、目標の高い取組をしていたということがあった) ちょうど知りたいと思っていました。今後、生かせる、自分も早く実践報告を聞きたいというような研究だと思いました。
- 目標を全学部で合わせることで、生徒たちの共通理解・継続指導に生かすことができとてもよいと思いました。
- 各学部の指導計画の分析を通して、指導段階等が見えてくることが期待できる実践と思われる。
- 指導の形態部会との連携。テーマ研究を受けての教育課程編成が少し不安である。
- 単元一覧表(全学部)の作成や単元のまとめりに一貫性・系統性のある目標設定をされることはとてもよいことだと思います。今後は、チェックリストとの関連をさせながら、お互いに必要な項目や抜けている項目がないか照らし合わせていくことが大切だと思います。
- 作業学習の目標の系統性を見直しはいいことだと思う。しかし、中学部、高等部それぞれの実態が様々なので目標設定は難しいと思った。
- 単元・題材一覧表は、各作業学習の係に負担がないように、段階的に進めていってほしいです。
- 目標の捉え方を「基になる目標」「学部・授業」「個人目標」と分析することで、シンプルに分かりやすくまとめられるのではないと思う。その結果、小中高の継続性を意識しやすいものになるのではないと思う。
- 基になる目標が整理されることで授業が組み立てやすくなりそう。この後指導計画をどのように整理するかがポイントになると思う。そのことについて、どのような見直しをとっているか。
- 中→高の段階性を明確にするとよいのでは。中は年間を通して基礎→定着→発展だが、高は、Ⅰ段階→Ⅱ→Ⅲ。中→高の目標で発表したところを分かりやすく。
- 項目を段階的に見られる良い。

C キャリア教育チーム

リーダー	東 和也 (板敷 大和)	サブリーダー	馬場 真理, 春口 陵二
小学部	嘉村徳紀, 吉岡聖子, 富岡夏帆, 石原優子, 塗木ひろみ		
中学部	岩本真由美		
高等部	梶哲也, 坂元輝夫, 濱田千代美, 淵上新一郎, 日高貴子, 徳重浩二, 宮ノ前真志, 榊慶太郎, 岩元美紀 小牧えりか		

- 研究の取組を示す構想図が分かりやすい。大人数の教師がいる、また入れ替わりが早いという本校の特徴を踏まえると、キャリア教育の内容をこのような図で示すことで、一貫性・継続性のある指導を充実させることができるのではないかと。
- やはりキャリア教育の視点をどう意識して指導に当たるか、自然にできるようになることが自分たちのゴールでは？と思います。例えば、日生段階で小だからと言って全部脱いで用を足すというのを容認しては、中・高での指導がとても難しくなるので、日生でも十分「キャリア教育」の視点が必要ということが研究を通して分かったらいいのではないかと。
- 小・中・高一貫した1つのキャッチフレーズ(学校全体)もあっても全体が同じ方向を向きやすいかとちょっと思いました。学校目標があり、④⑤⑥におけるみたいな…。
- 小・中学部では、今やっている学習内容がキャリア教育のどの視点に当てはまっているのかを意識できる指導計画であってほしいです。この単元は…この題材は…というより、この学習内容は…という視点で。Bグループの遊びの学習は、集団参加というより、別の視点の方が望ましい気が。
- キャリア教育では「小中高の共通言語の共有が有効」と佐賀大の研究公開の発表で聞いたことがあるので、ぜひ他のグループにも機会を見つけて発信してほしい。
- キャリア教育12年間と学部段階の方向性の案は大変良いと感じた。
- 毎日の忙しさにかまけて、きちんと理解していない部分が多いと反省。しっかり活用できるようになりたいと思った。
- 12年間と学部段階の方向性を明確にしようとしているところ。
- キャリア教育の視点の位置づけ、12年間の方向性など、職員で共有できると指導しやすいと思う。
- 各学部のキャッチフレーズはあったらすごく分かりやすいと思います。そこから個人に下ろしたとき、一人一人にどんな力が必要なのか考えていくことがより大切なことだと思います。
- 12年間の系統性をもたせることはとてもいいことだと思う。高等部で受け持った生徒が小学部段階ではどのくらいのことできて、高等部までどんなことを身につけたのかを知る機会があると、小学部の生徒もこの段階でこんなことを身につけさせようとイメージしやすいと思います。
- キャリア教育を進めるに当たっては、発達年齢も考慮するが、大前提として、「生活年齢」に即した関わり方があると思う。これができていないと「キャリア教育」につながらないと思う。
- キャリア教育の各学部の視点を基にして、学部間で系統性を持たせて指導していくことは大変なことだと思いますが、高等部卒業後のことを考えるとつながりのあるものが必要だと感じています。
- 実際に授業を行うことで、キャリア教育をどの程度意識して指導を行っているかを再確認していければと思う。内容面も目指す方向性や視点の位置付けと形態間の関係性がシンプルに示せれば、全校としてキャリア教育に取り組んでいけると思う。
- 方向性を明確にすることで、その目標を目指した指導がしやすくなると思った。
- 活用することで、課題が見つければ、それが次につながると思います。
- キャリア教育の指導計画を活用していこうと思った。
- 各学部のつながり…大切だと思った。
- 活用面、内容面と振り分けて研究を進めていることがよいと思う。
- 実施グループAから実施グループBへ分かりやすくつなげることで一貫性・継続性のある指導を充実させることができると思います。言葉だけでなく図式化することで分かりやすいです。
- 教育支援計画を活用していないことを自覚しているので、もっと活用(見る)する必要があると感じた。意識していきたい。
- 学部ごとの方向性をキャッチフレーズで示すのが、分かりやすくていいですね。
- 小から中、中から高へとつながる、子どもたちが分かりやすいキャッチフレーズがあると確かにいいなと感じました。
- 実際に授業で実践…素晴らしい取組だと感じます。

- 各学部段階の方向性を明確にし、各学部でキャッチフレーズを作ることは良いと感じた。保護者にも生徒にも分かりやすいような…
- 授業実践として、キャリア教育の視点を取り入れることができれば、職員もより意識して（キャリア教育）行えると思います。
- キャリア教育の指導計画について知り、活用すること、そして活用しやすいように目指す方向性を明確にすることという活用面と内容面の両面からアプローチしているのがよい。活用できる（より活用しやすい）指導計画にできると良いと思う。
- 子どもたちにも分かるような「キーフレーズ」大切だと思います。それにも一貫性があれば無意識のうちに一貫性を持った指導、子どもたちにとっては一貫性のある生き方（成長）に結びつくかもしれません。
- 身につけたい力を共有しておくことはよい取組だと思いました。
- キャッチフレーズを作るのは、児童生徒も意識できるので、とても良いと思った。
- 他の特別支援学校では、小・中・高一貫した、どんなキャリア教育が行われているのか、気になりました。調べてみようと思いました。
- 12年間を通じた指導。現在担任している子どもがどのあたりにいて、何を指導していけばよいのか、指針が提示されるのがいいと思いました。
- 各学部がキャリア教育を意識するところから始めなければならないと思った。
- 児童生徒にも分かりやすいキャッチフレーズはがあると教師も意識して取り組めるのでよいと感じた。小学部は何かなと考えていけたら。
- 進捗状況がわかりづらいですね。中間時の成果として何があったのか、明確になるとよいですね。
- 活用面では「キャリア教育の指導計画」をどのように絞り込むのが難しいと感じた。内容面では、指導の形態間の位置付けは大切ですが、提案されたような図は必要なのか疑問に思いました。（でも代案はありません…）
- 小～高の課題意識の共有が必要。
- 学部ごとの方向性を示すのはよい。発達段階に応じて個人の目指すところは違うが、年齢に応じた取組をできるとよい。
- そもそも個人の成長段階が大切なので、学部ごとに身に付けさせる力というのが難しいのではとも思います。
- 「キャリア教育の指導計画」が活用しやすいものになるように、また活用する機会を作るために、実際の授業（各教科・領域）との関連を明確化した方がよいのではないかと思います。
- 特に日生では「キャリア教育のこの視点を大事に」という取組はいいと思うし、年間指導計画にも反映しやすく、授業前に私たちが振り返ることで、意図的に設定する機会が増えてくると思うが、日生、生単…の指導の相互の関係を明確にすることは難しいのではないかと？
- キャリア教育については、班でするには少しテーマが大きいと感じます。現在のテーマ終了後は全体テーマとして学校全体として取り組んでもよいのではないかと感じます。
- 日頃の各教科等の授業において「キャリア教育の視点」から目標設定や児童生徒への働き掛け（教師の意図的な関わり）ができているかが「キャリア教育」のポイントでは。教師一人一人が「キャリア教育とは何か？」を知ることが必要では？
- 子どもたちに分かりやすいキャッチフレーズは一部では、具体的でなく、分かりづらいという意見も聞いたことがあります。難しいです。
- 内容を絞り込めると良い。
- 実際の指導計画を活用できるか、どのように生かすかが大きな課題のように思った。
- 小・中学部、特に小学部によるキャリア教育の指導とはどのようなものをいうのか…

D アセスメントチーム

リーダー	団塚 ルミ, 東 和史	サブリーダー	飛永 雄一郎, 藤山美由紀, 下野千春
小学部	藤尾友香, 中水教仁		
中学部	川村雄一郎, 田浦清美, 飛松佳子		
高等部	久保香菜子, 大重耕平, 菊田裕菜, 中和田明宏		

- 子どもに伝えながら絵カードや言葉, いろいろな取組で伝えるが, 言葉の種類はたくさん出ているものの, 動作ややり取りから何かがうまく伝わってこない困り感を感じていた。こういうものがあると, もっとここをおさえて伝えの方がよいという方向性も見えてきそうだと感じた。
- 細かい視点に分けてアセスメントを行うのはとてもいいことだと思います。アセスメントをどのように授業に, 個別の指導計画に共通した考えで反映していけるといいですね。社会性グループの6本の柱で教育課程を立てている学校がありました。
- チェックリストチームとの「コラボ」もしくは「共同作業」が必要だと思う。チェックリストの根拠となる分かりやすいものをもっと少し時間をかけて作り上げたい。
- コミュニケーションの発達段階表一覧はとても価値ある資料だと思う。完成が楽しみです。
- 文献等を基に発達段階表を作成している過程は大変勉強になる作業であると思う。それぞれ検査についても, もしよければ学習会などを活用して教えていただければ, 他のグループの職員も大変勉強になると思います。ご苦労様でした。
- 子どもたちを見ている中でいろいろな文献が役に立っている。
- コミュニケーション, 運動・動作, 認知, 文献とグループ分けして研究をしていっているところ。
- 発達段階表を今後, 学校全体で活用できるといいと思う。
- 4つのグループがより細かく, かつ焦点を絞って研究が行われているのでとても分かりやすく興味深いです。発達が初期の児童生徒への対応に生かすカギになると思います。
- アセスメントの内容を整理したものを是非見たいです。大変な作業とは思いますが, よろしく願います。
- 発達段階表を活用したら, 重度重複障害の生徒の実態把握もしやすくなり, 個に応じた指導も可能になっていくのではと思っています。
- 発達段階を踏まえた指導はとても大切なので, 学校として共通のものができてくると, 共通認識のもと, 指導に当たっていただけるので, よい取組だと思う。
- 文献を参考に細かく発達段階表を作成することで, 児童の実態をより把握しやすくなると思いました。
- 発達段階表が作成されれば, いろいろな指導に活用できると思います。
- 様々な検査などを融合して発達段階表を作ることで, 総合的で分かりやすいものができると思った。
- 発達段階表の分野ごとに表を見直した点が良いと思う。
- 文献を基に発達段階表をそれぞれのグループで作成されており, アセスメントスキルの向上につながり, 活用することが出来るように思います。
- 児童生徒への関わりに役立つ発達段階表ができそうな予感がする。
- 各グループの検討の中でどれだけまとめることができるかで良いものになると思う。
- ベースとなる発達検査もあり, わかりやすいと感じました。チェックリストの国語グループとコミュニケーションがつながっており, このアセスメントが基になってくるのだろうと感じました。
- 研究していく中でたくさんの文献が必要である。良い資料があれば教えてほしいです。
- チェックリストグループとの連携で本校の研究を進められ, 検証もできると思います。去年はできなかった文献研究に基づくアセスメントの研究に期待したい。
- 四つの分野に分け, 各文献を基に, より質の高いアセスメントシートができることを期待します。
- 「社会性」「コミュニケーション」「運動・動作」「認知」の4グループに分けて, 文献研究をしながら段階表を作成していくという取組が良い。内容の充実を期待したい。
- 発達段階表の作成によって, よりよいアセスメントにつながるのではないかと思います。
- そのままチェックリストとして活用できるのではないかと感じた。発達段階表ができあがるのがとても楽しみです。
- 発達段階表…完成できたらチェックリストと一緒に各担任がチェックできる形になったら生徒のこともさらによく理解できそうですね。説明もとても分かりやすかったです。
- 発達段階やそれから得られる指導内容が細かく分かって良いと思いました。発達領域の関連性などについても興味深いと思いました。チェックリストと平行して使っていけば良いのか…?なども知りたいと思いました。

- 様々な文献をもとに発達段階表を作成していて、とても大変だけど有難いと感じた。チェックリストチームとかぶる部分がかかなりあると思うので、うまく支え合っていたらと感じました。
- 研究の流れと進捗状況が分かりづらかったです。あと 1 か月の取組に期待する。
- アセスメントとチェックリストは関連づける？
- 子どもの姿がよく分かるアセスメントが研究されていると感じた。チェックリストとアセスメントの活用において違いが分かりにくい気がした。
- チェックリストグループと大きく関わりがあるので、グループを合わせて研究を進めていくといいと思います。
- 運動・動作では、文章だけでは伝わりにくいものがあるので、イラストや写真などもあれば分かりやすいのでは…
- 身体的機能 etc 把握・理解していないと進めない取組だと思います。イラストや写真があるともっと分かりやすい。
- 発達段階表は、解答例のようなものがつく予定でしょうか。つくものなのか、つかないものなのか。
- 各グループの発達段階表は、チェックリストととても関連があるので、お互いの研究成果を照合させなければならないと思います。
- コミュニケーションの発達段階表についてですが、チェックリストチームの研究とも類似した部分があると感じた。将来的には一緒に取り組まれるのも一つのやり方だと思った。
- チェックリストと似ている部分があるのでは。
- 内容がチェックリストチームと共通するものがあるのではないか。ある程度まとまってきたら合同で見直しをするのも一つの方法かもしれない。(発達段階表とチェックリストと参考にする文献も同様なものがあるのではないか?)
- やっているときは思わなかったが、チェックリストとどう違うのだろうと思った中間発表。
- 「発達段階表」は「チェックリスト」とは違うのか。表を作ることでアセスメントスキルがどのように向上するのか。素朴な疑問ですが「アセスメント」をどう捉えているのか。昨年度と一貫した意味と捉えているのか。
- 「社会性」「コミュニケーション」「運動・動作」「認知」の発達段階と関連が整理されると、活用できてよい。

※ 今回の形式のように、発表後に用紙記入の時間が設定してあると意見が出しやすくていいですね。

《資料 5》

テーマ研究⑨「実践報告会」アンケート集約

平成 27 年 1 月 28 日(木)実施

1 実践報告会を受けて、各プロジェクト研究について、ご意見・ご感想などをお書きください。

(1) チェックリストチーム

- ・ より活用しやすいチェックリストになっているように思いました。
- ・ とてもよかった。
- ・ 説明時に表が分からなかったのですが、別紙とともに説明があると理解しやすかった。
- ・ 課題はあるが、チーム全体で見直しに取り組めたのでよかった。今後課題の解消に努め、全職員の使いやすいチェックリストにしていけたらよいと思う。
- ・ より使いやすいように小学部用・中学部用に分けたり時代や実態に合った表現に変えたりしてとてもすっきりして分かりやすくなったように感じました。
- ・ きれいに整理されていた。
- ・ 評価基準を統一し、内容や表現の見直しをして分かりやすくなったと思います。
- ・ 使いやすくなりよいと思う。
- ・ 項目がより具体的に評価が付けやすくなったと思います。生活の変化に合わせて道具や用具を変更する（生活面）ということは、これから活用していくとすれば何年かに 1 回見直しを行う必要が出てくると思いました。
- ・ 根拠が示されているのはよいと思う。
- ・ 丁寧にまとめられていた。
- ・ 分かりやすかった。
- ・ 学部を解いて作業はなかなか難しいものであるように感じた。
- ・ これまでのチェックリストをより分かりやすく見直しすることができてよいと思った。
- ・ 使いやすいもの、指導目標が立てやすいものに改訂されていると思います。
- ・ それぞれのチェックリストの見直しを行い、教師が寄りチェックしやすいものが作成でき、よかったと思います。
- ・ チェックリスト項目の改訂、解説書などの取組でよりチェックしやすくなったのではないかと思います。
- ・ チェックリストを使いやすくしてもらえたようでとてもありがたい。
- ・ 評価の方法、観点(?)を統一するのがよいと思った。
- ・ 活用しやすいための項目や評価基準が作成されておりよいと思った。
- ・ 活用しやすいチェックリストを作成できた。
- ・ 各グループで花井哀悼が行われながらも、互いに見合う時間もでき、よりつけやすいチェックリストになった。
- ・ 膨大な量の項目を整理してつかいやすくなるのは大変いいと思います。他項にない細やかさのあるチェックリスト、活用できるようにしたいです。
- ・ 整理されて見やすい、活用しやすい物になったと思う。今後も定期的な見直しが必要かもしれない。
- ・ 研究の目標とゴールがしっかりと明確になっていてわかりやすかった。実際のチェックリストが手元にあると意識も高く、『今』みつけられたのではないかと感じた。(あとで見るのは少し難しい)
- ・ チェックリストを活用しながら個別の指導計画との関連が図れるといいなと思います。評価しやすい分かりやすい、分かりやすいというところは大切だなと感じました。
- ・ チーフからも話があったように国語と算数・数学の様式を統一すると、なおチェックしやすい。
- ・ 作ったチェックリスト、説明文がここになれば考えようがない。準備不足。説明しても聞いている物は何も分からない。チェックはいつ、どのように活用するの？活用の具体性を。
- ・ 評価の方法を統一するのはとてもよいと感じた。
- ・ 職員がチェックリストをどこまで活用しているのかも一つの課題ではないかなと思います。これだけ活用しやすい見やすいチェックリストなのでもったいない(個人的に)。
- ・ 日生との関連したチェックリストは確認に使いやすいと思います。
- ・ 一つ一つの項目を細かく見直し、見直した理由(裏付け)もしっかりしていて分かりやすかった。
- ・ 「余暇」は地域ごとにサービスが違うが、項目が挙げられたことにより促進のヒントになる。
- ・ チェックリストの「社会生活」とアセスメントチームの「社会性」「コミュニケーション」はまとめられると活用しやすいのかなあ。
- ・ チェックリストをケース会でうまく活用できるといいなと思いました。

(2) 年間指導計画チーム

- ・ 他学部の年間指導計画との段階性が分かると、実態を踏まえて先を見据えた指導ができると思います。
- ・ とてもよかった。
- ・ 評価のしやすさも重要と改めて思った。
- ・ 生活単元学習、作業学習ともに一覧表がとても分かりやすく整理されており、継続性、一貫性のある指導ができるのではないかと感じた。
- ・ 単元目標を明確にすることで、他の作業班と指導を共有でき、一体となって取り組めるのでよいと思いました。
- ・ 系統的に整理されていた。
- ・ 学部間での共通理解や継続した指導につながると思います。
- ・ 生徒の目標を設定するときに決めやすい。
- ・ 生徒の評価をつけるときに、活用しやすいと思いました。
- ・ 他学部の流れも知ることができた。(一覧見やすかった。)
- ・ ねらいの取捨選択で見やすくなったと思う。
- ・ 目標を共通化し、見やすくなった分、より学部ごとの内容選定や工夫が大切になってくるんだなど実感した。
- ・ 生単の単元目標が他学部同じというのが気になりました。次年度検証していくなかで、成長・発達に応じた学部の目標を考えていくということですか？
- ・ 小・中・高、系統性のある単元一覧表は見やすくて分かりやすい印象を受けました。
- ・ 生単・作業など、小・中・高で項目の共通性、系統性ももてたように思う。
- ・ 「全職員が同じ視点で評価できる」というゴールが大事であると感じたが、本校の全職員だけでなく、本県のという広い視点における共通認識であると、次年度における実践がされて、今年度の取組の成果が出ると思う。
- ・ 小・中・高のものを系統的に見れるものができて素晴らしいと思った。プレゼンも分かりやすかった。
- ・ 小・中・高とつながっていく学習内容の目標の見通しがもててよいと思った。
- ・ 作業グループの取組とキャリア教育（作業）の取組が似ているところがある。
- ・ 個に応じた目標の継続性の例もあり、他学部とのつながりも分かりやすい。
- ・ 小・中・高で継続性のある指導につながる年間指導計画が作られたと思う。
- ・ 生単の単元にとらわれず、体育、その他の教科においても重複、目標設定の高さが逆になっているのもあるので見直すことも必要であると感じた。
- ・ 「一貫性、系統性」のある教育課程を作るということが具体的にできて大変良い研究だと思います。
- ・ 小・中・高の連携を取りやすいシステムができたのではないと思う。今後授業への生かし方等実践で検証していくことができれば良いのではないか。
- ・ 作業の同じ班（中・高）の一覧表になっているのだが、縦のつながりを意識できて良い。作業学習のなかで段階性が分かれているので指導の参考になる。
- ・ 作業学習の5つの視点に小学部のうちに身に付けておきたい力を示しておく、小学部からの系統性が見えてくるのかもしれないと思いました。
- ・ 生活単元一覧があることで、とても分かりやすかった。
- ・ 良く整理されていて、テーマを達成する取組、作成ができています。
- ・ 目標が多くなるのが気になった。目標一覧から学部ごとにつくつか目標を決め、高等部までの全ての目標を使用するという形でもよいのでは。
- ・ 分かりやすい。小・中・高の一貫性という点でとても効果的だと思う。生単のみでなくて国・算でも同様のものがいいと思う。基礎・定着・発展として達成度が分かる表記はすごくいい！誰が見ても評価しやすい。
- ・ 話し合いのなかで改めて小中高での統一性や確認の意味で大事な点などが意識することができるように思う。他学部の内容は、こういう場でないと把握できない。
- ・ 生単の内容など、小～高一貫性、系統性、すごく分かりやすかった。
- ・ 目標の段階性を細かく確認され、単元一覧表を整理され、活用しやすいと思った。すごい作業でしたね！！
- ・ 年間指導計画が横並びになると系統性を見られて良いなと感じました。

(3) キャリア教育チーム

- ・ 現在行われている内容がキャリア教育の 4 能力 16 項目の育成に十分相当する活動であることが分かっただけでも価値がある。
- ・ 授業改善シートを用いた授業を実践していきたいと感じた。
- ・ 年間指導計画にキャリア教育の観点をに入れていくことは、キャリア教育に対する意識の向上につながるのではないかと思う。
- ・ 目指す方向を明確にするということでキャッチフレーズを作成したことはとても良いと思います。実際に作成したキャッチフレーズも素敵だと思いました。
- ・ ねらいが明確化されていた。
- ・ 授業改善シートは、日々の業務の中での活用は負担にならないかな？と感じました。
- ・ キャッチフレーズは良いと思う。小・中では進路を意識することは少ないと思うので、キャッチフレーズを生徒に知らせることで、進路と日常生活がつながるのではないか。
- ・ 日々の授業でキャリア教育を意識できるということは良いと思いました。が、課題にもあったようにシートを毎回使うのは大変だと思いました。年間指導計画と組み合わせるともっと使いやすいなと思いました。
- ・ キャリア教育の視点も大切だと思った。
- ・ キャッチフレーズの作成は、まずは意識して取り組むことができるので良いと思った。
- ・ 日々の授業に反映できそうなので、是非取り入れていきたい。
- ・ キャリア教育について日々いかに意識を高めて授業実践していくかが大切なのだと再認識した。
- ・ キャリア教育についての各学部のキャッチフレーズは、イメージがもてるものだと思います。まとめにもあるように授業改善シートは、使いやすいもの・負担感の少ないものがよいと思います。
- ・ 小・中・高で系統性を持たせることで、一貫した指導ができると思います。
- ・ キャリア教育における視点を日々の指導に生かすための取組としての難しさを感じた。
- ・ 日々の授業の中でもキャリア教育の意識を高めないといけないと感じた。
- ・ 授業にキャリア教育の観点をクリアにして取り入れていけるのがよいと思った。
- ・ キャリア発達段階・内容表（試案）活用による観点位置付け・授業改善シートの取組が興味深い。
- ・ 小から中、中から高などの一貫性・継続性が大事だと感じる。出口を見据えた指導が必要だと思う。
- ・ 本校のキャリア教育について、土台から考え、グループで深められていた。
- ・ 普段、何気なく指導していることが、キャリア教育の項目に当てはまることが多くあるので、教師がしっかりその視点をもって指導することが必要だと感じた。
- ・ 大変よいキャッチフレーズができており、使っていくことが大切だと思いました。
- ・ 各教科・領域とのキャリア教育の関係を整理することで、日々の指導で意識することができるのでよいと思う。教育課程に反映させてよいかもしれない。
- ・ ねらいが少し大きく、グループに分かれての取組は素晴らしいと思うがもう少しじっくりと取り組めたらもう少し明確に「何をどうしたらキャリア教育の視点を取り入れられるか」が分かるのでは。
- ・ 日頃からやっていることがキャリア教育のどの視点にからんでくるのかをいつも意識しないといけないと感じます。
- ・ 一見分かりづらいので、視点が各指導の形態とマトリックスになることを考慮して、活用しやすい略案への挿入の方法等を実践する必要がある。
- ・ 直接的な動きが難しいので、年間指導計画と協同で年間指導計画の目標にキャリア教育の観点も入れられたらよいのでは、と感じた。
- ・ キャリア教育そのものがまだ浸透していない気がします。（個人的にもう少し研究しないと・・・）
- ・ 授業改善シート、大事ですよ。ただ毎回大変ですね。でも、そういう意識・視点で授業することが大切ですね。
- ・ 28 ページのキャリア教育の取組の構想図が分かりやすかった。日々の授業の中に負担なく・・・は大切だと思います。
- ・ キャッチフレーズがあると、全学部意識した取組ができると思います。

(4) アセスメントチーム

- ・ 発達段階表（□□が○歳くらい）を見て、気づきがあり勉強になった。
- ・ とてもよかった。
- ・ 実際の生徒のアセスメントの結果など、とても分かりやすく、学級の生徒も段階を知るためのアセスメントをしつかりしたいと思った。
- ・ 全体像のバランスのように多方面からみることで、獲得状況が分かり良かった。
- ・ 発達段階表がとても分かりやすく整理されており、すぐにでも使ってみたいと感じた。チェックリストとして、この発達段階表を活用してもよいのでは。
- ・ 発達段階表にまとめられており、とても分かりやすいと思いました。
- ・ 「アセスメント」を日本語表記に変えてほしい。
- ・ 児童生徒への声掛けや指導の際、とても分かりやすいと思います。
- ・ 発達段階表がまとまっていて分かりやすい。
- ・ 生徒事例でイメージしやすく分かりやすかった。
- ・ 発達段階表はすばらしい。
- ・ 資料がとても分かりやすくよかった。
- ・ 資料も分かりやすく、今後に生かしていきたい。
- ・ 発達段階表を各自踏まえて授業をするために、今回4つの発達段階表を研究していただいてまとめてもらったことは良いと思う。
- ・ 発達段階表とチェックリストをうまく融合させて児童生徒の実態把握と指導目標の設定指導へと繋げられると大変よいのだが と思った。発達段階表は大変参考になるものができ、活用したいと思いました。
- ・ 独自の発達段階表を実際に試ってみることで、担任が児童の実態を把握しやすくなり、指導に生かすために有効だということが分かりました。
- ・ アセスメントを活用して、指導の実態が分かり、指導に生かせるとよいと思います。
- ・ 今回作成されたアセスメントシートを活用する機会があると、もっと良さが分かったかなと感じる。
- ・ 作成された発達段階表を使い、じっくりクラスの子どもを見つめていきたい。
- ・ 発達段階表を取り入れて、指導や目標設定を行っていききたいと思った。
- ・ 社会性の発達についての資料が興味深かった。
- ・ 対象生徒の全体像、バランスが分かりやすかった。
- ・ 発達を知ることは、子どもの実態を知る上で欠かせないことである。発達段階表をぜひ活用したい。
- ・ 各児童・生徒によって発達の段階によっての指導は変わってきて、どこまで指導すれば良いのかをしっかりと教師側の考えをもつためにも、一人ひとりのアセスメントの必要性を感じた。
- ・ 児童の実態を把握する際に、発達段階表を利用していけば授業の中で生かしていける部分があると思いました。
- ・ 観点ごとに表にまとめられており、分かりやすいものができたと思います。
- ・ チェックリストチームと連携をとることで、より指導に生かしやすくなるのではないかと。
- ・ 発達段階表、とても素晴らしいと思います。児童・生徒の姿をありのまま受け止め、課題を設定するのに有効だと思います。
- ・ それぞれのグループで発達段階表を作成するのは大変だったが、とても勉強になった。じっくり文献研究することの大切さを感じた。
- ・ 発達段階表を使つてのバランス表は分かりやすい。
- ・ 経験スキルでできることだけでなく、基礎となることが分かるのは良いと思った。
- ・ 作成した表を使つてアセスメントができていますので、ぜひ担任で活用してほしい。
- ・ 全てのチームに言えるが、良いものができていると思います。それをどう使つた結果、子どもがどう変容したという実践研究にしてほしい。
- ・ 深く研究されていると感じた。発達段階表とチェックリストの違いというか、共有できるものがあれば、共有してよいのではないかと感じる。
- ・ 参考になる貴重な発表ありがたいです。
- ・ 時間が短くもっとゆっくり聞きたかったです。
- ・ 定義を細かく一つひとつ捉えてから発達段階表を使つてアセスメントしている発表はとても分かりやすかった。
- ・ 発達段階表を全児童生徒作れたらより細かいアセスメントができそうだと思います。

2 あなたが実感する（考える）今年度のテーマ研究の成果と課題についてお書きください。

(1) 成果

- ・ 4つのチームそれぞれに、今後に生かせる成果があったと思う。
- ・ 分厚い資料
- ・ 4つのグループそれぞれが中身の濃い研究をし、その成果となるものを形に残すことができたと思う。
- ・ 各チームによる研修が深められているように感じる。みんながそれぞれの内容を詳しく理解し、実践できるとすばらしいなと思います。
- ・ 小・中・高で進めることができ、プロジェクトの中で実態を考えながら進めることができた。
- ・ それぞれのチームがテーマについて深めることができた。
- ・ 今ある資料を見直し、整理することができた。
- ・ どのチームも素晴らしい資料ができたと思います。
- ・ 研究することで様々な検査があることを知った。
- ・ それぞれのグループごとに細かく研究が進められていたことが分かった。細かいという点では資料としては参考になるかもしれない。
- ・ 各チームがとても頑張っていたと思う。一人一人の指導の道筋が立てられるようになったと思う。
- ・ 分担して作業ができたので、負担も少なくてよかった。各チームの取り組みからたくさんのことを学ぶことができた。
- ・ 様々な角度から見直す良い機会となった。
- ・ 4グループの多方面で研究を進めていけたことが良かったと思う。
- ・ 各チームの目標に向かって素晴らしい成果があげられた研究だったと思います。回数が限られた中で年間指導計画や発達段階表等が作成できたのでは、先生方の努力と研鑽の結晶だと思います。
- ・ チェックリストは改訂版をつくることで、チェックがしやすくなり良かった。チェックリストがより活用しやすくなったのではないかと思います。
- ・ それぞれのチームの内容が今後に生かせることと思います。
- ・ 多方面に自立と社会参加を考えられると思った。この点を1年間で研究してきた点については成果と思う。
- ・ 一つ一つのプロジェクトがとても有意義で、全体テーマを構成するために欠かせないものであると感じた。
- ・ 小・中・高でつながりをもった評価や指導が行えるような研究が様々な視点からなされたこと。
- ・ 学部を越えて、一つの課題に対して意見を出し合うことができた。一つ一つのプロジェクトが一つで完結するものではなく、密接に関連していることが分かった。
- ・ 様々なテーマを深く考えることで新たな発見や指導法等を知ることができた。
- ・ 各プロジェクトのテーマに迫る研究ができていたと思う。
- ・ 各プロジェクトに研究を深められていると思われる。
- ・ それぞれのグループが目的を明確にして、それに対して研究をしていて素晴らしいと思いました。
- ・ 実践的な研究が数年続いていましたが、今回理論面について研究することができて、土台が作られた感じがして大変有意義でした。
- ・ それぞれのグループで行われた研修は、小中高の指導の一貫性ににつながるものが多かったと思う。
- ・ 各リーダーの先生が中心となり、“チーム”として同僚性を発揮し、年度当初の「研究のゴール」に沿った成果を確実に残すことができた。
- ・ それぞれとても内容の濃い研究ができていた。
- ・ それぞれのグループに分かれて「主体的」に研究に取り組めたこと。学部を越えた縦割りの研究で間接的にも連携できたこと。何より「0から発達段階表」を作成できたこと
- ・ 多方面において、継続性や一貫性について知ることができた。
- ・ チームの内容について、理解を深めることができた。
- ・ 全てのチームにおいて言えるが、よいものができていると思います。
- ・ それぞれのグループで深く研究を進めることができた。
- ・ アセスメントチームのコミュニケーションのチェックリストの作成。生単・作業の年間指導計画の作成。
- ・ それぞれ取り組みたかった内容だったので、集中して取り組むことができた。
- ・ 4つのグループが細かく裏付けされたデータをもとに児童生徒へ還元できる研究になっていると思います。
- ・ 各プロジェクトの研究を共有することで、指導計画や方法が充実していくと思われます。
- ・ それぞれのグループが使いやすさを考えながら、作成していたと思う。報告が私にも“分かる”ものだった。
- ・ 具体的に形になったものがたくさんあること

(2) 課題

- ・ 来年度の 3 年目にうまくつなげていければよいと思う。
- ・ テーマ研のグループで話した内容だが、1 つ 1 つのプロジェクトが大きい…学校全体で一斉に取り組んでいくような内容なので 3 年目の研究が大変になりそうですね。
- ・ 各チーム、各グループにそれぞれの成果と課題があり、課題だけを見ても増えたのかな？とってしまいます。ちょっと大変ですね。
- ・ 今後どのように教育活動に生かしていくか
- ・ もう少し時間が欲しいと思いました。
- ・ 資料を活発に活用していくこと
- ・ それを日々の授業、指導等でどれだけ活用できるか。
- ・ 生徒に生かしていきたい。
- ・ テーマ研は結局全員が共有できないとなかなか実践へ返すことができないが、今回の研究ではそれが可能なのでしょうか。もっとシンプルにはできないのでしょうか？
- ・ 内容が大きすぎたと思う。
- ・ 4 グループの方向性を大テーマのもと、一つの方向性にまとめていくことが大切ではないか。
- ・ 4 チームの関連性のうすさ
- ・ 一つの実践を通して、全体で研究する方が良いかと思います。
- ・ 内容が多すぎた（多岐にわたる）ため、まとまってどうあるべき研究テーマなのかという所がわかりづらいと感じた。
- ・ 一つ一つのプロジェクトが壮大すぎて全ては頭に入らなかった。一つだけをじっくりみんなで考えたいとも思った。
- ・ A～D グループで関連させていけるところがあれば、まとめていけば分かりやすいかなと思います。
- ・ 今回の成果がベストかはやってみないと分からない。今後も継続して考えられるようにすることが大切だと感じた。
- ・ 各プロジェクトでの成果をどのように関連付けていけるか。
- ・ 今回のものを授業に生かさせていけるようにしていくことが大切です。アセスメントチームが行った具体的なアセスメントがいい指針になるかと思いました。
- ・ 他のグループの内容について報告を聞くだけでは把握が難しいのでグループ同士の研究の関連性を明確にするとともにグループの数をしぼっても良いのではないかと。
- ・ それぞれ取り組んだものをじっくり読んで把握すると各職員の力にもなるが…なかなか理解まではいかないかもしれない。
- ・ もう少しグループ内でもそれぞれの成果を共有する時間が欲しかった。作成したことで終わらずに実践につなげるための方策を考えること。
- ・ プロジェクト一つ一つの内容が大きすぎる気がしました。それぞれ重なっている部分もあるし、研修したことをそれぞれ実践していくのは大変だなと思いました。
- ・ 日々の授業と研究をどの程度関連させられているか。研究の成果が日々の授業に生かさせるか。
- ・ 全てのチームが作成したよいものをどう使った指導、子どもがどう変容した、という実践研究にしてほしい。
- ・ 各グループの深い研究を全て実践するのは難しいので、日々の教育活動で生かしていくための工夫が必要だと感じた。
- ・ 国語、算数・数学の年間指導計画の見直し、作成
- ・ 一つ一つが学校全体で取り組むべき内容、レベルのもので、一部の人たちの意見で取り組めるものではない。
- ・ 日々の実践への生かし方

3 来年度テーマ研究※について、具体的な方向性・研究方法・成果の形についてアイデアやご意見がありましたらお書きください。

※ 平成 28 年度が本研究 3 年計画の 3 年目となります。なお、「かごしま学力向上プログラム」における授業公開（予定：10月14日）と連携した内容となります。

- ・ 3年間取り組んできた成果があった！良かった！と思えるような内容になればいいと思います。
- ・ シンプルな具体実践（今年度で理論研究は終了したので）授業力向上となる取組
- ・ それぞれのチームがより深めていく
- ・ 4つのプロジェクトの成果を実践にどう生かすかということに尽きるのでは？シンプルで使いやすいようなものに絞り込むのでない？を広げすぎると…。
- ・ 大テーマのまとめの年なので、今年度の研究をさらに踏まえた研究のまとめとなっていくらと思えます。
- ・ 4つの研究がきちんと関連づけられた研究 アセスメントとチェックリストを用いた実態把握、年間指導計画とキャリア教育指導計画、チェックリスト項目の検証
- ・ 4つのグループに原則残って、さらに研究を深める段階をしても良いと思う。グループ毎の実践を研究の成果として取り上げて良いのかなと感じた。
- ・ 1年目、2年目の研究を踏まえて、1・2年目の研究をもとにして更に深められればと思います。係の先生方、本当にお疲れ様でした。
- ・ 今年度の研究内容を授業を通して検証する。
- ・ 今年の研究をうまく取り入れられると良いのですが…
- ・ すぐに授業につなげなくても良いと思う。全てのことは「指導」につながっているので、公開授業と研究を少し離して考えるのも必要ではないでしょうか。
- ・ 多方面に及んでいるので、教科かどこかのプロジェクトの一つにしぼって10月の公開に向かって進んでいくといいのかなと思いました。
- ・ 四つのチーム（または一部のチーム）について授業実践を通した取組を行う。日々の実践・授業の中で今年度の取組が活用できるか。
- ・ 今年度は4つのグループに分かれ、それぞれを深まったので、関連付けつつどれか一つ二つにテーマをしぼった方が良いのではないかと感じる。
- ・ どこかのグループに焦点化して全員で取り組めたらと思います。
- ・ 「全職員がすべきことをみんなで研究してみよう」がテーマ研だと思えます。どんだんグループが分かれてテーマが増えすぎています。どれか一つにしぼってみんな（全職員）で実践しましょう。アセスメントのバランス表を作り、ケース会で実践（目標→評価）するとかどうですか。
- ・ やることが盛りだくさんなので、ある程度やることをしぼって学校全体で取り組むことができると良いと思った。4つのグループの取組を全部やることは難しいと思うので、思い切って何処かの取組は切る、合わせてやるのもありだと思いました。
- ・ チェックリストやアセスメントなど学部ごとに生徒を抽出して、共通理解、検討できると指導の充実につながりやすいと思われます。

お わ り に

本校は、平成 23 年度から平成 25 年度までの 3 か年において「かごしま学力向上プログラム」における授業公開及び研究授業に関する取組として、インシデントプロセス法を用いた授業研究を重ね、授業作りや授業者支援の在り方や方法等について研究を深めてきています。平成 26 年度県特別支援教育研究会大島大会に係る授業公開や平成 27 年度県音楽教育研究会の特別支援学校の研究授業と授業研究で、その研究成果を踏まえて授業を提供することができています。本校では、日々の教育実践を積み重ね、特別支援教育の推進に向けて、授業公開や巡回相談等を通して、大島地区の各学校での特別支援教育の研究にも反映できる取組が続けられてきています。

さて、平成 28 年 4 月 1 日の「障害を理由とする差別の解消に関する法律（障害者差別解消法）」の施行を前に、各学校において特別支援教育が整備されていく中、インクルーシブ教育システムの構築に向けて「合理的配慮」の提供が計画的に推進されていることと思います。

今後、ますます特別支援学校がモデルとなり、幼保小中高等学校で困っている幼児児童生徒が学びやすくなる環境を作ることや学びを保障することが大切になってきます。

本校は、テーマ研究を通して、児童生徒の実態把握を通して課題に向き合い、課題解決に向けた取組を計画的に進めています。平成 27 年度は、3 か年計画の 2 年次として「研究のまとめ」と「別冊資料集」を作成しました。

平成 28 年度は、「かごしま学力向上プログラム」における授業公開及び研究授業を 10 月に予定していますが、本年度作成した「資料集」を基に全職員で一人一人の課題解決に向けた授業づくり等に取り組んでいく計画を進めています。

2 か年間の研究の成果を冊子としてまとめましたので御一読いただき、御意見をお寄せいただければ幸いに存じます。

最後に、本校では学校評価の「自己評価」や外部アンケートを基に学校運営の改善に取り組んでいるところです。本年度の学校評価（中間）で課題として見えてきたものの一つに、「進路指導の充実（評価点：3.26）」がありました。この課題は本研究テーマの一つでもあったことから、この課題に関して 2 学期以降に研究に取り組んだことで、最終評価の評価点が 3.55 と 0.29 ポイント向上することができました。このことから、本校の課題解決に向けて、テーマ研究の実践が学校運営の改善に結びついたものと思います。

平成 28 年 3 月

教 頭 上 原 峻

研 究 同 人

【校長】 中村 周一郎

【教頭】 上原 峻

【事務長】 梶原 成人

小学部		
飛原中富竹永石山藤団美今嘉平尾東松吉	永水岡崎野原下尾塚座村村前元岡	雄一郎 正憲仁帆記佳子生香ミ 教夏浩由優晃友ル あか三徳千誠明真聖

中学部		
藤馬川前小二高若宮駒岩板前田古	山場村瀉倉木野松崎走本敷山浦村	美由紀 真雄一郎 久美子彦香一 寿智博千 俊真由 大優清洋

高等部		
栞島東坂久濱渕大川永日栞徳上有米小菊国内宮ノ里神北下春東岩平中元中和原小	田元保田上重畑正高木重園満里野田分山前原野口元村尾田口牧	哲也香也夫子美一郎平希人子翔二子利みな一菜子織志一郎志春二史紀子保毅宏胤か 理和輝香菜代新一耕真彰貴 浩菜穂勝み恭裕佳沙真康慶貴千陵和美麻志明麗えり 菜美平希人子翔二子利みな一菜子織志一郎志春二史紀子保毅宏胤か

養護教諭		
塗島	木元	ひろみ 渚紗

事務部		
柳小山龍津福	山田田川田	正和 孝一郎 興弘 智和

栄養教諭		
飛松	佳子	

訪問教育非常勤講師		
芳春	村山	美聡 梅乃

特別支援学校看護師		
碓與	山由美乃 ひより	

合理的配慮協力員		
山名	友香	

H26年度転出					
中大實板寺	村瀧島坂下	かおり 梨あや 佑美子 悟子	栄墓緒平山	華武世知	子志晶奈穂
					宝最前前榮
					上田原
					政淑み修香
					樹子ゆき一菜子

平成27年度 テーマ研究係から

私たち特別支援教育を実践する教師は、子どもの実態を把握するために多各面からの発達段階を知っておく必要があるとつくづく感じた1年間でした。チームで共有できて良かったです。

小学部 団塚 ルミ

チームの先生方のご協力のおかげで改訂版(案)ができました。ありがとうございました。次年度は子どもの実態を把握し、指導にきちんと生かせるような研究になったらと思います。

小学部 東 明美

テーマ研究をとおして改めて子どもときちんと向き合い、丁寧に関わっていくことの大切さに気付くことができました。研究を進めるにあたって、御協力ありがとうございました。大変、心強かったです。

中学部 前潟 久美子

チーム力に感謝！

研究のゴールへ向け、プロジェクトリーダーを中心にチームで進むことができました。個人では絶対にできないなあ～としみじみと実感。今年度も感謝！おかげ様でした☆

中学部 板敷 大和

一年間お疲れさまでした！

一人の生徒の実態を考える際に、多くの視点が必要であることを改めて実感したテーマ研究でした。

アセスメントチームの先生方、御協力ありがとうございました！

高等部 東 和史

ありがとうございました！

たくさんのアドバイスや協力をしてくださった先生方、本当にありがとうございました。

今年したことを少しでも来年度につなげていけるようにしていきたいです。

高等部 東和也